

ISSN 0919-2417

# エジプト学研究 第26号

The Journal of Egyptian Studies Vol.26

2020

日本エジプト学会  
The Japan Egyptological Society

# エジプト学研究第 26 号 2020 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.26, 2020

## 目次

### < 調査報告 >

2019 年 太陽の船プロジェクト 活動報告 .....	黒河内宏昌・吉村作治 .....	3
第 4 次北サッカー遺跡調査概報 ..... 河合 望・吉村作治・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 サリーマイクラム .....		12
第 5 次北サッカー遺跡調査概報 ..... 河合 望・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花 馬場悠男・坂上和弘・サリーマイクラム .....		32
北サッカー遺跡出土の単純埋葬遺体の形質人類学的調査 .....	坂上和弘・馬場悠男 .....	62
2019 年度北サッカー調査における動物遺存体とミイラに関する調査概報 .....	サリーマイクラム .....	66
第 12 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報 ..... 近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合 望・高橋寿光・福田莉紗 .....		74

### < 研究ノート >

エジプト、ダハシュール北遺跡の青色彩文土器について .....	高橋寿光 .....	88
---------------------------------	------------	----

# The Journal of Egyptian Studies Vol.26, 2020

## CONTENTS

### Field Reports

- Report of the Activity in 2019, Project of the Solar Boat  
..... Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA ..... 3
- A Preliminary Report on the Fourth Season of the Excavation at North Saqqara  
..... Nozomu KAWAI, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Kazumitsu TAKAHASHI,  
Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI, Kanami SUGANUMA and Salima IKRAM ..... 12
- A Preliminary Report on the Fifth Season of the Excavation at North Saqqara  
..... Nozomu KAWAI, Sakuji YOSHIMURA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,  
Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI, Hisao BABA,  
Kazuhiro SAKAUE and Salima IKRAM ..... 32
- Anthropological Study of the Human Skeletal Remains from North Saqqara  
..... Kazuhiro SAKAUE and Hisao BABA ..... 62
- Brief Report on Work Carried Out During the 2019 Season of the Japanese-Egyptian Mission to North Saqqara  
..... Salima IKRAM ..... 66
- Preliminary Report on the Twelfth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda  
University Egyptian Expedition  
..... Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI,  
Kazumitsu TAKAHASHI and Risa FUKUDA ..... 74

### Articles

- The Blue-Painted Pottery Vessels from Dahshur North ..... Kazumitsu TAKAHASHI ..... 88

# 2019年 太陽の船プロジェクト 活動報告

黒河内 宏昌\*<sup>1</sup>・吉村 作治\*<sup>2</sup>

Report of the Activity in 2019, Project of the Solar Boat

Hiromasa KUROKOCHI\*<sup>1</sup> and Sakuji YOSHIMURA\*<sup>2</sup>

## Abstract

### 1. Summary

This is a report of activities of the Solar Boat (the Second Boat of King Khufu) project in 2019.

### 2. Extraction of the wooden pieces

Almost all wooden pieces in the pit were extracted. Total number of extracted pieces was about 1200 including 105 large ones whose length is over 4 meter. Small fragments of wooden pieces and powder of lime stone which remains on the bottom of the pit yet will be removed in the near future.

Shape and dimension of almost all wooden pieces are exactly same as those of the First Boat. That means they are basically the ships of same type. But there are some differences also, for example, we found a lot of steering oars of about 3~4 meters in the second Boat which the First Boat doesn't have.

### 3. Conservation

Almost 1100 wooden pieces are conserved until the end of 2019. The conservation work is being done by the conservators together with archaeologists who know the knowledge of shipbuilding well.

### 4. Measuring and study on reassembling

Almost all wooden pieces conserved are finished being taken measurement and drawn manually. And conjewctural restoration of the canopy at the stem and structure of fixing steering oars are studied. The 1/10 and 1/20 scaled model are now being made with the instruction of Dr.Hiroko Uchiyama, Joshibi University of Art and Design.

On the other hand 3D scanning of the planks of the hull are continued by Egyptian staff with the instruction by Dr.Oishi and Dr.Kagesawa, the Institute of Industrial Science, University of Tokyo.

### 5. Transportation of the wooden pieces to GEMCC (the Grand Egyptian Museum Conservation Center)

Almost 900 wooden pieces were transported into GEMCC.

### 6. Public relation

The procedure of this project was reported in a special TV program, three symposium and nine academic conference and theses.

---

\* 1 東日本国際大学エジプト考古学研究所教授

\* 2 東日本国際大学学長／早稲田大学名誉教授

\* 1 *Professor, Higashi Nippon International University,  
Institute of Egyptian Archaeology*

\* 2 *President, Higashi Nippon International University  
Professor Emeritus, Waseda University*



太陽の船（クフ王第二の船）発掘・保存・組み立て復原プロジェクトの2019年の活動を、以下の項目別に報告する。

1. 概要
2. 部材の取り上げ
3. 保存修復
4. 測量・復原考察
5. GEMCC への移送
6. 広報および学術発表

## 1. 概要

本プロジェクトは、ギザ遺跡・クフ王ピラミッド南面足元に設けられたピットに分解されて収蔵されているクフ王第2の船の部材をピットから取り上げ、保存修復を施し、組み立て復原することを目標としている。2020年3月までにピットから部材をすべて取り上げ、保存修復し、組み立て復原像を示すスケジュールで作業を進めており、2019年はその最終盤の年となる。

クフ王第2の船は将来的に、現在日本からの円借款で建設中の「大エジプト博物館（Grand Egyptian Museum）」にて組み立て復原、展示される予定であり、その関連から本プロジェクトのエジプトでの活動費は、国際協力機構（以下 JICA）から「大エジプト博物館建設事業実施促進支援業務（第二の太陽の船復原に係る技術支援）」第2フェーズ（期間は2016年7月～2020年3月までの3年9カ月）として支援を受けている。また研究面に関しては、2019年3月まで JSPS 科研費 26257309 助成「古代エジプト・クフ王第2の船の復原に関する研究」（研究代表者：黒河内宏昌）の支援を受けた。さらに NPO 法人太陽の船復原研究所の資金も活用して、プロジェクト全体を進めた。

以下、2019年の活動に参加したメンバーを列記する（敬称略）。

### A. 日本側メンバー

吉村 作治	〔代表〕
黒河内 宏昌	〔現場主任〕
高橋 寿光	〔取り上げ〕
リチャード・ジャスキ	〔保存修復〕
西坂 朗子	〔 〕
吉村 佳南	〔 〕
柏木 裕之	〔測量〕
山田 綾乃	〔 〕
大石 岳史	〔三次元測量〕
影沢 政隆	〔 〕
根本 卓	〔 〕
吉村 龍人	〔現地事務所所長〕
ユーセフ・カーリッド	〔現地事務所技師〕
岩出 まゆみ	〔広報〕

## B. エジプト側主要スタッフ

マムドゥーフ・ターハ	〔考古学スーパーバイザー〕
アイーサ・ジダン	〔保存修復スーパーバイザー〕
エザト・フセイン	〔チーフワーカー〕

活動は通年に渡って行い、現場事務所長（吉村龍人）やエジプト人のスーパーバイザーによって運営された。また現場主任（黒河内宏昌）は約8カ月（228日）間エジプトに滞在して現場を指導、管理した。

## 2. 部材の取り上げ【図版1～3】

第1の船と異なり第2の船の部材は劣化が進行しており、とくにピットの底に近い部材は破損が激しく、ピットからの部材の取り上げは困難を極めたが、2019年末までにほぼ終了した。2013年の部材取り上げ開始から通算すると、部材の総数は約1200点となり、長さ4メートルを超す大型部材は105点を数えた。ピットの底にはなお小さな部材の破片が残っているが、これらを接合して復原することは難しく、今後回収して保存する予定である。またピットの底にはピットを掘削した際に出たと思われる石灰岩粉が数センチ厚に積もっているが、これらのクリーニングも今後行う予定である。

取り上げた第2の船の部材は形も寸法も第1の船とほぼ同一で、基本的には2隻は同型艦、姉妹船と言えるものであったと思われる。しかし第1の船が長さ8～9メートル長い櫂を12本持っていたのに対し、第2の船のピットからは同様の櫂は8本、そして長さ4メートル前後の櫂が多数出土しており、船の形状に異なる部分があったことが取り上げ作業からうかがわれた。

## 3. 保存修復【図版4、5】

2019年末までに約1100点の部材の保存修復を終えた。ピットの底付近には破損した部材が多く、保存修復は劣化した木材を薬品で強化する「強化処理」のみならず、破損してばらばらになった木片をパズルを解くようにして接合し、できるだけ元通りの形に戻す「部材の復原」も主な作業となった。

部材の復原に関してはコンサベーター（保存修復士）のみならず、部材の測量と図化を担当しクフ王第2の船の造船技術の知識を蓄積している考古学、建築学のスタッフが協力して行っている。こうした共同作業はエジプト考古省の専門家が作業を行う現場ではあまり一般的なことではなく、当初は混乱も見られたが、本プロジェクトにとっては大変有効な手段であり、将来的な船の組み立て復原においても積極的に続けていくつもりである。

一方、部材から採集したモルタルや顔料などを科学的に分析し、成分や有機物質の有無を解析した。

## 4. 測量と復原考察

### (1) マニュアル測量【図版6～8】

2019年末までに保存修復を終えたほぼすべての部材のマニュアル測量を終えた。そして船首楼、および漕ぎ櫂周りの復原考察を行った。船首楼は第1の船と類似の構造だが、第1の船には固定のための部材がなかったのに対し、第2の船では甲板に柱穴が穿たれており、そこで固定することが可能となっている。また漕ぎ櫂は、船体に「銅製部品が装着された板状部材」などにより付加的に設置されていたと思われ、銅製の漕ぎ櫂受け部品の数から方舷26本、両舷で計52本が備えられていたことが分かった。

なおこの復原考察を検証すべく、1/10スケール（女子美術大学内山博子研究室）と1/20スケール（現場のエジプト人インスペクター・コンサベーター）で模型を作製している。

## (2) 三次元測量【図版9】

三次元測量は、レーザースキャナー〔Zoller+Fröhlich社製「Z+F Imager 5010」、クラウドファンディング「人生最後の挑戦！ピラミッドの謎解明の鍵を握る太陽の船復原へ！」（代表：吉村作治、協力：READYFOR株式会社）により2018年に購入〕をエジプトの現場に常設し、東京大学生産技術研究所大石岳史研究室によりエジプト人スタッフに技術移転をしながら三次元測量を行った。現在は主に船体を構成する舷側板、船底板を対象としており、部材の「スキャニング」と、スキャンして得た部分的なデータを合成し部材全体の三次元データを作成する「アラインメント」の作業を、エジプト人が担当できるようになった。

## 5. 大エジプト博物館保存修復センター（Grand Egyptian Museum Conservation Center）への移送

測量を終えた部材を現場で木箱にパッキングし、考古省のトラックにて「大エジプト博物館保存修復センター」の有機遺物収蔵室、および非有機遺物収蔵室に設けた特設収蔵スペースに移送した。2019年末までに約900点の部材を現場から送り出している。

## 6. 広報および学術発表【図版10】

2019年の主な広報活動、学術発表は以下の通りである。

### (1) 行事・報道・TV番組

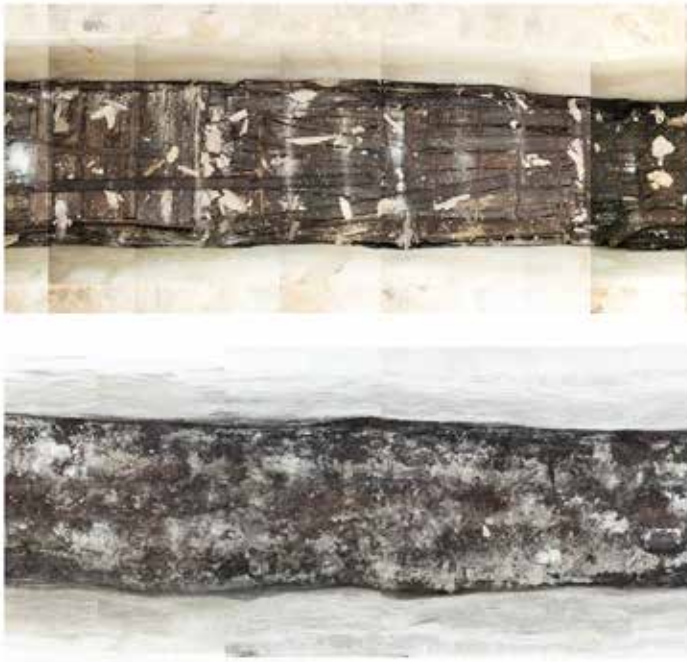
- ①「トラベルスタディ・太陽の船発掘現場を見学するツアー」〔東日本国際大学いわき短大協賛、福島民報社協力〕の日本人団体ツアー（約40名）が2月19日に現場を見学。2月20日福島民報ニュースで紹介。
- ②ムスタファー・マドブリー氏（エジプト・アラブ共和国首相）、カーリッド・エル・アナーニ氏（エジプト・アラブ共和国考古大臣）、アテフ・モフターハ将軍（GEM館長）訪問がエジプトで報道される〔Masrawy (<https://www.masrawy.com/news/news-videos/details/2019/6/15/1584938>) 他〕、2019年6月15日。
- ③“真相解明！ピラミッドの正体～鍵はツタンカーメンと太陽の船～”（製作著作；RKB毎日放送、監修；吉村作治、出演；吉村作治・橋本マナミ）、TBS系列全国ネット放映。2019年12月8日。
- ④国際カンファレンス“The Twelfth International Congress of Egyptologists”（Ministry of Antiquities, International Association of Egyptologists 主催）にて、吉村作治代表が長年のエジプトでの考古学的業績により表彰された（他の表彰者はピラミッド研究の権威マーク・レーナー氏（アメリカ）、ダハシュール地区の権威ライナー・シュタデルマン氏（ドイツ）、エジプト人考古学者の第一人者ザヒ・ハワス氏（エジプト））。

### (2) シンポジウム

- ①第8回太陽の船シンポジウム開催（於早稲田大学小野梓記念講堂）。満員（200名）の会場で大石岳史氏（東京大学生産技術研究所准教授）、影沢政隆氏（同助教）が三次元測量と復原考察について講演。緑川浩司氏（東日本国際大学理事長）、竹下昌孝氏（JICA中東欧州部中東第一課課長）が挨拶。2019年5月27日。
- ②黒河内宏昌、『大エジプト博物館合同修復プロジェクトシンポジウム「ファラオの至宝をまもる2019」』（主催：国際協力機構（JICA）、日本国際協力センター（JICE）、東京藝術大学、於：TKP京都四条烏丸カンファレンスセンター）パネルディスカッションにパネリストとして参加。2019年9月1日。
- ③Sakuji Yoshimura, “Conserving the Second Boat of Khufu”, 国際シンポジウム“Egyptological Research in Museum and Beyond”「博物館とその周辺のエジプト学研究的の最前線」〔主催：CIPEG（国際博物館会議エジプト学国際委員会）日本委員会、於：東京文化財研究所〕。2019年9月10日。

## (3) 学会発表・刊行物

- ① 柏木裕之、山田綾乃、「クフ王第2の船 船首楼 ―実測調査報告その3―」、『昌平エジプト考古学紀要第7号』、東日本国際大学昌平エジプト考古学会編、pp.3-10、2019年1月15日刊行。
- ② 高嶋美穂、苅野茉央、中沢隆、谷口陽子、西坂朗子、アイーサ・ジダン、「クフ王第2の船出土遺物の有機物質の分析」、『昌平エジプト考古学紀要第7号』、東日本国際大学昌平エジプト考古学会編、pp.11-20、2019年1月15日刊行。
- ③ 阿部善也、扇谷依李、和泉亜理沙、中井泉、「クフ王第2の船出土遺物の非破壊オンサイト分析」、『昌平エジプト考古学紀要第7号』、東日本国際大学昌平エジプト考古学会編、pp.21-34、2019年1月15日刊行。
- ④ 黒河内宏昌、「古代エジプトクフ王第2の船発掘・保存・組み立て復原プロジェクトーエジプト・ギザ遺跡・2018年ー」、西アジア発掘調査報告会ー2018年度発掘調査の速報ー、日本西アジア考古学会・古代オリエント博物館主催、2019年3月24日。
- ⑤ 黒河内宏昌、吉村作治、「2018年太陽の船プロジェクト活動報告」、エジプト学研究第25号、pp.44-51、2019年3月。
- ⑥ 黒河内宏昌、「古代エジプト・クフ王第2の船の組み立て公開展示に向けたマスタープラン」、日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）、pp.67-68、2019年9月6日。
- ⑦ 柏木裕之、山田綾乃、「クフ王第2の船・銅製部品が装着された板状部材の機能同定」、日本オリエント学会第61回大会ポスターセッション（大会は台風のため中止となったが予稿集により発表内容は公表されている）、2019年10月12日、13日。
- ⑧ Hiromasa Kurokochi, Eissa Zidan, Mamdouh Taha and Sakuji Yoshimura, “Report on the Procedure of the Khufu Second Boat Project”, The Twelfth International Congress of Egyptologists (Ministry of Antiquities, International Association of Egyptologists 主催) 国際学会口頭発表, 2019年11月5日。



図版1 ピット俯瞰写真（部分）、部材取り上げ開始前（上）、  
部材取り上げ終了後（下）  
Fig.1 Birdeye view of the pit (part), before starting extraction (above),  
after finishing extraction (below)



図版2 取り上げ終了後のピット内部  
Fig.2 View after finishing extraction of the wooden  
pieces



図版3 最後の舷側板の取り上げ  
Fig.3 Extraction of the last plank of the hull



部材番号 O1136-1  
Piece no. O1136-1



部材番号 O1136-2  
Piece no. O1136-2



部材番号 O1136-3  
Piece no. O1136-3

図版4 取り上げ直後の舵櫂（部材番号 O1136）、三つに分かれていた  
Fig.4 Rudder (piece no. O1136) after extraction, it was broken into three parts



図版5 保存修復後の舵櫂（部材番号 O1136）  
Fig.5 Rudder (piece no. O1136) after conservation and restoration

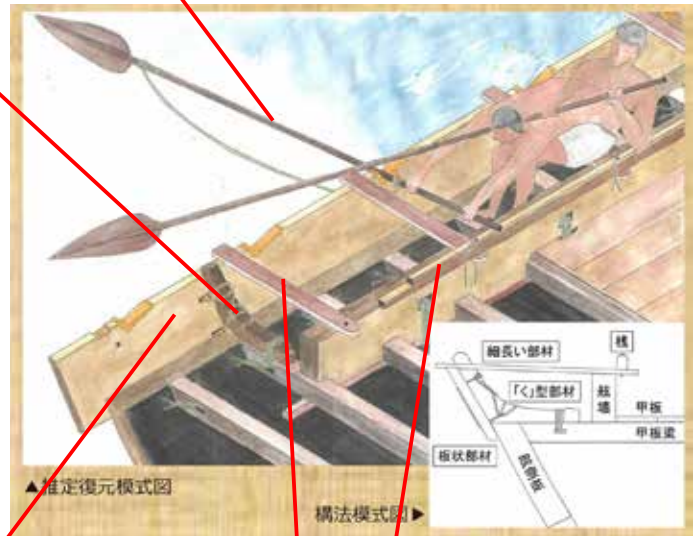




オール  
Oar



銅製部品を装着した板状部材を支える「く」型部材  
Piece for supporting the wooden board equipped with copper parts



漕ぎ櫂周りの復原  
Conjectural restoration of timbers for fixing oars



銅製部品を装着した板状部材  
The wooden board equipped with copper parts



漕ぎ手用の座席  
Seat for rower



座席固定用の棧  
Wooden timber for fixing the seats

図版6 漕ぎ櫂周りの復原考察  
(柏木裕之、山田綾乃、「クフ王第2の船・銅製部品が装着された板状部材の機能同定」、  
日本オリエント学会第61回大会ポスターセッションより)  
Fig.6 Conjectural restoration of timbers for fixing oars



図版7 船底板（部材番号 O1020）の三次元測量イメージ、二つに分割して取り上げ、保存修復が行われた  
 Fig.7 3D scanning image of the bottom plank (piece no. O1020), The piece was extracted and conserved divided into 2 pieces.



図版8 トラベルスタディの日本人ツアーに  
 現場を解説する吉村作治代表（右端）  
 Fig.8 Explanation by Dr.Sakuji Yoshimura (right end) to  
 the 'Travel study' Japanese tour visitors



図版9 エル・アナーニー考古大臣から  
 表彰を受ける吉村作治代表  
 Fig.9 Dr.Sakuji Yoshimura received the  
 prize from Minister Dr.Khaled El Anani  
 at "The Twelfth International Congress of  
 Egyptologists"



図版10 TBS 系列全国放送“真相解明！ピラミッドの正体～鍵はツタンカーメンと太陽の船～”  
 （製作著作：RKB 毎日放送、監修：吉村作治、出演：吉村作治・橋本マナミ）  
 Fig.10 Special TV program was nationwide broadcasted by TBS network on December 8th, 2019.



## 第4次北サッカラ遺跡調査概報

河合 望<sup>\*1</sup>・吉村 作治<sup>\*2</sup>・柏木 裕之<sup>\*3</sup>・高橋 寿光<sup>\*3</sup>  
米山 由夏<sup>\*4</sup>・石崎 野々花<sup>\*5</sup>・菅沼 奏美<sup>\*6</sup>・サリーマ イクラム<sup>\*7</sup>

### A Preliminary Report on the Fourth Season of the Excavation at North Saqqara

Nozomu Kawai<sup>\*1</sup>, Sakuji Yoshimura<sup>\*2</sup>, Hiroyuki Kashiwagi<sup>\*3</sup>, Kazumitsu Takahashi<sup>\*3</sup>  
Yuka Yoneyama<sup>\*4</sup>, Nonoka Ishizaki<sup>\*5</sup>, Kanami Suganuma<sup>\*6</sup>, and Salima Ikram<sup>\*7</sup>

#### Abstract

The Japanese-Egyptian mission to North Saqqara conducted the fourth season from February 19 to March 7, 2019. This project aims to search the location of the previously unknown New Kingdom cemeteries at North Saqqara and excavate them. In this season, we carried out excavation to the north of the trench C, which is located on the slope of the eastern escarpment between the old Inspectorate building and the old British mission's dig house. This paper reports the result of the fourth season of the project.

In the course of the excavation, we found a limestone wall extending a south-north direction, which can be interpreted as a kind of façade of something located underneath. Under the limestone wall, we found a rock cliff where a vault structure which may be connected to the entrance of a rock-cut structure was uncovered. There are two vertical limestone walls perpendicular to the aforementioned limestone wall found above. To the east of the limestone façade, we uncovered a debris deposit of pottery and terracotta figurines dating to the Roman Period. In the same layer, we uncovered three intact simple burials dating to the Roman Period. It is hoped that the entrance of the rock-cut structure will be identified in the coming season.

#### 1. はじめに

古代エジプト新王国時代の北の中心地であったメンフィスの墓地であるサッカラについては、その重要性にも関わらず、これまで網羅的な調査が実施されてこなかった。サッカラにおいて新王国時代の墓を新たに発見、調査することにより、これまで南の中心地テーベに偏重してきた新王国時代史の再構築が期待される<sup>1)</sup>。

このような問題意識のもとに、2015年度から科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術調査)「エジプト、サッカラにおける新王国時代の墓の調査研究」(研究代表者:河合望(金沢大学)、課題番号:15H05163)の助成を受け、

\* 1 金沢大学新学術創成研究機構教授

\* 2 東日本国際大学学長 / 早稲田大学名誉教授

\* 3 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授

\* 4 鶴見大学大学院文学研究科博士後期課程

\* 5 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程 /  
日本学術振興会特別研究員

\* 6 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

\* 7 カイロ・アメリカン大学社会学エジプト学人類学科教授

\* 1 *Professor, Institute for Frontier Science Initiative, Kanazawa University*

\* 2 *President, Higashinippon International University / Professor Emeritus, Waseda University*

\* 3 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*

\* 4 *Doctoral Student, Department of Cultural Properties, Tsurumi University*

\* 5 *Doctoral Student, Department of Archaeology, Waseda University / Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science*

\* 6 *MA Student, Department of Archaeology, Waseda University*

\* 7 *Professor, Department of Sociology, Egyptology and Anthropology, American University in Cairo*

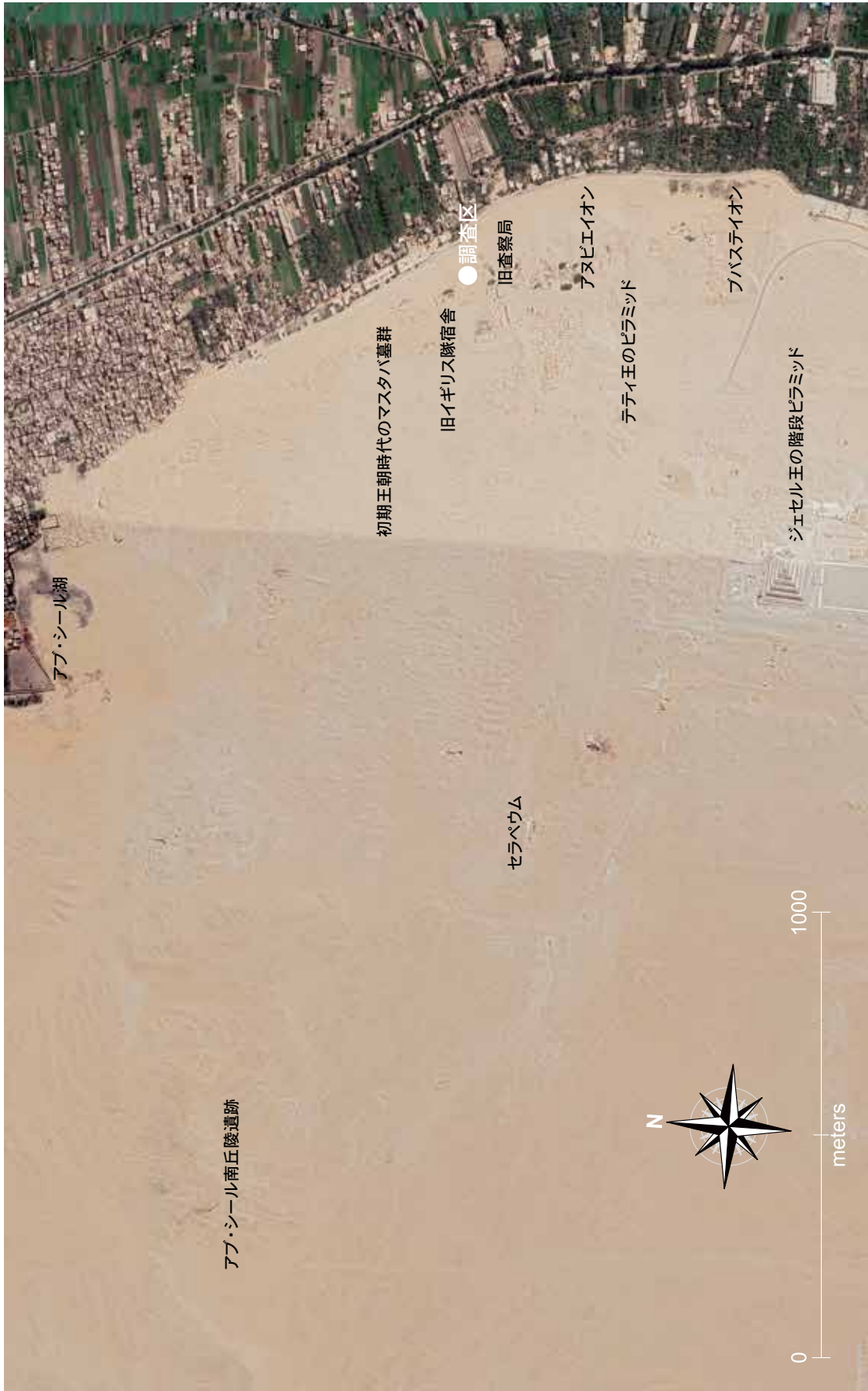


図1 北サッカラ地図  
Fig.1 Map of north Saqqara

サッカラの新王国時代の墓をテーマとした調査研究を開始した。これまで踏査、測量、物理探査を行い、その結果、新たに新王国時代の墓地を確認するとともに、北サッカラ台地の斜面（C地区と呼称、図1参照）<sup>2)</sup>に未発見の新王国時代の岩窟墓群が存在する可能性が高いとの結論に至った（河合他 2017a, 2017b, 2018a）。これを受け、2017年の第3次調査において、C地区において試掘調査を実施したところ、付近に近年の攪乱を受けていない遺構が存在することが推定された（河合他 2018b）。

この成果を受け、第4次調査として、2019年2月9日から3月7日にかけて同地区にて継続して発掘調査を行った<sup>3)</sup>。本稿では、第4次調査の概要について報告を行う。

## 2. 発掘調査

### (1) 発掘調査の概要

第3次調査では、C地区において、5m（南北方向）～30m（東西方向）の試掘区（Trench C）を設定し、試掘を行った<sup>4)</sup>。第4次調査では、この試掘区の北側に、Area 1からArea 4までの発掘区を設定し、発掘調査を行った（図2）。

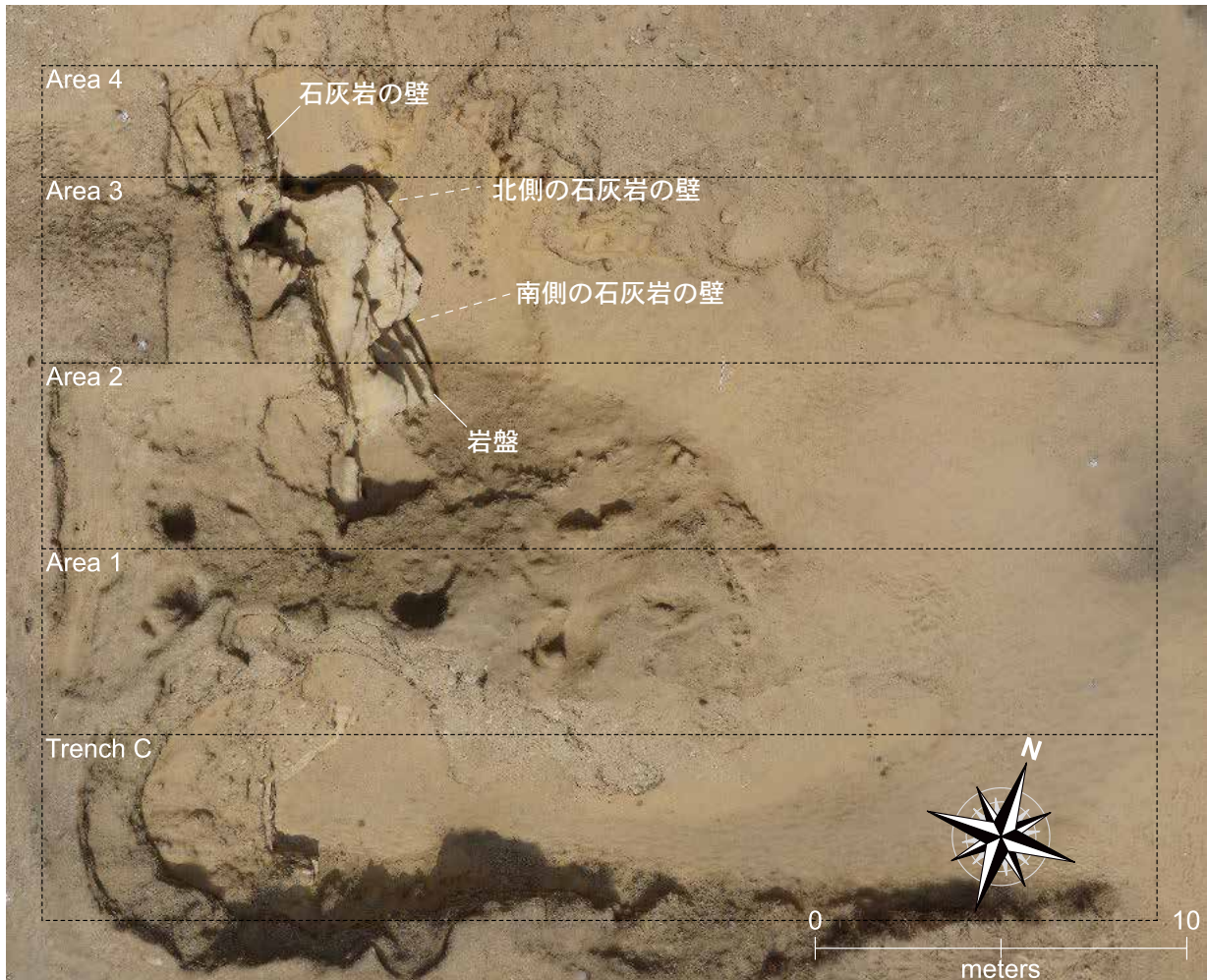


図2 発掘区（第4次調査終了時）  
Fig.2 Map of the excavation site after fourth season

Area 1 から Area 4 までの基本的な層位について、図 3 に示す。各層の内容については、以下の通りである。

1. 黄色砂層（日干レンガ含む）：約 10 ～ 20cm の日干レンガ片、約 5cm の礫を含む。西側から流れ込んできた過去の発掘調査の排土と考えられる。
2. 黄色細砂層：風成砂層。
3. タフラチップ混じり黄色細砂層：風成の黄色の細砂に約 1 ～ 3cm のタフラチップが少量混じる。
4. 黄色細砂層：上層の第 2 層の黄色細砂層と同質だが、よりしまりがあり黄色みの強い風成砂層。ローマ支配期の遺物を含む。
5. ローマ支配期の土器、日干レンガ片、石灰岩片などが集中。

発掘調査の結果、北東方向に面した岩盤の露頭が確認されるとともに、更にその上に石灰岩の壁が建てられていることが明らかとなった（図 4-6, 写真 1）。この石灰岩の壁は、モルタルなどが使われていない、いわゆる空積みであり、発見時には一部崩落していた。石灰岩の壁は、北側にまだ続いており、今期調査で確認された限りでは、高さ約 1.9m、幅約 3.5m、長さ約 10m である。また、壁の北側では、その上に 1 段から 2 段の日干レンガ列が見られた。

更に、岩盤の下からは、北側と南側に、概ね平行して北東方向に続く石灰岩の壁が見られた（写真 2, 3）。2 つの壁の距離は、約 3.5m である。なお、北側の壁については、上下で 2 つに分けることができ、上部はモルタルなどを使わない空積みで、下部はモルタルを使用して壁が建てられていた（写真 2）。下部の壁については、古代に作られたもので、上部の壁については、おそらく後世に、土留めの目的で築かれたと考えられる。

そして、この 2 つの壁の間から、日干レンガで作られた通廊の天井部分を発見した（写真 4）。通廊の天井は丸みを持っており、いわゆるヴォールト天井であると考えられる。通廊は西側の岩盤に接しており、おそらく岩盤を穿った岩窟墓の通廊であると考えられる。南北の壁と同じく、北東方向に伸びている。今期はこれらの壁、通廊を確認し、終了した。来期以降、これらの遺構の発掘調査を継続する計画である。



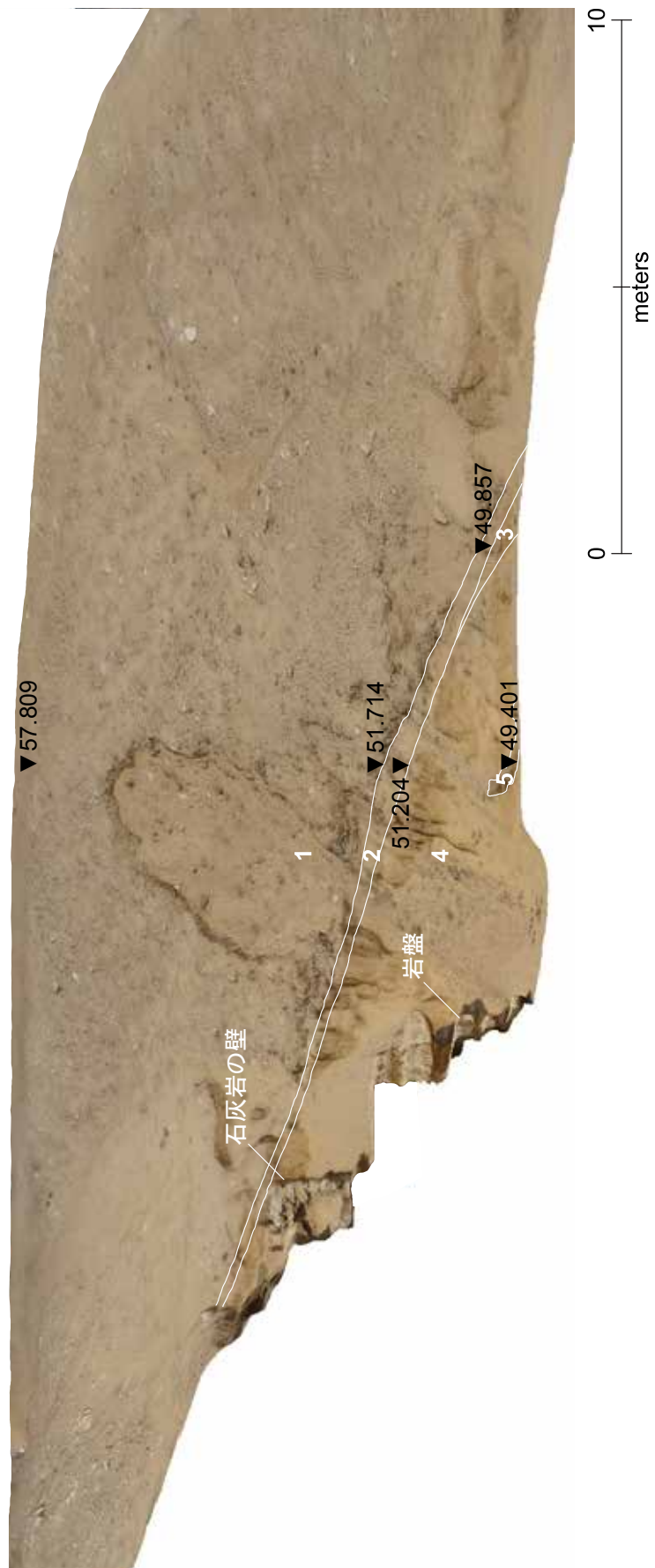


図3 発掘区北側セクション  
Fig.3 The north stratigraphic profile of the excavation area

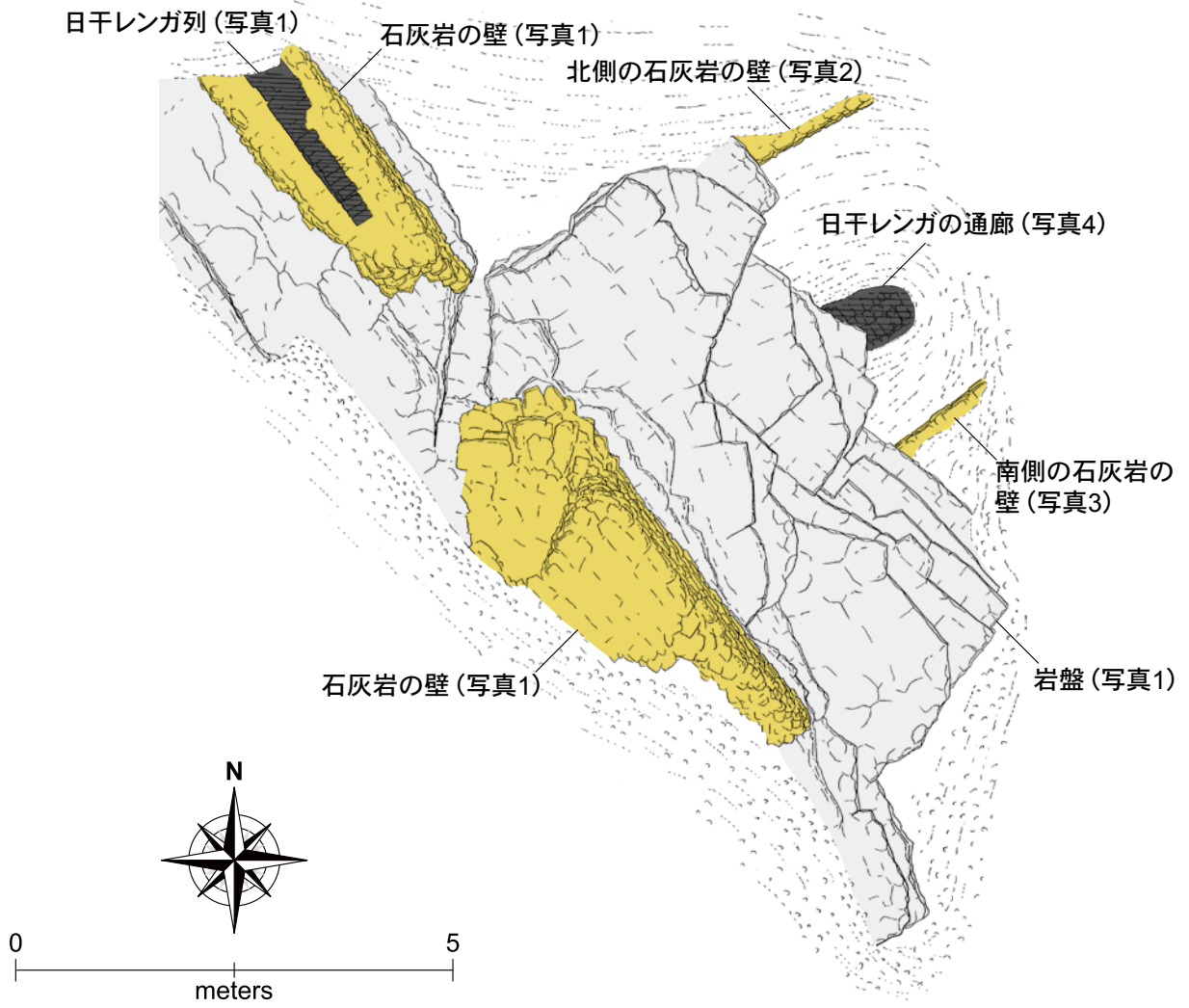


図4 出土遺構平面図  
Fig.4 The plan of the area around the limestone walls

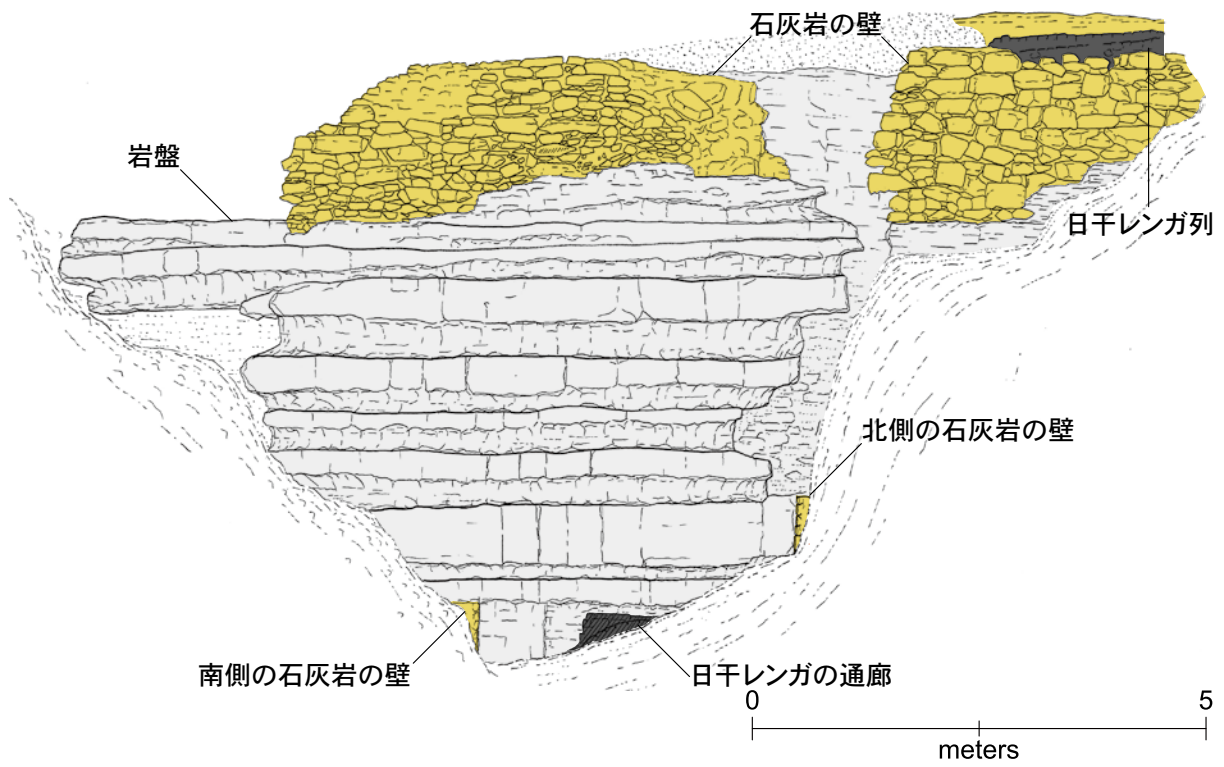


図5 出土遺構立面図  
 Fig.5 The elevation of the area around the limestone walls

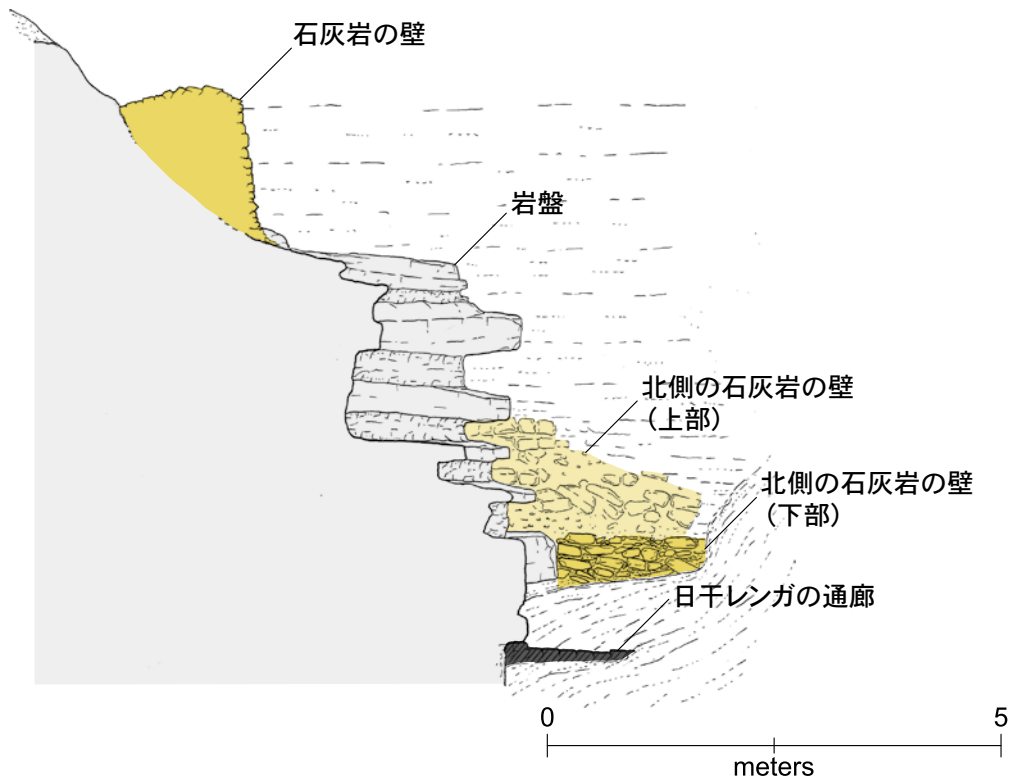


図6 出土遺構断面図  
 Fig.6 The cross section of the area around the limestone walls





写真1 発掘区第4次調査終了時（東より）  
Pl.1 The excavated area and the limestone wall on the bedrock after fourth season, viewing from the east



写真2 北側の石灰岩の壁  
Pl.2 The northern retaining wall adjacent to the bedrock surface





写真3 南側の石灰岩の壁  
Pl.3 The southern retaining wall adjacent to the bedrock surface



写真4 ヴォールト天井の日干レンガの通廊  
Pl.4 The mud-brick vaulted ceiling adjacent to the bedrock surface

岩盤の東側では、砂上に直接埋葬された3体の人骨が出土した(図7, 写真5, 6)。形質人類学の専門家による調査はまだ行っていないものの、3体は成人と考えられる。出土状況からいずれも未盗掘であると判断した。埋葬は仰臥位伸展葬で、骨盤の上に両手を乗せている。頭位は、2体が南西、1体が北東を向く。布が巻かれている埋葬や頭の下に日干レンガが置かれている埋葬(写真5)、遺体の下にタフラが敷かれている埋葬(写真6)などが見られた。埋葬に伴う副葬品は出土していないものの<sup>5)</sup>、層位や埋葬の姿勢などから、ローマ支配期に年代づけられる可能性が考えられる。

また、岩盤の東側では、紀元後1世紀に年代づけられるローマ支配期の土器が集中して出土した(図7, 写真7)。土器群はアンフォラなどで構成され、また、土器の集中に混じって、日干レンガ片やイシス・アフロディーテなどのテラコッタ製像も出土している。土器の集中はまだ北側の未発掘箇所が続いており、今後の発掘調査を待って、土器の集中の性格について、検討してみたい。

その他、斜面上部の発掘では、動物骨がまとまって発見された。動物骨は、少なくともイヌのミイラが26体(そのうち数体は子犬)、ネコのミイラが数体確認された。動物墓地に埋葬されているような完全な形のミイラは出土しなかったが、一部分が残存しているミイラが数点確認された。発掘区の近隣にはアヌビエオンやブバステイオンなどの動物墓地が確認されており、これらの動物骨は同様の墓地に関連すると考えられる。また、層位の観察から、これらの動物骨は、近隣の動物墓地の盗掘もしくは発掘の排土としてもたらされた可能性が考えられる<sup>6)</sup>。

## (2) 単純埋葬の概要

第4次調査の注目される成果として、前述の3体の未盗掘の単純埋葬が挙げられる。以下に、各埋葬の詳細について記す。

### ① NS04-o00454 (写真5)

出土層位：黄色細砂層

頭位方向：南西

埋葬姿勢：仰臥位伸展葬、手は骨盤の上

身長：1.77m

その他：布片が出土しており、ミイラ処理が行われていた埋葬と考えられる。頭部の下には、日干レンガが発見されている。顔は左を向いているが人為的かは不明。

### ② NS04-o00613 (写真6)

出土層位：黄色細砂層

頭位方向：北東

埋葬姿勢：仰臥位伸展葬、手は骨盤の上

身長：1.6m (足首以下が欠損)

その他：脚部に布と考えられる痕跡が確認されており、ミイラ処理が行われたと考えられる。頭部の下には、日干レンガが発見されている。また、遺体の下に、おそらく意図的に敷いた白色のタフラの層がある。

### ③ NS04-o00614 (写真6)

出土層位：黄色細砂層

頭位方向：南西

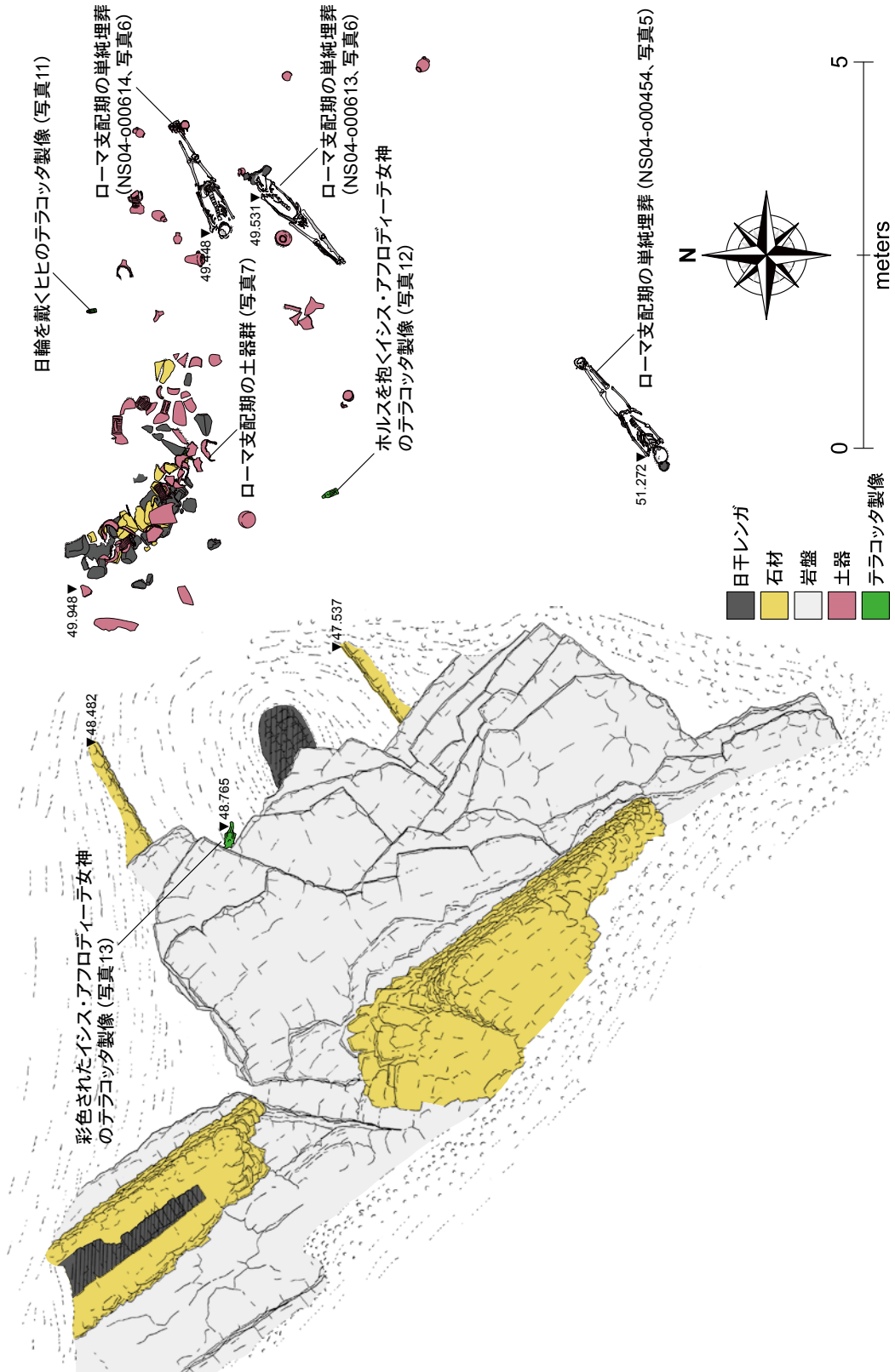


図7 埋葬および遺物の出土場所  
 Fig.7 The distribution of the burials and finds in the excavated area





写真5 単純埋葬 (NS04-o00454)  
Pl.5 Intact simple burial to the east of the bedrock surface



写真6 単純埋葬 (NS04-o00613, o00614)  
Pl.6 Intact simple burials to the east of the bedrock surface



写真7 ローマ支配期の土器の集中  
Pl.7 Debris deposit of Roman pottery vessels

埋葬姿勢：仰臥位伸展葬、手は骨盤の上

身長：1.62m

その他：脚部にミイラ布が残存しており、ミイラ処理が行われた埋葬である。

これらいずれの埋葬も布片や部分的に布が巻かれた状態で出土している。ミイラ布に関しては、ある段階で埋葬が露出していた際、もしくは砂中で肉体とともに風化し、骨のみが埋葬として残存したと考えられる。また、NS04-o00454（写真5）およびNS04-o00613（写真6）の頭部の下には、日干レンガが発見されている。複数の埋葬から同じ状況で日干レンガが出土していることから、埋葬時に人為的に置かれた可能性が考えられる。

#### 4. 出土遺物

ここでは、今期の調査において出土した主な遺物について報告する。

##### (1) アミュレット

###### ① シュウ神のファイアンス製アミュレット（写真8）

NS04-o00456、Area 2 黄色細砂層、幅 1.2cm、高さ 2.1cm、厚さ 0.9cm。

跪いて両手を挙げた姿勢のシュウ神で、背面には支柱がある。支柱には紐を通すための孔がある。シュウ神をモチーフとするアミュレットは第3中間期からプトレマイオス朝時代に見られ、ミイラの下半身に置かれて副葬される（Andrews 1990: 19）。類例は、ジェセル王の階段ピラミッド西側にあるプトレマイオス朝時代の墓域（Radomska et al. 2008: 391–396, fig.481.a)8, pl.CCLVI.h）やホルエムヘブ墓の前庭部（Raven et al. 2011:

115-116, cat.165, 166) から出土している。ただし、いずれも風成砂層から出土しており本来のコンテキストについては不明瞭である。

## (2) スカラベ

### ①ステアタイト製スカラベ (写真 9)

NS04-o00380、トレンチ C 清掃中、幅 1.4cm、高さ 1.9cm、厚さ 1.0cm。

緑色の釉薬がかかったステアタイト製のスカラベが 1 点出土した。腹面には上からパピルス、その下の中央に *nh* と *t* のサイン、その両側に赤冠のサイン、そして最下部には *nb* のサインが刻まれている。類似したモチーフが刻まれたスカラベは第 2 中間期から第 18 王朝初期に見られる (Ben-Tor 2007: 79, pl.53)。

## (3) ガラス製品

### ①ガラス製容器片 (写真 10)

NS04-o00458、Area 3 黄色細砂層、口径 2.1cm、器壁の厚み 0.1 ~ 0.2cm。

ガラス製容器の口縁部が岩盤近くから出土した。透明な淡緑色、ガラスの内部には細かな気泡が含まれている。口縁部の形状や口径から、長頸瓶の一部であると考えられる。長頸瓶は紀元後 1 世紀から 3 世紀のローマ帝国内で見られるものである (Hayes 1975: 42, 133)。特にこの容器片は紀元後 2 世紀から 3 世紀のファイユームなどで見られる例に類似している (Harden 1936: 197, no.530, pl.XVII; Hayes 1975: 137, no.533, fig.17)。

## (4) テラコッタ製像

今期調査では、4 点のテラコッタ製像が発見された。3 点はローマ支配期の土器の集中と同じレベルから出土し、また 1 点は土器の集中内部から出土した。土器の集中との関連が注目される。

### ①月輪を戴くヒヒ (写真 11)

NS04-o00628、Area 3 黄色細砂層、幅 5.6cm、高さ 12.9cm、厚さ 6.1cm。

ヒヒの姿を象ったテラコッタ製像。ヒヒは、頭に月輪を戴き、両手を膝の上に乗せて屈んでいる。部分的に、白色プラスターの上に赤色や黒色の顔料が残存している。足裏部分から内側には空洞がある。また、背面には 2 か所に円形の穿孔が開けられており、一方の穿孔は腹面まで貫通している。内側に空洞があり、背面に円形の穿孔がある構造はプトレマイオス朝時代に見られる特徴である (Thomas n.d.: 4-5)。

類例は、デルタ地帯のテル・ティマイからの出土品 (Benett 2016: 11-12, fig.35) やアレキサンドリア国立博物館の収蔵品 (Breccia 1934: 57, 58, no.400, 401, pls.LII.259, CXI.642) に求められる。テル・ティマイから出土した資料はプトレマイオス朝後半からローマ支配期前半に年代づけられている (Benett 2016: 11-12)。近隣の遺跡では、石灰岩製だが、類似したモチーフの小像が北サッカラの動物墓地から出土している (Davies 2006: 93, 94, pls.XLIII-XLV)。

### ②ハルポクラテス (ホルス) を抱くイシス・アフロディーテ女神 (写真 12)

NS04-o00467、Area 3 黄色細砂層、幅 7.6cm、高さ 20.1cm、厚さ 6.0cm。

ハルポクラテス (ホルス) を抱くイシス・アフロディーテ女神が象られている。表面の摩耗が著しく、彩色の痕跡は認められない。足裏部分から内側は空洞になっており、背面中央付近には円形の穿孔が開けられている。前述したように、このような構造のテラコッタ製像はプトレマイオス朝時代に見られる (Thomas n.d.: 4-5)。同様のテラコッタ製像は、ファイユーム、バテン・ハリト、テル・バスタなどから出土している (Dunand



写真8 シュウ神のファイアンス製アミュレット  
Pl.8 Faience amulet of god Shu



写真9 ステアタイト製スカラベ  
Pl.9 Steatite scarab

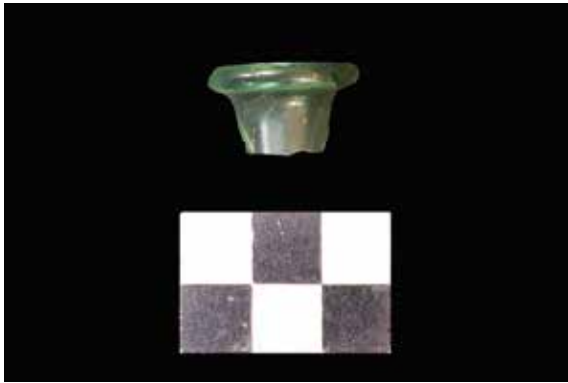


写真10 ガラス製容器片  
Pl.10 Rim of glass vessel



写真11 月輪を戴くヒヒのテラコッタ製像  
Pl.11 Terracotta figurine of baboon



写真12 ハルポクラテス（ホルス）を抱く  
イシス・アフロディーテ女神のテラコッタ製像  
Pl.12 Terracotta figurine of  
goddess Isis-Aphrodite holding Hours



写真13 彩色されたイシス・アフロディーテ女神の  
テラコッタ製像  
Pl.13 Painted terracotta figurine of goddess Isis-Aphrodite



写真14 石灰岩製供物卓  
Pl.14 Limestone offering table



写真15 石灰岩製レリーフ片  
Pl.15 Limestone relief



1974: 165–167, nos.1–7, pls.I–VI)。

### ③彩色されたイシス・アフロディーテ女神 (写真 13)

NS04-o00578、Area 3 黄色細砂層、幅 17.8cm、高さ 53.9cm、厚さ 8.2cm。

類例から紀元後 1 世前から紀元後 2 世紀 (プトレマイオス朝時代末期～ローマ支配期初期) に年代づけられる (Hill 2000: 93, fig.73)。カラトス (Kalathos) と呼ばれる編み籠を表現した頭飾りを身につけている。頭飾りと本体は別々に焼成され、その後、白色のプラスターで接合されている。頭部にはぶどうの装飾が施され、手にはヘビを持っている。

## (5) 供物卓

### ①石灰岩製供物卓 (写真 14)

NS04-o00578、Area 3 黄色細砂層、幅 42.1cm、高さ 22.5cm、厚さ 8.9cm。

岩盤の露頭の下の方南壁の南西角付近から供物卓が出土した。層位から、原位置の出土ではなく流れ込みと考えられる。浮き彫りから 3 つのヘテプのサインとその下に 3 つの窪みがある。左側の 2 つのヘテプのサインの間には *htp-di-nsw* 定型文が刻まれている。様式から中王国時代か新王国時代に年代づけられると思われる (Bolshakov 2001)。おそらく墓の偽扉の前に配されていたのであろう。

## (6) レリーフ

### ①石灰岩製レリーフ片 (写真 15)

NS04-o00586、Area 4 黄色細砂層、幅 7.8cm、高さ 19.5cm、厚さ 12.5cm。

ローマ支配期に年代づけられる土器の集中とともに出土した。左側に女性の頭部像、右側に人物の右腕の一部が沈め浮き彫りで表されている。おそらく、右側は右腕の曲がった角度から頭に手を当てた悲しむポーズの人物の姿が描かれていたと推測され、このことから葬列のモチーフの一部を構成していたレリーフ片と考えられる。時代は人物像の様式からラメセス朝のものとみられる。このような葬列のモチーフは、新王国時代のサッカラのトゥームチャペルで頻繁に描かれていたことが知られており (Martin 1987)、このレリーフ片も付近のラメセス朝時代の墓由来のものと推測される。

## (7) 土器<sup>7)</sup>

今期調査では、岩盤東側の黄色細砂層から土器が集中して出土した (図 7, 写真 7)。東部砂漠の採石場であるモンズ・クラウディアヌスやモンズ・ポルフィリテスなどから出土した土器の類例から、紀元後 1 世紀前後のローマ支配期に年代付けられる。土器群は、アンフォラ (NS04-o00580; 写真 16, 17)<sup>8)</sup> が主であり、その他、皿形土器 (NS04-o00616; 写真 18)<sup>9)</sup>、把手付き壺形土器 (NS04-o00630; 写真 19)<sup>10)</sup>、壺形土器 (NS04-o00538; 写真 20)<sup>11)</sup>、把手付き壺形土器 (NS04-o00631; 写真 21)<sup>12)</sup> などが含まれている。土器の集中には、日干レンガ片、焼成煉瓦片、石灰岩片なども含まれており、また、テラコッタ製像片も出土している。土器の集中は、更に北側に続いており、今後、全体を明らかにした上で、その性格について検討してみたい。

## 5. まとめ

第 4 次調査では、第 3 次調査の試掘区の北西約 20m の地点で岩盤の露頭とその上に配された石灰岩製の壁体を発見した。そして、岩盤の露頭の下にも石灰岩製の壁体と岩窟墓に続くと考えられる日干レンガ製のヴォールト構造の通廊の天井を発見することができた。岩盤の東側からは、ローマ支配期に年代付けられる未盗掘の





写真 16 アンフォラ  
Pl.16 Rim to neck of amphora



写真 17 アンフォラ  
Pl.17 Base of amphora



写真 18 皿形土器  
Pl.18 Dish with the trace of burning



写真 19 把手付き壺形土器  
Pl.19 Juglet with one handle



写真 20 壺形土器  
Pl.20 Jar so-called "cooking pot"



写真 21 把手付き壺形土器  
Pl.21 Jar with two handles

3体の埋葬が発見され、また紀元後1世紀のローマ支配期に年代づけられる土器群とテラコッタ製像などが出土した。これらの出土状況から調査区は、ローマ支配期以降、我々が発掘するまで手付かずであったことが判明した。

次期調査では、特に天井の一部が確認できたヴォールト構造の通廊とその先に存在すると考えられる岩窟墓の発掘調査を目標として、遺構の全容の解明に努めたい。

#### 謝辞

本調査は、金沢大学超然プロジェクト「文化資源マネジメントの世界的研究・教育拠点形成」、金沢大学新学術創成研究機構ユニット経費、科学研究費補助金新学術領域研究「都市文明の本質」計画研究3「古代エジプトにおける都市の景観と構造」(課題番号:18H05446)による成果である。エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カーレッド・アル＝アナニー閣下(博士)、考古最高評議会事務総長ムスタファ・ワジーリー博士、外国調査隊管轄事務局長ナシュア・ガーベル博士、古代エジプト部部長アイマン・アシュマウィ博士、サッカラ査察局長サブリ・ファラグ氏、同部長ハニー・アブドアッラー・アル＝タイプ博士、ムハンマド・ユーセフ氏、サッカラ外国調査隊管轄事務局長サミール・ラマダン氏、主任査察官のマハムード・シャーバーン氏、我々の調査の査察官イスマイル・ムスタファ氏を始めとする方々に多大なご協力を頂いた(肩書きは調査時のもの)。カイロでは、早稲田大学エジプト学研究所カイロ・オフィスの吉村龍人氏、ムハンマド・アシュリー氏に考古省との渉外などで大変お世話になった。また、金沢大学人文学類フィールド文化学コース(考古学特別プログラム)の岡部 睦氏には調査資料の整理作業などを手伝っていただいた。

ここに記して感謝の意を表する。

#### 註

- 1) メンフィスの墓地であるサッカラの概要と研究の問題点については、以下を参照(河合 2017)。
- 2) 調査区は、テティ王のピラミッドの北東、アヌビエイオンの北側に位置し、旧イギリス調査隊の発掘宿舎と旧査察局の間にあたる。
- 3) 調査の参加者は以下の通りである。考古班:河合 望、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美、岡部 睦、建築班:柏木裕之、動物考古班:サリーマ・イクラム、現地渉外:吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 4) 本調査区は西側から東側に降る斜面になっており、斜面は真西に対して約20度振れている。従って、実際には南、北、東、西はそれぞれ南南東、北北西、東北東、西南東となる。ただし、方向が分かりにくくなるため、本稿ではそのまま南、北、東、西を用いることとする。
- 5) 単純埋葬のすぐ脇には、ローマ支配期の土器が見られるが、逆になっていることなどから、これは土器集中の一部であり、副葬品ではないと考えられる(写真6)。単純埋葬の後に、この土器集中が形成されたと考えられる。
- 6) 動物骨の概報に関しては、サリーマ・イクラムによる報告を参照(イクラム 2020)。
- 7) 土器の胎土に関しては10倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った(Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130-132)。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した(Aston 1998: 41-51)。
- 8) 類例は、東部砂漠の採石場であるモンズ・クラウディアヌスにあり、ハドリアヌス帝以降に年代づけられる(Tomber 2006: fig.1.57.12-859, 12-860; Tomber 2007: fig.3.2)。その他、デルタ地域のマレオタイデなどに類例がある(Empereur and Picon 1992: fig.3)。
- 9) 口縁付近に焼成の痕跡あり。
- 10) 類例は、モンズ・クラウディアヌスにある(Tomber 2006: fig.1.20.26-220, 29-224)。
- 11) “cooking pot” と呼ばれる器形である。類例は、モンズ・クラウディアヌス(Tomber 2006: figs.1.29.31-366, 1.30.37.380)、モンズ・ポルフィリテス(Tomber 2001: fig.6.4.42) など。
- 12) 類例はアヌビエイオンに見られる(French and Bourriau 2018: fig.14.h.)。

## 参考文献

- Andrews, C.  
1990 *Ancient Egyptian Jewelry*, London.
- Aston, D.A.  
1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I. Teil 1: Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.
- Bennett, J.E., Littman, R. J. and Silverstein, J.  
2016 *The terracotta figurines from Tell Timai: 2009-2013*, Oxford.
- Ben-Tor, D.  
2007 *Scarabs, Chronology, and Interconnections: Egypt and Palestine in the Second Intermediate Period*, Göttingen.
- Bolshakov, A.O.  
2001 “Offering Tables”, in Redford, D. (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol.2, Oxford, pp.572–576.
- Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.  
2000 “Pottery”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121–147.
- Breccia, E.  
1934 *Monuments de l'Égypte gréco-romaine*, II, 2, Bergamo.
- Davies, S.  
2006 *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara: The Mother of Apis and Baboon Catacombs, The Archaeological Report*, London.
- Dunand, F.  
1974 *Religion populaire en Égypt Romaine*, Leiden.
- Empereur, J.-Y. and Picon, M.  
1992 “La reconnaissance des productions des ateliers céramiques: l'exemple de la Maréotide”, *Ateliers de Potiers et Productions Céramiques en Égypte, Cahiers de la Céramique Égyptienne* 3, pp.145–152.
- French, P. and Bourriau, J.  
2018 *The Anubieion at Saqqara IV: Pottery of the Late Dynastic Period With Comparative Material from the Sacred Animal Necropolis*, London.
- Harden, D.B.  
1936 *Roman glass from Karanis: found by the University of Michigan Archaeological Expedition in Egypt, 1924-1929*, Ann Arbor.
- Hayes, J.W.  
1975 *Roman and pre-roman glass in the Royal Ontario Museum*, Toronto.
- Hill, M.  
2000 “Roman Egypt”, in Milleker, E.J. (ed.), *The Year One: Art of the Ancient World East and West*, New York, pp.78–101.
- Martin, G.T.  
1987 *Corpus of Reliefs of the New Kingdom from the Memphite Necropolis and Lower Egypt*, London.
- Nordström, H-Å and Bourriau, J.  
1993 “Ceramic Technology: Clays and Fabrics”, in Arnold, D. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143–190.
- Radomska, M., Kowalska, A., Kaczmarek, M. and Rzeuska, T.I.  
2008 *Saqqara III, The Upper Necropolis, Part I: The Catalogue with drawings*, Warsaw.
- Raven, M.J., Verschoor, V., Vugts, M. and van Walsem, R.  
2011 *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-Chief of Tutankhamun, V: The Forecourt and the Area South of the Tomb with Some Notes on the Tomb of Tia*, Leiden.
- Thomas, R.  
n.d. *Naukratis: Greeks in Egypt: Ptolemaic and roman figures, models and coffin-fittings in teracotta*, [https://research.britishmuseum.org/pdf/Thomas\\_Ptolemaic\\_figures.pdf](https://research.britishmuseum.org/pdf/Thomas_Ptolemaic_figures.pdf).
- Tomber, R.  
1992 “Early Roman Pottery from Mons Claudianus”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne* 3, pp.137–142.  
2001 “The Pottery”, in Maxfield, V.A. and Peacock, D.P.S. (eds.), *The Roman Imperial Quarries: Survey and Excavation at Mons Porphyrites 1994-1998*, vol.I, London.

- 2006 “The Pottery”, in Maxfield, V.A. and Peacock, D.P.S. (eds.), *Survey and Excavation, Mons Claudianus 1987-1993, Vol. III: Ceramic Vessels and Related Objects*, pp.3-236, Cairo.
- 2007 “Early Roman Egyptian Amphorae from the Eastern Desert of Egypt: a Chronological Sequence”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne* 8, pp.525-536.

河合 望

- 2017 「メンフィス・ネクロポリスの調査と研究」、常木 晃、西秋良宏、山内和也（編）、『西アジア考古学・最新研究の動向』季刊考古学第141号、雄山閣、pp.83-86.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花

- 2017a 「第1次北サッカラ遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.127-144.

河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花

- 2017b 「第2次北サッカラ遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.145-181.

河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

- 2018a 「第3次北サッカラ遺跡踏査概報：踏査・測量・探査報告」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.48-81.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

- 2018b 「第3次北サッカラ遺跡調査概報：試掘調査」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.82-112.

サリーマ イクラム

- 2020 「2019年度北サッカラ調査における動物遺存体とミイラに関する調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.66-73.

## 調査報告

# 第5次北サッカラ遺跡調査概報

河合 望\*<sup>1</sup>・吉村 作治\*<sup>2</sup>・近藤 二郎\*<sup>3</sup>・柏木 裕之\*<sup>4</sup>  
高橋 寿光\*<sup>4</sup>・米山 由夏\*<sup>5</sup>・石崎 野々花\*<sup>6</sup>  
馬場 悠男\*<sup>7</sup>・坂上 和弘\*<sup>8</sup>・サリーマ イクラム\*<sup>9</sup>

## A Preliminary Report on the Fifth Season of the Excavation at North Saqqara

Nozomu Kawai\*<sup>1</sup>, Sakuji Yoshimura\*<sup>2</sup>, Jiro Kondo\*<sup>3</sup>, Hiroyuki Kashiwagi\*<sup>4</sup>  
Kazumitsu Takahashi\*<sup>4</sup>, Yuka Yoneyama\*<sup>5</sup>, Nonoka Ishizaki\*<sup>6</sup>  
Hisao Baba\*<sup>7</sup>, Kazuhiro Sakaue\*<sup>8</sup> and Salima Ikram\*<sup>9</sup>

### Abstract

The Japanese-Egyptian mission to North Saqqara conducted the fifth season from July 29 till September 26, 2019. This project aims to search the location of the previously unknown New Kingdom cemeteries at North Saqqara and excavate them in order to understand the political and cultural history of Memphis during the New Kingdom. The excavation area is located on the slope of the eastern escarpment between the old Inspectorate building of the antiquities department and the old British mission's dig house. In this season, we continued excavation at the area where we found part of some structural remains in the last season. This paper reports the result of the fifth season of the project.

Our excavation revealed the oval-shaped circular structure made of pottery vessels and mud-bricks, which was partially uncovered in the last season. It seems to have functioned as the entrance of the vaulted structure at later phase of use. The excavation also revealed the vaulted structure which was found partially in the fourth season, covering the staircase made of limestone descending towards the rock-cut tomb. The vaulted structure measures 9m in length and 1.2m in width. At the end of the descending staircase, there is the entrance gate for the rock-cut tomb, measuring 1.64m in height and 91cm inside of the entrance door in width. On the top of the entrance gate, a stela showing the three deities bearing Greek inscriptions at the bottom was uncovered *in situ* in a niche hewn on the cliff of the limestone bedrock. On the both side of the descending staircase, we found two recumbent lion statues made

\* 1 金沢大学新学術創成研究機構教授  
\* 2 東日本国際大学学長 / 早稲田大学名誉教授  
\* 3 早稲田大学文学学術院教授 / 早稲田大学エジプト学研究所所長  
\* 4 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授  
\* 5 鶴見大学大学院文学研究科博士後期課程  
\* 6 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程 /  
日本学術振興会特別研究員  
\* 7 独立行政法人国立科学博物館名誉研究員  
\* 8 独立行政法人国立科学博物館人類研究部研究主幹  
\* 9 カイロ・アメリカン大学社会学エジプト学人類学科教授

\* 1 *Professor, Institute for Frontier Science Initiative, Kanazawa University*  
\* 2 *President, Higashinippon International University / Professor Emeritus, Waseda University*  
\* 3 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University / Director, Institute of Egyptology, Waseda University*  
\* 4 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*  
\* 5 *Doctoral Student, Department of Cultural Properties, Tsurumi University*  
\* 6 *Doctoral Student, Department of Archaeology, Waseda University / Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science*  
\* 7 *Researcher Emeritus, National Museum of Nature and Science, Tokyo*  
\* 8 *Senior Researcher, Department of Anthropology, National Museum of Nature and Science, Tokyo*  
\* 9 *Professor, Department of Sociology, Egyptology and Anthropology, American University in Cairo*

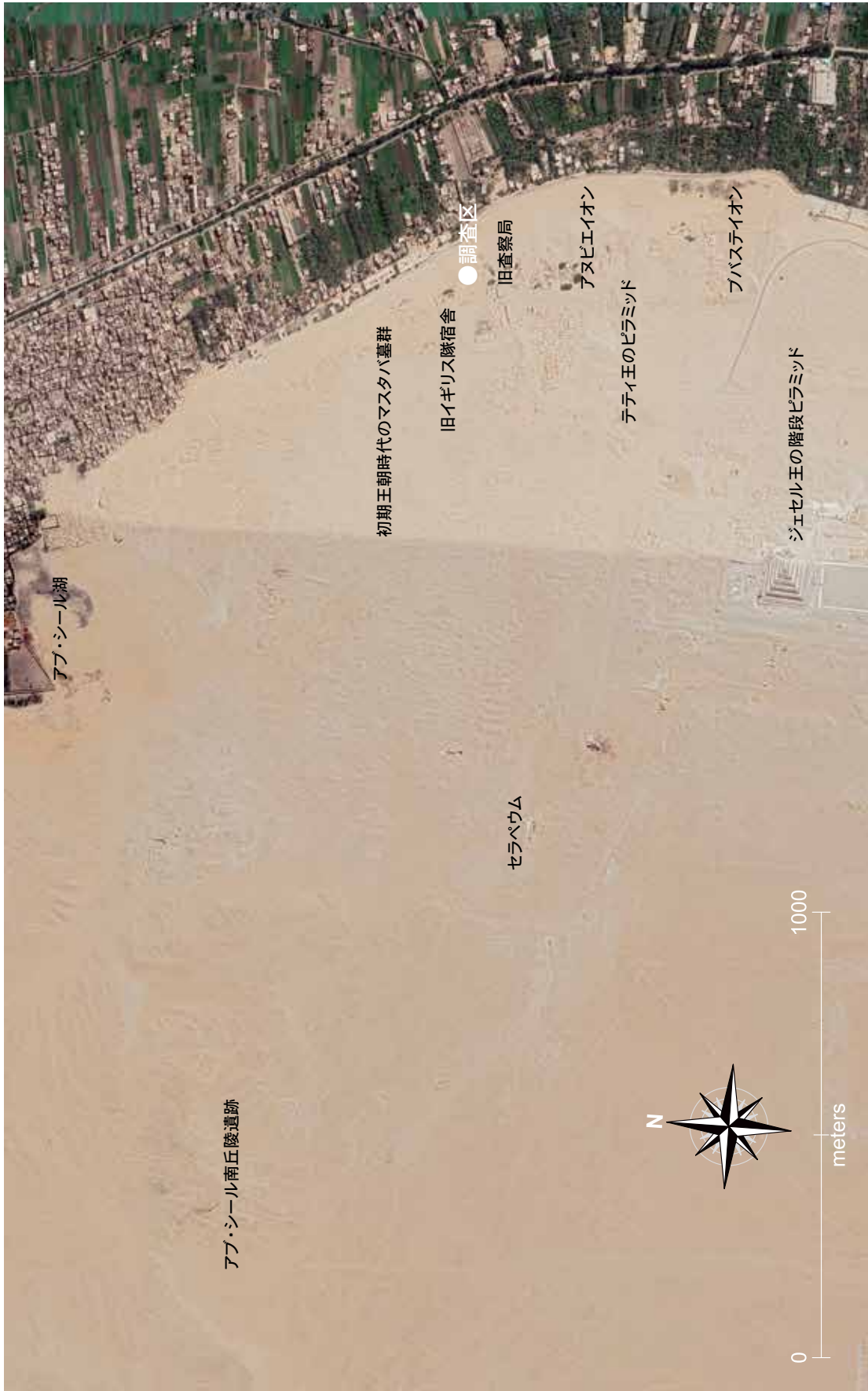


図1 北サッカラ地図  
Fig.1 Map of north Saqqara

of limestone *in situ*. They face each other as if they are guarding the entrance gate. The rock-cut chamber behind the entrance gate measures 15m in length and 2.5m in width. There were a lot of remains of burials including mummified bodies and skeletons inside of the coffins as well as simple skeletons all over. Notably, we found a large terracotta statue of Isis-Aphrodite with an Harpocrates (Horus) near the painted entrance of one of the side rooms. Also, we found a stela decorated with the image of a woman named Demeteia and her dog with Greek Inscription fallen from original place into the inside of the coffin and removed it from the rock-cut chamber. It appears that the rock-cut chamber was a catacomb dating to the Roman Period around A.D.100. We plan to excavate inside of the catacomb in the next season.

## 1. はじめに

古代エジプト新王国時代の北の中心地であったメンフィスの墓地であるサッカラについては、これまで網羅的な調査が実施されてこなかった。サッカラにおいて新王国時代の墓を新たに発見、調査することにより、これまで南の中心地テーベに偏重してきた新王国時代史の再構築が期待される<sup>1)</sup>。

このような問題意識のもとに、2015年度から科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術調査)「エジプト、サッカラにおける新王国時代の墓の調査研究」(研究代表者:河合 望(金沢大学)、課題番号:15H05163)の助成を受け、サッカラの新王国時代の墓をテーマとした調査研究を開始した。これまで踏査、測量、物理探査を行い、その結果、新たに新王国時代の墓地を確認するとともに、北サッカラ台地の東側斜面(C地区と呼称、図1参照)<sup>2)</sup>に未発見の新王国時代の岩窟墓群が存在する可能性が高いとの結論に至った(河合他2017a, 2017b, 2018a)。これを受け、2017年の第3次調査および第4次調査において、C地区で発掘調査を実施したところ、岩窟墓の一部と考えられる石灰岩の壁や日干レンガの通廊が発見された(河合他2018b, 2020a)。

この成果を受け、第5次調査として、2019年7月29日から9月26日にかけて、同地区にて継続して発掘調査を行った<sup>3)</sup>。本稿では、第5次調査の概要について報告を行う。

## 2. 発掘調査

第5次調査では、第4次調査で設定したArea 1からArea 4までの発掘区に加え、更にArea 5を設定し、発掘調査を行った(図2)<sup>4)</sup>。

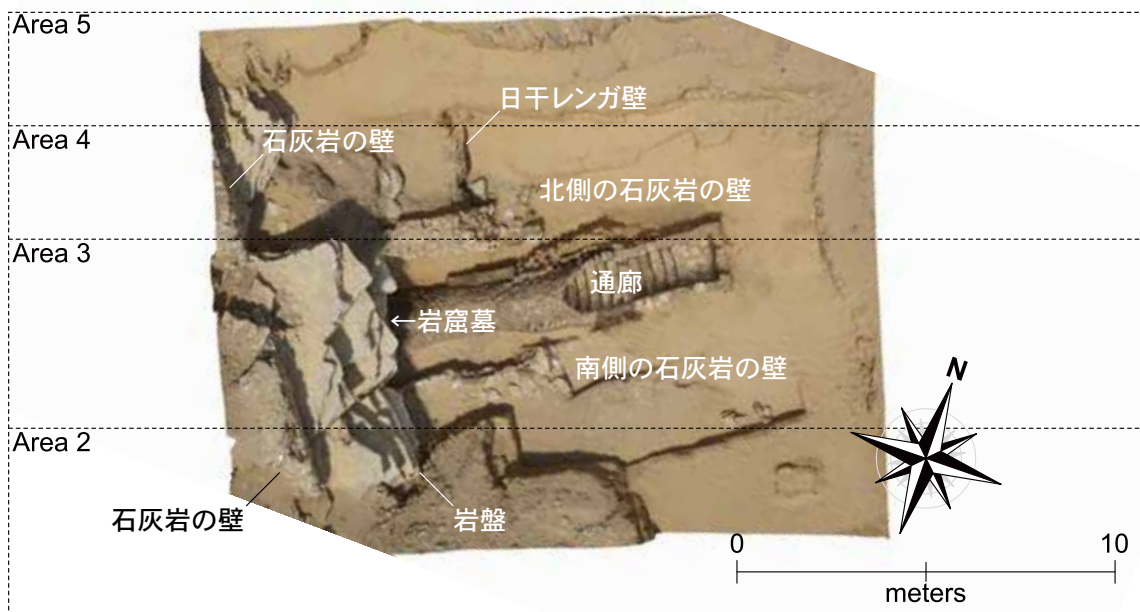


図2 発掘区(第5次調査終了時)  
Fig.2 Map of the excavation site after the fifth season



発掘区の基本的な層位について、図3に示す。各層の内容については、以下の通りである。

1. 黄色砂層（日干レンガ含む）：約10～20cmの日干レンガ片、約5cmの礫を含む。西側から流れ込んできた過去の発掘調査の排土と考えられる。
2. タフラチップ混じり黄色細砂層：風成の黄色の細砂に約1～3cmのタフラチップが少量混じる。
3. 黄色細砂層：風成の砂層。ローマ支配期の遺物、埋葬を含む。

発掘調査を行ったところ、第4次調査において岩盤東側で発見されていた土器の集中は、その下にある通廊にアクセスするために築かれた土留めであることが確認された。また、この通廊は西側に下降し、岩盤に穿たれた岩窟墓（ローマ支配期のカタコンベ）に続いていることが明らかとなった。なお、今回発見された通廊と岩窟墓には、暫定的に「NST(North Saqqara Tomb)01」の名称を付けた。以下に、(1)岩盤東側、(2)岩窟墓(NST01)の2つに分け、更に(2)岩窟墓(NST01)については、①通廊、②岩窟墓に分けて、発掘調査の成果を報告する。

#### (1) 岩盤東側

第4次調査において、岩盤東側で発見された土器集中は、北側に続くことが確認されており、第5次調査では、続きとなる北側部分の発掘調査を行った。発掘を行ったところ、主にローマ支配期の土器、日干レンガ片、石灰岩片で構成される円環状の遺構が発見された（写真1）。第4次調査で出土した土器集中は、この土器の円環状の遺構の南側部分であることが確認された。

円環状の遺構の内部には、上から続く風成の黄色細砂が堆積しており、これを発掘したところ、日干レンガのヴォールト天井を持つ通廊に続くことが明らかとなった（写真2）。円環状の遺構は、堆積した砂にもたせかけるようにやや外に広がるように作られていることから（写真3）、通廊が作られた後、この通廊を（おそらく盗掘などのために）利用するため、砂の崩落を防ぐ目的で作られたと考えられる。なお、この通廊の本来の入口は更に東側に位置しており、また、後述する西側に位置する岩窟墓に続いている。

円環状の遺構のほぼ中央には、ローマ支配期のアンフォラ2個体が天地を逆にして、立てて置かれていた（写真4）。おそらく意図的にこのように置かれたものと考えられる。後述するように、通廊内部や岩窟墓入口においても、複数回の利用の痕跡が見られることから、このアンフォラもそうした利用に伴って置かれた可能性が考えられる。

岩盤東側の発掘調査では、第4次調査と同じく、砂上に簡易的に埋葬されたいわゆる単純埋葬が25体発見されている。埋葬は仰臥位伸展葬で、骨盤の上に両手を乗せている。頭位は、19体が南西、4体が北東、1体が北西、1体が西を向く。また、22体が成人で、3体が子供である。25体のうちの3体は、布が巻かれた状態で発見された（写真5,6）。また、金箔片が残る埋葬も見られた（写真5,6）<sup>5)</sup>。副葬品などを伴う例はなく、年代の決定は難しいが、層位などからローマ支配期からコプト時代の可能性が考えられる<sup>6)</sup>。

その他、第4次調査では日干レンガの通廊の南北から石灰岩の壁が一部発掘されたが、第5次調査の結果、これらの石灰岩の壁は、岩盤から東に延びる壁厚約1mの壁であったことが明らかとなった。ただし、壁が築かれた地業面を発見するには至らず、通廊との関係は不明である。

同じく、第4次調査でその一部が発見されていた岩盤上に築かれた石壁についても、今回の調査で北端を確認することができた。そして、石壁の上には日干レンガの壁が築かれ、そのまま北に延びる様子が確認された（写真7-9）。更に、この壁の下の位置からも日干レンガの壁が発見された。壁は、通廊の北側に築かれた石壁に南端が接し、ニッチ状の凹凸も確認された。こうしたニッチ状の壁面は、初期王朝時代から古王国時代のマスタバ墓で広く見られる様式で興味を惹く。第5次調査ではごく一部に留まっており、次回以降調査区を広げ、年代や周囲の遺構との関係性を探る計画である（写真7-9）。



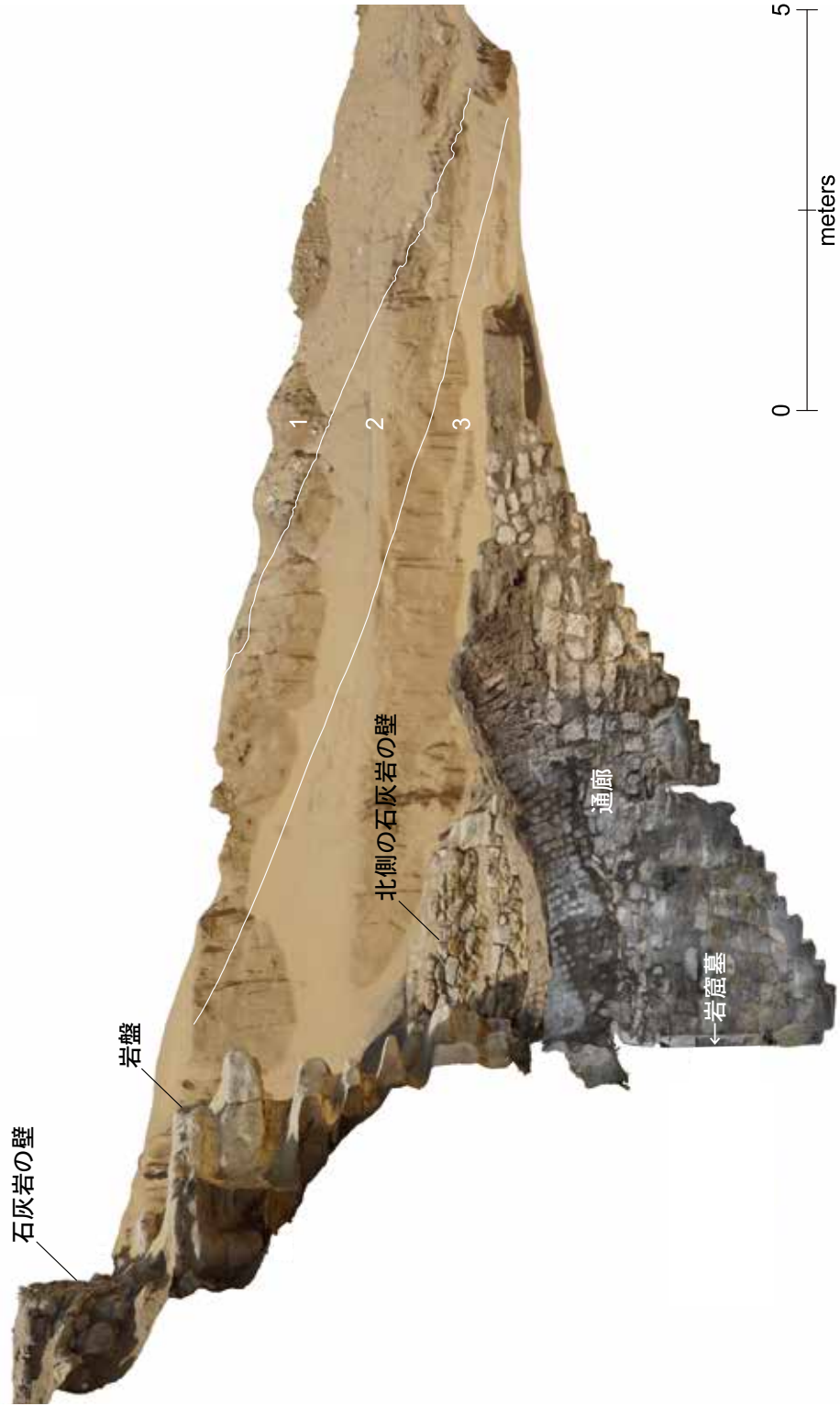


図3 発掘区北側セクション  
Fig.3 The north stratigraphic profile of the excavation area



写真1 土器や日干レンガで作られた円環状の遺構  
Pl.1 Oval-shaped circular structure made of pottery vessels and mud-bricks



写真2 通廊に続く円環状の遺構  
Pl.2 Oval-shaped circular structure





写真3 円環状の遺構の断面図  
Pl.3 Cross section of the oval-shaped circular structure



写真4 円環状の遺構中央のローマ支配期のアンフォラ  
Pl.4 Roman amphorae from center of the oval-shaped circular structure



写真5 単純埋葬 (NS05-o00877)  
Pl.5 Simple burial which was mummified and rapped with linen bandage



写真6 大人と子供の単純埋葬 (NS05-o00765, o00766)  
Pl.6 Adult simple burial and child simple burial





写真7 発掘区第5次調査終了時（東より）

Pl.7 The excavated area and the vaulted structure at the end of the season, viewing from the east



写真8 発掘区第5次調査終了時（北東より）

Pl.8 The excavated area and the vaulted structure at the end of the season, viewing from the northeast





写真9 発掘区第5次調査終了時（南東より）

Pl.9 The excavated area and the vaulted structure at the end of the season, viewing from the southeast

## (2) 岩窟墓 (NST01)

### ① 通廊

今回の調査によって、第4次調査で一部確認されていた日干レンガのヴォールト状の天井を持つ通廊は、後述する岩窟墓にアクセスするための通廊であることが明らかとなった（写真7-9）。通廊の幅は約1.2mであり、長さは約9mである。通廊は主に天井部分が日干レンガで作られており、側面が石材で作られている。通廊は、岩窟墓の入口から東側に上昇するように伸びており、床は石灰岩を敷いた階段となっている（写真10, 11）。通廊を覆うヴォールト天井も東に上昇するが、途中で角度が変化し、また用いられた日干レンガの大きさも異なっていた。改変の可能性が窺われるが、東側の天井は失われており、詳細は不明である（写真12）。通廊の東側は、両壁が内側に直角に曲がっており、通廊への入口のようにになっている（写真12）。

通廊が作られた年代について、直接的な証拠はないものの、通廊の上に堆積する砂中から単純埋葬（NS05-o00715, o00716）が出土すること（写真13）、別の単純埋葬（NS05-o00764）の頭蓋骨の上に通廊が作られていること（写真14）などから、単純埋葬が付近に埋葬され続ける一連の活動の中で、通廊も作られたと考えられる。また、通廊の石材で作られた側面壁が堆積する砂にもたせかける、石の階段が砂の上に作られていることなどから、付近に砂が堆積した後に、砂を一部どけて、この通廊が作られたと考えられる。



写真10 通廊内部（東より）  
P.10 The staircase inside the vaulted structure,  
viewing from the east



写真11 通廊内部（西より）  
Pl.11 The staircase inside the vaulted structure,  
viewing from the west



写真12 通廊東側の入口  
Pl.12 The entrance of the vaulted structure





写真13 通廊付近の単純埋葬 (NS05-o00715, o00716)  
Pl.13 Simple burials found in the vicinity of the entrance of the vaulted structure



写真14 単純埋葬 (NS05-o00764) の頭蓋骨の上に作られた通廊  
Pl.14 A Simple burial which its skull was destroyed by the vaulted structure

通廊内部の堆積状況について、写真15に示す。各層の内容は以下のようになっている。

1. 黄色細砂層①：風成の黄色細砂の堆積。
2. 日干レンガ崩落層①：5～10cm程度の日干レンガ片が、風成の黄色細砂に混じる。通廊の天井などの日干レンガが何らかの活動（層の上面から墓内部に由来する木棺片が出土したため、おそらく盗掘）の影響で、一部こぼれ落ちたと考えられる。
3. 黄色細砂層②：風成の黄色細砂の堆積。
4. 日干レンガ崩落層②：大小様々なサイズの日干レンガ、日干レンガ片が、風成の黄色細砂に混じる。通廊の壁もしくは天井の崩落に由来すると考えられる。
5. 石灰岩崩落層：20～30cm程度の石灰岩が、風成の黄色細砂に混じる。通廊の壁の崩落に由来すると考えられる。

層位の観察から、石灰岩の壁と日干レンガのヴォールト天井が作られた後に<sup>7)</sup>、少なくとも一度は崩落し（第4層、第5層）<sup>8)</sup>、少し砂（第3層）が堆積する時間をおいてから、再度、通廊が利用されたと考えられる。というのも後述するように、砂が少し堆積した後に天井の東端のほぼ真下に封鎖壁が作られているからである。なお、この封鎖壁の更にも上にも同質の砂（第3層）が堆積していることから、層には明確には違いが見られないものの、第3層は上下に分けることができるかもしれない。封鎖壁の上に砂が堆積した後に、日干レンガの崩落や木棺片などが見られることから（第2層）、おそらく盗掘によってもう一度、通廊が利用され、その後、また砂（第1層）が堆積したと考えられる。



写真15 内部の堆積状況  
Pl.15 The stratigraphy inside the vaulted structure

通廊内部には、2箇所に日干レンガの封鎖壁が作られている。一つは、天井の東端のほぼ真下であり、空積みで、通廊内部の第3層の途中に作られている（写真16）。もう一つは通廊内部中央付近にあり、こちらも空積みである（写真17）。なお、この封鎖壁の西側には、北側の石壁を支えるように日干レンガの構造物が築かれている（写真18）。石壁が内側に向かって歪み、崩落しそうな箇所に築かれていることから、古代における補強の可能性が考えられる。

## ②岩窟墓

通廊の西側の岩盤部分には、岩窟墓が作られている。岩窟墓の入口は、岩盤に薄い石灰岩の板を貼った造りをし、幅約91cm、高さ約1.64mであった（写真20）。石灰岩の板は、入口の両脇と上部のまぐさ（リンテル）および天井に用いられ、まぐさの上部には凹面をしたコーニスとかまぼこ状のトラスが備えられた。石灰岩の表面は入念に整形されていたが、碑文などは刻まれていない。また通廊の両側壁は、この石灰岩の入口を一部覆い隠すように接続しており、両者の間には時期差があった可能性が高い。

コーニスの上には、ステラが岩盤に穿たれた窪みにはめ込まれた状態で発見された（写真19, 25）。ステラの前面には、内部に由来すると考えられるテラコッタ像（写真19, 28）、ランプ（図4, 写真19）、土器（図5.6, 7, 写真19, 35）などがある。層位の検討などから、これらの遺物はおそらく盗掘の際にここに置かれたものと考えられる。

岩窟墓の入口は少なくとも3種類の異なる封鎖壁で閉じられていた（写真20）。いずれも日干レンガの空積みで築かれ、上中下、それぞれの壁の間には砂が挟まっていた。複数回に渡る活動が窺われるが、その詳細については不明である。

入口前からは、南北で向かい合うように置かれた石灰岩製のライオンの横臥像が2体、古代に設置されたままの状態で発見された（写真21, 29, 30）。墓の入口を守るように置かれている。ライオンの横臥像の設置は、通廊が建てられた時期と同じであると考えられる。というのも、北側のライオンの横臥像は、前述した日干レンガの補強（写真18）に一部覆われており、通廊の壁の劣化に伴ってこのような補強がされたとするならば、ライオンの横臥像は通廊建設の初期から設置されていたと考えられる。

岩窟墓の内部は奥に長い一室で、幅は約2.5m、東西方向の奥行きは約15mと見積もられた（写真22）。第5次調査では内部の発掘は行わず、写真記録による現状の把握に努めた。内部には人骨と木棺が置かれ、一部は壁に穿たれた壁龕の中に納められていた。遺構の建造時期や性格などの最終的な結論は、次回以降の本格的な発掘調査を待つ必要があるが、現時点の見解としては、ローマ支配期前期に活動が営まれた集団地下墓地、いわゆるカタコンベを提示しておきたい。なお、納められた遺物の保安、保護にエジプト側から懸念が示され、協議の結果、ステラ（写真23, 26）、テラコッタ製像（写真24, 27）などを取り上げ、収蔵庫に移動した。





写真 16 通廊東側の日干レンガの封鎖壁  
Pl.16 Mud-brick sealed wall on the east of the vaulted structure



写真 17 通廊中央の日干レンガの封鎖壁  
Pl.17 Mud-brick sealed wall on the middle of  
the vaulted structure



写真 18 石壁を支える古代に作られた  
日干レンガの構造物  
Pl.18 Ancient restorations by mud-brick wall  
inside the vaulted structure



写真 19 岩窟墓入口上のメラネオスのステラ（原位置）およびテラコッタ像、ランプ、土器  
Pl.19 Stela of Menelaus *in situ*, and terracotta figurines, lamps and pottery vessels above the entrance of the catacomb



写真 20 岩窟墓入口および封鎖壁  
Pl.20 The entrance gate of the catacomb





写真21 原位置で発見された岩窟墓入口前のライオンの横臥像  
Pl.21 Two recumbent lion statues found *in situ* in front of entrance gate



写真22 岩窟墓内部（東より）  
Pl.22 The rock-cut tomb before excavation, viewing from the east



写真 23 岩窟墓内部のデメテリアのステラ  
Pl.23 Stela of Demeteria inside the rock-cut tomb



写真 24 岩窟墓内部のイシス・アフロディーテ女神と  
ハルポクラテス（ホルス）の彩色テラコッタ製像  
Pl.24 Painted terracotta statue of Isis-Aphrodite with  
an Harpocrates (Horus) inside the rock-cut tomb

### 3. 出土遺物

ここでは、今期の調査において出土した主な遺物について報告する。

#### (1) ステラ

##### ①メラネオスのステラ（写真 25）

NS05-o00820、岩窟墓入口上、幅 40.4cm、高さ 50.5cm、厚さ 9cm。

このステラは、前述のとおり、岩窟墓の入口の上に穿たれたニッチに原位置で据え置かれていたものである（写真 19, 25）。上部が半円形のステラである。部分的に彩色が残存している。最上部に天空のサイン pt があり、その下に有翼日輪が表され、その下に右からアヌビス神、トト神、ソカル神が表現されている。いずれの神々もウアス杖を手にしてしている。伝統的な古代エジプトの神々の姿であるが、アヌビス神とトト神のプロポーシオンは、プトレマイオス朝以降の人物像の特徴である膨らんだ腹部の特徴を示している（Robins 1994: 257）。

ステラの最下部にはギリシア文字が刻まれているが、一段低く削られた場所にあることから、ステラを再利用した可能性が考えられる。ギリシア語の碑文は、「フィルアモンの息子、メラネオス。召使い、敬虔なる者」と読める。文中の「召使い」は、おそらく神の「召使い」であり、メラネオスは聖職者であった可能性が高い。この人物のステラがカタコンベの入口の上のニッチに配されていた理由については、今後検討が必要である。

##### ②デメテリアのステラ（写真 26）

NS05-o00901、岩窟墓内部の北壁のニッチ、幅 32cm、高さ 60.5cm、厚さ 13.5cm。



このステラは、本来岩窟墓内部の北壁に穿たれたニッチに嵌め込まれたものであるが、そこから外れて落ちた状態で発見された（写真 23, 26）。矩形をしたステラである。ギリシア・ローマ風の神殿の中にデメテリアがブドウを持った姿で表されている。ブドウの下には犬が描かれている。デメテリアの衣装、ブドウ、犬、神殿の一部には彩色が施されている。浮き彫りは深く彫刻されており、人物像はギリシア・ローマ様式である。最下部にはギリシア文字が刻まれており、碑文は「デメテリア、メラネオス（の娘）、アンモニア（の孫娘）、讃えられし者、ご機嫌よう」と読める。

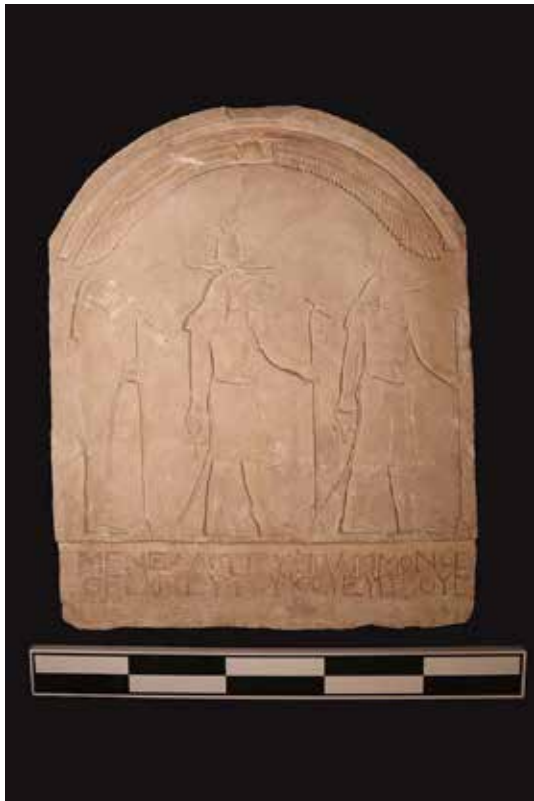


写真 25 岩窟墓入口上から原位置で発見された  
メラネオスのステラ  
Pl.25 Stela of Menelaus with the images of Anubis,  
Thoth and Sokar found above the entrance of the catacomb



写真 26 岩窟墓内部の部屋からほぼ原位置で  
発見されたデメテリアのステラ  
Pl.26 Stela representing Demeteria and her dog  
found inside the catacomb

## (2) テラコッタ製像

今期調査では、9体のテラコッタ製像が発見された。テラコッタ製像は、型で作られ、内部は中空であり、しばしば背面に孔が開けられている。彩色されたテラコッタ製像が9体中8体で、前面に背景となる白色のスリップを塗布し、その上に黒、ピンク、緑などで細部を表現している。

今回報告するテラコッタ製像は、いずれも「女神裸像」に分類され（Sandri 2012: 638）、このようなテラコッタ製像は埋葬と強い関わりがあったと考えられている（Sandri 2012: 638; Fink 2008, 2009）。また、本遺跡出土資料のように、出土状況が明確な資料は稀有であり、テラコッタ製像の利用方法について新しい視点を提示しうると考えられる。

### ①イシス・アフロディーテ女神とハルポクラテスの彩色テラコッタ製像（写真 27）

NS05-o00900、岩窟墓内部、幅 18cm、高さ 57.5cm、厚さ 16.5cm。

最も大きいテラコッタ製像は、ほぼ完形で岩窟墓内部から発見されたイシス・アフロディーテ女神の像であ



る（写真 24, 27）。左手に丸底の碗、右手にリュトンを持つ。頭部には2重の花輪に、二枚羽根と太陽円盤に牡牛の角で表現された、王朝時代の伝統的なハトホル女神あるいはイシス女神の頭飾りの下にバシレイオンと呼ばれる頭飾りを冠っている<sup>9)</sup>。また、足元には、バシレイオンを冠った肌の黒いハルポクラテス（ホルス）を連れている。



写真 27 岩窟墓内部から発見されたイシス・アフロディーテ女神とハルポクラテス（ホルス）の彩色テラコッタ製像  
Pl.27 Painted terracotta statue of Isis-Aphrodite with Harpocrates (Horus) found inside the catacomb

②イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像（写真 28.1）

NS05-o00824、岩窟墓入口上ステラ前、幅 7.1cm、高さ 42.2cm、厚さ 4.1cm。

③イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像（写真 28.2）

NS05-o00857、岩窟墓入口上ステラ前、幅 7.4cm、高さ 27.0cm、厚さ 4.8cm。

両者は、おそらく同じ型で作られたと考えられる。写真 28.1 は完形で、写真 28.2 は下部が欠けている。バシレイオンと呼ばれる頭飾りを身につけている。巻き髪で衣服を着用しており、衣服はキトンの上にフリンジの着いた布を巻きつけて胸部中央で結んでいる<sup>10)</sup>。衣服の類例はプトレマイオス朝時代からローマ支配期の像で見られる（Nagel 2015: 196–197）。

④イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像（写真 28.3）

NS05-o00823, o00825、岩窟墓入口上ステラ前、幅 9.2cm、高さ 40.8cm、厚さ 5.8cm。

同じくイシス・アフロディーテ女神がモチーフであり、頭にはバシレイオンを着用し、巻き髪で、衣服は着用していない。

## ⑤イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像 (写真 28.4)

NS05-o00823, o00850, 岩窟墓入口上ステラ前、幅 10.1cm、高さ 39.3cm、厚さ 5.6cm。

イシス・アフロディーテ女神がモチーフである。巻き髪で衣服を着用している。頭飾りにはカラトスと呼ばれる編み籠とコブラが表現されている。カラトスは紀元前3世紀～紀元後2世紀の例で見られる(BM1888,0601.110)。その他、類似した衣服と頭飾りをもつ類例はアンティノポリスから出土しており、紀元後2世紀～3世紀に年代づけられている(Dunand 1990: 136-137, no.360)。

## ⑥イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像 (写真 28.5)

NS05-o00893, 岩窟墓入口上ステラ前、幅 9.0cm、高さ 27.1cm、厚さ 6.2cm。

イシス・アフロディーテ女神がモチーフである。頭には花輪を冠り、その上にバシレイオンとカラトスが表現されている。類例はアンティノポリスから出土したルーヴル美術館所蔵のAF1290が挙げられ、紀元後2世紀～3世紀に年代づけられている(Dunand 1990: pl.345)。

## ⑦イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像 (写真 28.6)

NS05-o00855, 岩窟墓入口上ステラ前、幅 10.3cm、高さ 25.8cm、厚さ 4.3cm。

顔が欠損しているが、おそらくイシス・アフロディーテ女神がモチーフと考えられる。頭にバシレイオンを付け、右手にはリュトン、左手にはヤシの葉を持つ。ヤシの葉は、ギリシア・ローマ世界において勝利の女神と関連づけられている(Hvalvik 2006: 432)。



写真 28 岩窟墓入口上のステラ前から発見された彩色テラコッタ製像群  
Pl.28 Painted terracotta figurines found in front of the stela and the entrance gate of the catacomb

### (3) ライオン横臥像

2体のライオン横臥像が岩窟墓入口前から原位置で発見された(写真21)。入口の南側と北側にそれぞれ向き合うように設置されており、墓の入口を守護する意味合いで設置されたと考えられる。

#### ①石灰岩製ライオン横臥像(写真29)

NS05-o00904、岩窟墓入口前南側、幅58.0cm、高さ33.0cm、厚さ21.5cm。

類似したライオン横臥像は、ブルックリン博物館(37.1500E)の例がプトレマイオス朝からローマ支配期に年代づけられている。

#### ②石灰岩製ライオン横臥像(写真30)

NS05-o00905、岩窟墓入口前北側、幅55.5cm、高さ35.0cm、厚さ22.0cm。

### (4) ランプ

岩窟墓入口上のステラの前から完形のランプが4点発見された(写真19)。ランプの注口付近には、燃えた痕があり、実際に火を焚いていたと考えられる。型で上下を貼り合わせて作られている。層位の観察から、これらのランプは盗掘によってステラの前に置かれたと考えられる。

#### ①ランプ(図4.1)

NS05-o00853、岩窟墓入口上ステラ前、幅11.6cm、高さ12.8cm、厚さ5.6cm。

表面には、白色スリップが施されており、また裏面には焼成前にマークが刻まれている。類似したランプは、紅海沿岸のクセイル・アル＝カディムに見られ、紀元後1世紀～2世紀に年代づけられる(Whitcomb and Johnson 1982: pl.60.n)。

#### ②ランプ(図4.2)

NS05-o00854、岩窟墓入口上ステラ前、幅9.6cm、高さ16.4cm、厚さ6.9cm。

表面には、赤色スリップが施されている。

#### ③ランプ(図4.3)

NS05-o00856、岩窟墓入口上ステラ前、幅9.0cm、高さ13.9cm、厚さ4.7cm。

#### ④ランプ(図4.4)

NS05-o00863、岩窟墓入口上ステラ前、幅11.5cm、高さ14.8cm、厚さ5.2cm。

表面には、赤色スリップが施されている。類似したランプは、クセイル・アル＝カディムに見られ、紀元後1世紀～2世紀に年代づけられる(Whitcomb and Johnson 1979: pl.35.1; Whitcomb and Johnson 1982: pl.60.ee)。



写真 29 岩窟墓入口南側に置かれた  
石灰岩製ライオン横臥像  
Pl.29 Recumbent lion statue at the south of  
entrance gate of the tomb



写真 30 岩窟墓入口北側に置かれた  
石灰岩製ライオン横臥像  
Pl.30 Recumbent lion statue at the north of  
entrance gate of the tomb

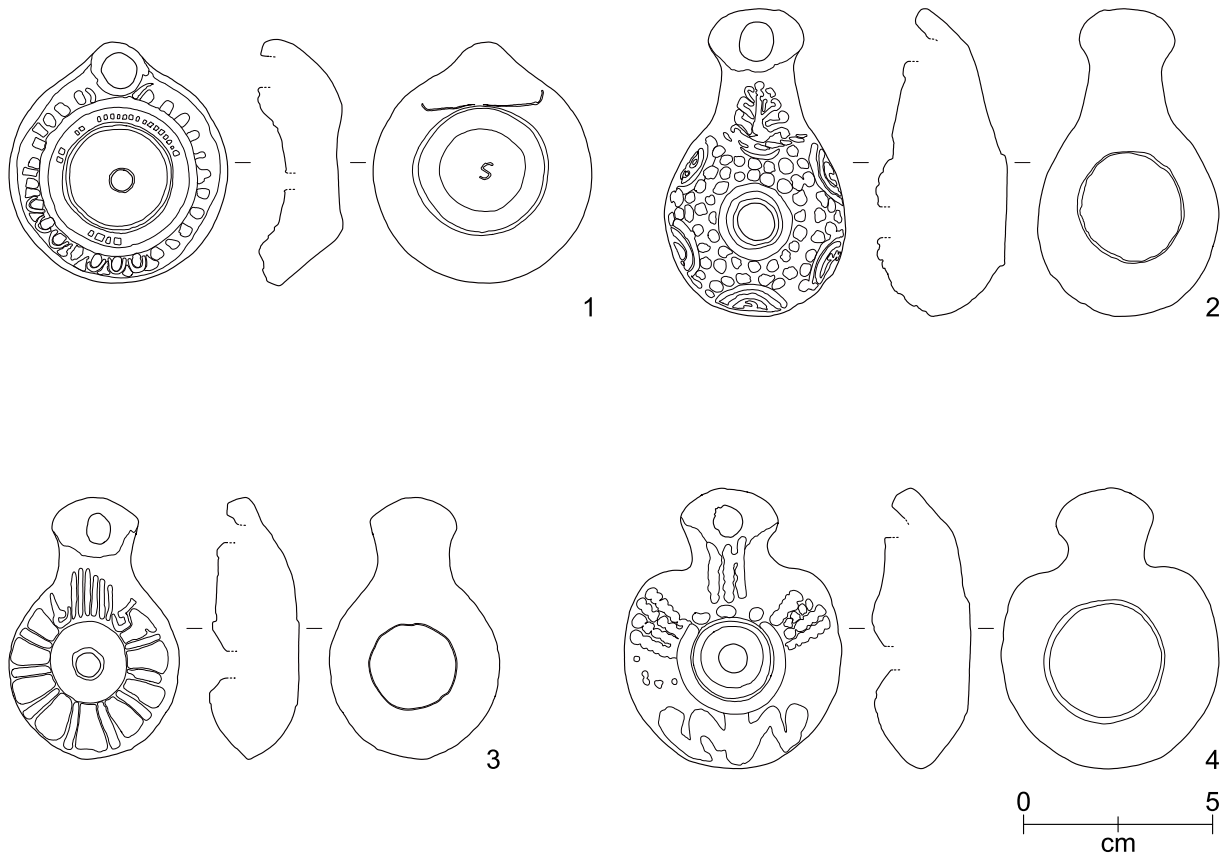


図4 ローマ支配期のランプ  
Fig.4 Lamps dating to the Roman period

## (6) 土器<sup>1)</sup>

今期調査では、主に①岩盤東側、②通廊、③岩窟墓の3箇所から土器が出土している。土器群の整理はまだ完了していないが、以下にそれぞれの場所の土器の特徴について述べてみたい。

### ①岩盤東側

岩盤の東側の発掘調査を行ったところ、第4次調査で集中して出土した土器群の北側に、その続きが確認された。土器群は主にローマ支配期初期（紀元後1世紀頃）のアンフォラ（図5.1, 写真31）で構成されている。前述したように、土器群は通廊崩落部分を囲うように置かれていることから、この通廊に入るための土留めの役割を果たしていたと考えられる。出土状況から過去に置かれたままの状況を保っていると考えられる。これらの土器群がどこからもたらされたのかについては、今のところ不明である。可能性の一つとして考えられるのは、岩窟墓内部からであるが、内部の発掘前の状況を見ると、アンフォラなどの同じような土器は確認できない。この点については、今後、岩窟墓内部の発掘調査後に検討してみたい。

その他、岩盤東側からは、碗形土器（図5.2）、ミニチュア壺（図5.3, 写真32）、把手付壺形土器（図5.4, 写真33）が出土しており、アンフォラを含め、これらが岩盤東側出土土器の基本的な構成となっている。類例から同じくローマ支配期初期（紀元後1世紀頃）に年代づけられる。これらも同様に、岩窟墓内部の発掘後に、どこに由来するのかについて検討してみたい。

#### 1) アンフォラ（図5.1, 写真31）

NS05-o00709、円環状の遺構内・黄色細砂層、口径11.7cm、最大径28.8cm、高さ93.2cm。

円環状の遺構中央から、逆さまの状態出土した（写真4）。ほぼ完形。類例は東部砂漠の採石場であるモンス・クラウディアヌスにあり、ハドリアヌス帝以降に年代づけられる（Tomber 2006: fig.1.57.12-859, 12-860; Tomber 2007: fig.3.2）。その他、デルタ地域のマレオタイデに類例がある（Empereur and Picon 1992: fig.3）。

#### 2) 碗形土器（図5.2）

NS05-o00740、円環状の遺構内・黄色細砂層、口径15.7cm、高さ6.7cm。

内面と外面の一部に赤色スリップが施されている。ほぼ完形。類例は、東部砂漠の採石場であるモンス・ポルフィリテスにある（Tomber 2001: fig.6.13.4, 5）。

#### 3) ミニチュア壺（図5.3, 写真32）

NS05-o00777、Area 4 黄色細砂層、最大径2.8cm、高さ8.8cm。

完形である。類例が、カルナクのアコリスの礼拝堂から出土しており、プトレマイオス朝時代からローマ支配期に年代づけられている（Lauffray 1995: figs.49.30, 53.2, 55.7, 44）。なお、アコリスの礼拝堂でも、テラコッタ製像、ランプと同じグリッドから出土しており（Lauffray 1995: fig.52.1, 67）、本遺跡と類似している。

#### 4) 把手付壺形土器（図5.4, 写真33）

NS05-o00763、円環状の遺構周辺・黄色細砂層、口径5.9cm、最大径11.2cm、高さ16.1cm。

完形である。類例は、東部砂漠の採石場であるモンス・クラウディアヌスにある（Tomber 2006: fig.1.20.29-224）。



## ②通廊

瓶形土器1点が岩窟墓入口前の盗掘に関連する層から出土し(図5.5, 写真34)、また瓶形土器2点が、岩窟墓入口上のステラ前から出土した(図5.6, 7, 写真35)。層位などを検討すると、盗掘などの結果、ステラ前などに土器が置かれたと考えられる。その他、内部に炭化した植物が残った状態の碗形土器が出土しており(図5.9, 写真36)、これらは儀式に使用された可能性が考えられる。通廊の土器は、いずれも原位置ではないと考えられるが、どこに由来するのかについて、今後、岩窟墓内部の発掘調査を待って結論づけたい。

### 1) 瓶形土器(図5.5, 写真34)

NS05-o00864、岩窟墓入口上ステラ前、口径2.5cm、最大径4.2cm、高さ8.9cm。

完形である。口縁は、注口のように一部すぼまっており、口縁から頸部に欠けて、黒色スリップと赤色スリップが施されている。

### 2) 瓶形土器(図5.6)

NS05-o00861、岩窟墓入口前、最大径4.5cm、高さ(残存部)10.0cm。

頸部に赤色スリップが施されている。口縁部は欠けている。

### 3) 瓶形土器(図5.7, 写真35)

NS05-o00862、岩窟墓入口上ステラ前、口径3.0cm、最大径5.7cm、高さ15.0cm。

完形である。口縁から頸部にかけて、黒色スリップが施されている。

### 4) 碗形土器(図5.8)

NS05-o00902、通廊内部、口径14.8cm、高さ5.4cm。

完形である。内面と外面の一部にクリーム・スリップが施される。類例は、紅海沿岸のクセイル・アル＝カディムに見られる(Whitcomb and Johnson 1982: pl.23.j)。

### 5) 碗形土器(図5.9, 写真36)

NS05-o00903、岩窟墓入口前、口径14.7cm、高さ6.2cm。

完形である。内部に炭化した植物(おそらくマツボックリなど)が残るとともに、土器にも火を焚いた痕が見られる。類似した土器は、東部砂漠の採石場であるモンス・クラウディアヌスにある(Tomber 2006: fig.1.11.40-129)。

## ③岩窟墓内部

壺形土器が部屋内部の入口近くの砂の上から出土した(図5.10, 写真37)。おそらく盗掘などの際に砂上に置かれたと考えられる。墓内部の木棺の中に、把手が付いているものの、同じ器形の土器があり、おそらくこの壺形土器も副葬品として納められていたと考えられる。

### 1) 壺形土器(図5.10, 写真37)

NS05-o00895、岩窟墓内部、口径11.0cm、最大径18.5cm、高さ18.3cm。

いわゆる“cooking pot”と呼ばれる器形である。完形。類例は、東部砂漠の採石場であるモンス・ポルフィリテスにあり(Tomber 2001: fig.6.4.45, 50)、ローマ支配期初期(紀元後1世紀頃)に年代づけられる。

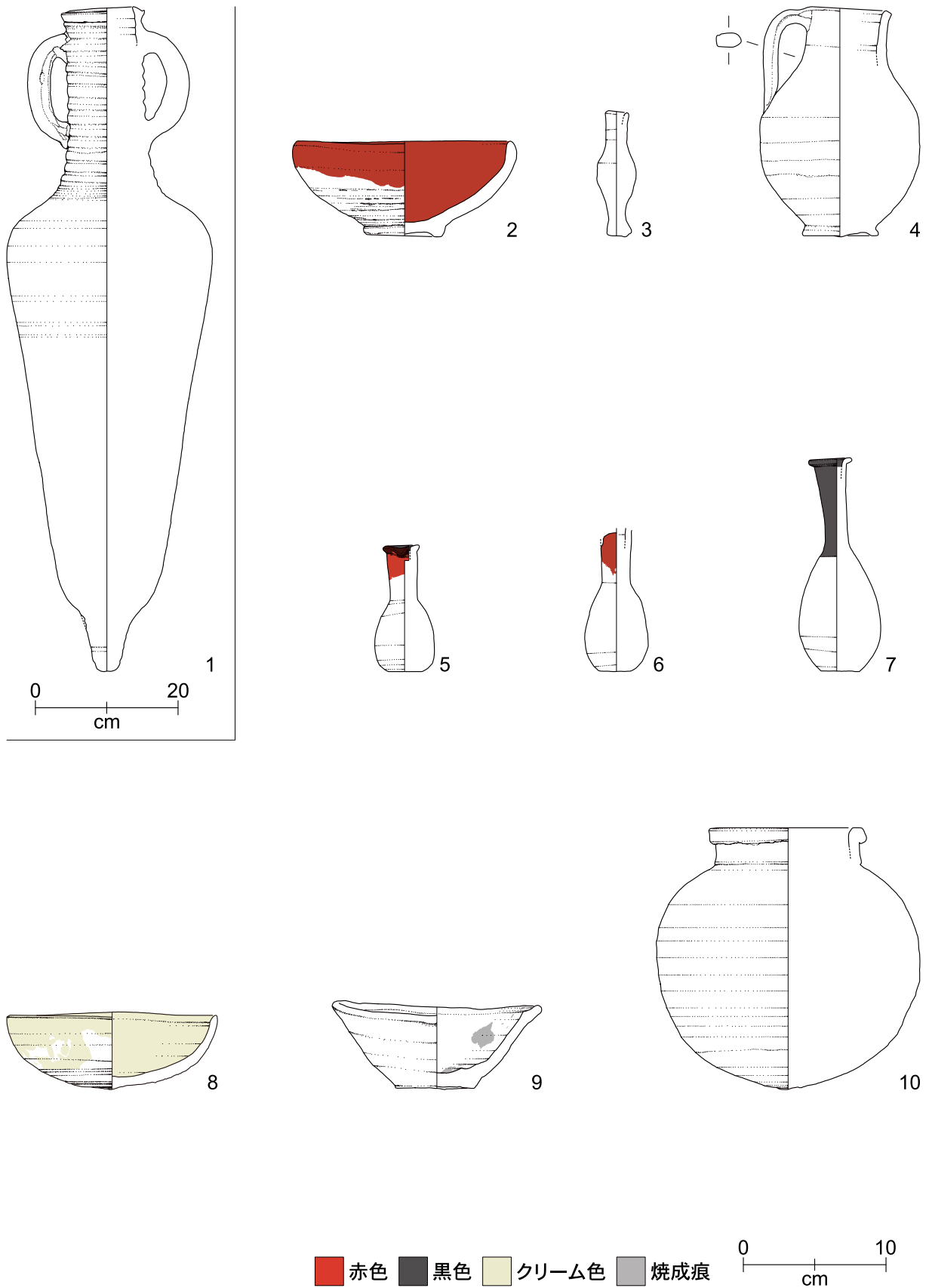


図5 ローマ支配期の土器  
Fig.5 Roman pottery vessels



写真31 アンフォラ  
Pl.31 Amphora



写真32 ミニチュア壺  
Pl.32 Miniature jar



写真33 把手付壺形土器  
Pl.33 Jug with one handle



写真34 瓶形土器  
Pl.34 Bottle



写真35 瓶形土器  
Pl.35 Bottle

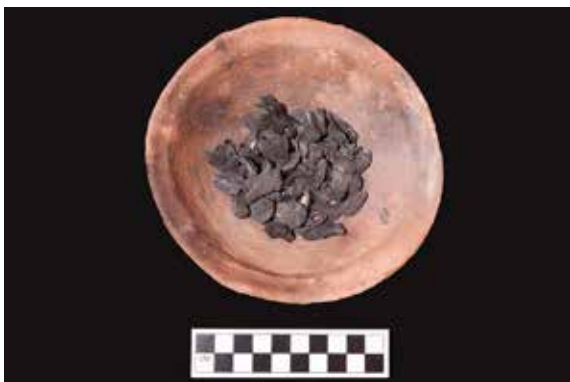


写真36 碗形土器  
Pl.36 Cup containing burnt remains



写真37 壺形土器  
Pl.37 Globular jar with rounded base

#### 4. まとめ

第5次調査では、第4次調査においてその一部が確認されていた遺構について詳細を明らかにすることができた。すなわち、第4次調査において岩盤東側で発見された土器の集中は、その下にある通廊にアクセスするために築かれた土留めであることが明らかとなった。また、この通廊は、西側の岩窟墓（ローマ支配期のカタコンベ）に続いていることも確認された。エジプトにおけるローマ支配期のカタコンベについては、これまでアレクサンドリアでは知られていたものの、サッカラ遺跡あるいはナイル川流域では初の発見である。なお、岩窟墓内部に関しては、来期以降、本格的な発掘調査を行う計画である。今期の発掘調査によって、良好な考古学的情報を持ったローマ支配期の遺物を得ることができ、ローマ支配期のエジプトを知る上で重要な情報を得ることができた。今後、本調査区において更に発掘調査を進め、岩窟墓の全体像を把握していきたい。

#### 謝辞

本調査は、科学研究費補助金基盤研究（B）「エジプト、北サッカラ遺跡における新王国時代墓地の総合的調査研究」（代表：河合 望（金沢大学）、課題番号：19H01337）および金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」（代表：河合 望）による研究の成果である。

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カーレッド・アル＝アナニー閣下（博士）、考古最高評議会事務総長ムスタファ・ワジーリー博士、外国調査隊管轄事務局長ナシュア・ガーベル博士、古代エジプト部部長アイマン・アシュマウィ博士、サッカラ査察局長サブリー・ファラグ氏、同ムハンマド・ユーセフ博士、サッカラ外国調査隊管轄事務局長サミール・ラマダン氏、主任査察官のマハムード・シャーバーン氏、サッカラ査察局修復士アマル・シェイカー博士、同ハッガーク・ユーセフ氏、査察官ムハンマド・マハムード氏、マルワ・マハムード・アハマド氏を始めとする方々に多大なご協力を頂いた（肩書きは調査時のもの）。カイロでは、早稲田大学エジプト学研究所カイロ・オフィスの吉村龍人氏、ムハンマド・アシュリー氏に考古省との渉外などで大変お世話になった。また、金沢大学人文学類フィールド文化学コース（考古学特別プログラム）4年の岡部 睦氏には、資料整理や図面の作成などでご協力いただいた。

ここに記して感謝の意を表する。

#### 註

- 1) メンフィスの墓地であるサッカラの概要と研究の問題点については、以下を参照（河合 2017）。
- 2) 調査区は、テティ王のピラミッドの北東、アヌピエイオンの北側に位置し、旧イギリス調査隊の発掘宿舍と旧査察局の間にあたる。
- 3) 調査の参加者は以下の通りである。考古班：河合 望、近藤二郎、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、岡部 睦、サブリー・ファラグ、ムハンマド・ユーセフ、アハマド・ジクリ、イスマイル・ムスタファ、建築班：柏木裕之、保存修復班：荻谷浩子、形質人類班：馬場悠男、坂上和弘、動物考古班：サリーマ・イクラム、現地渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 4) 本調査区は西側から東側に降る斜面になっており、斜面は真西に対して約 20 度振れている。従って、実際には南、北、東、西はそれぞれ南南東、北北西、東北東、西南東となる。ただし、方向が分かりにくくなるため、本稿ではそのまま南、北、東、西を用いることとする。
- 5) 布が巻かれた状態で発見された大人の単純埋葬（NS05-o00877）と子供の単純埋葬（NS05-o00766）に、金箔の付着が見られた。ローマ支配期では、頭、手、足に部分的に金の装飾を施す埋葬習慣があるとされている（Dunand and Roger 2006: 77）。金の装飾が施された単純埋葬は、これまでアンティノポリス、テーベ、カルガ・オアシスなどで確認されている（Dunand and Roger 2006: 77）。
- 6) 単純埋葬に関する形質人類学的調査については、以下を参照（坂上、馬場 2020; イクラム 2020）。
- 7) 層位などを見る限り、第5層はほぼ石灰岩で構成されており、第4層は日干レンガで構成されている。東側の石壁には、崩落した箇所が見られることから、例えば、まず東側の石壁が崩落し、その後、通廊の天井が崩落した可能性などが考えられる。



- 8) 例えば、再度、通廊を利用する際に、崩落した石灰岩や日干レンガを一度綺麗に片付けてから、通廊を利用することも考えられる。層位の観察では、一度の崩落しか分からないが、実際には何回か崩落していたのかもしれない。
- 9) 同じ姿勢のイシス・アフロディーテ女神とハルポクラテスのテラコッタ像の類例については、Dunand 1979: 182–183, pls.XXXI–XXXII を参照。
- 10) 衣服は、イシス・ドレスと呼ばれており、胸部中央の結び目は「イシスの結び目」を表すとされている (Nagel 2015: 196)。
- 11) 土器の胎土に関しては 10 倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った (Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130–132)。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した (Aston 1998: 41–51)。

## 参考文献

Aston, D.A.

1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I. Teil 1: Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.

Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.

2000 “Pottery”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121–147.

Dunand, F.

1979 *Études préliminaires aux religions orientales dans l’empire romain*, Leiden.

1990 *Catalogue des terres cuites gréco-romaines d’Égypte*, Paris.

Dunand, F and Roger, L.

2006 *Mummies and Death in Egypt*, New York.

Empereur, J.-Y. and Picon, M.

1992 “La reconnaissance des productions des ateliers céramiques: l’exemple de la Maréotide”, *Ateliers de Potiers et Productions Céramiques en Égypte, Cahiers de la Céramique Égyptienne* 3, pp.145–152.

Fink, M.

2008 “„Nackte Göttin“ und Anasyroméne. Zwei Motive — eine Deutung? (1. Teil)”, *Chronique d’Égypte* 83, pp.289–317.

2009 “„Nackte Göttin“ und Anasyroméne. Zwei Motive — eine Deutung? (2. Teil)”, *Chronique d’Égypte* 84, pp.335–347.

Hvalvik, R.

2006 “Christ Proclaiming His Law to The Apostles: The Traditio Legis-Motif in Early Christian Art and Literature”, in Fotopoulos, J. (ed.), *The New Testament and Early Christian Literature in Greco-Roman Context: Studies in Honor of David E. Aune*, Leiden, pp.403–435.

Lauffray, J.

1995 *La Chapelle d’Achôris à Karnak*, Paris.

Nagel, S.

2015 “The Goddess’s New Clothes. Conceptualising an ‘Eastern’ Goddess for a ‘Western’ Audience”, in Flüchter, A. and Schöttli, J. (eds.), *The Dynamics of Transculturality: Concepts and Institutions in Motion*, Heidelberg, pp.187–218.

Nordström, H-Å and Bourriau, J.

1993 “Ceramic Technology: Clays and Fabrics”, in Arnold, D. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143–190.

Robins, G.

1994 *Proportion and Style in Ancient Egyptian Art*, London and New York.

Sandri, S.

2012 “Terracottas”, in Riggs, C. (ed.), *The Oxford handbook of Roman Egypt*, Oxford, pp.630–647.

Tomber, R.

2001 “The Pottery”, in Maxfield, V.A. and Peacock, D.P.S. (eds.), *The Roman Imperial Quarries: Survey and Excavation at Mons Porphyrites 1994-1998, vol.I*, London.

2006 “The Pottery”, in Maxfield, V.A. and Peacock, D.P.S. (eds.), *Survey and Excavation, Mons Claudianus 1987-1993, Vol. III: Ceramic Vessels and Related Objects*, Cairo, pp.3–236.

2007 “Early Roman Egyptian Amphorae from the Eastern Desert of Egypt: a Chronological Sequence”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne* 8, pp.525–536.

Whitcomb, D.S. and Johnson, J.H.

1979 *Quseir al-Qadim 1978: Preliminary Report*, Cairo.

1982 *Quseir al-Qadim 1980: Preliminary Report*, Malibu.

河合 望

2017 「メンフィス・ネクロポリスの調査と研究」、常木 晃、西秋良宏、山内和也（編）、『西アジア考古学・最新研究の動向』季刊考古学第141号、雄山閣、pp.83-86.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花

2017a 「第1次北サッカー遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.127-144.

河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花

2017b 「第2次北サッカー遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.145-181.

河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

2018a 「第3次北サッカー遺跡踏査概報：踏査・測量・探査報告」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.48-81.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

2018b 「第3次北サッカー遺跡調査概報：試掘調査」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.82-112.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美、サリーマ イクラム

2020a 「第4次北サッカー遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.12-31.

坂上和弘、馬場悠男

2020 「北サッカー遺跡出土の単純埋葬遺体の形質人類学的調査」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.62-65.

サリーマ イクラム

2020 「2019年度北サッカー調査における動物遺存体とミイラに関する調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.66-73.

# 北サッカラ遺跡出土の単純埋葬遺体の 形質人類学的調査

坂上和弘\*<sup>1</sup>・馬場悠男\*<sup>2</sup>

## Anthropological Study of the Human Skeletal Remains from North Saqqara

Kazuhiro Sakaue\*<sup>1</sup> and Hisao Baba\*<sup>2</sup>

### Abstract

Human skeletal and mummified remains from 49 surface burials in front of Roman catacomb tomb at the North Saqqara conducted by Kanazawa University and the Institute of Egyptology, Waseda University from 2016 to 2019. This is an anthropological report of these human remains studied from 14th to 19th of September 2019.

The purpose of this survey is to list up basic information of these remains, with some morphological interpretations. All procedures were carried out without any breakage of the skeletal remains. Photographs were taken to record characteristics of each individual. In total, thirteen individuals were investigated in this season. There are some pieces of linen bandages adhered to bones of all individuals. This fact indicates that the skeletal remains were buried originally as artificial mummies. Interestingly, some parts of the body such as skulls and lower legs were missing in certain individuals (5 out of 13). In addition, in the “NS05-o00802” individual, 13 vertebrae (from the 3rd thoracic to the 3rd lumbar vertebra) were missing and the trunk was shortened in length. It is possible that these individuals were originally mummified artificially and buried somewhere else, then they were moved and buried at the unearthed places.

北サッカラ遺跡では、2016年から2019年の発掘調査によって、49体の単純埋葬遺体が発見されている（河合他 2018, 2020a, 2020b）。これらの遺体について、2019年9月14日から19日まで現地調査を行なった。調査では、遺体の基本的な情報を取得するとともに、若干の形態学的な解釈も行なった。また、それぞれの遺体について写真撮影記録を行なった（図1）。

今回は合計で13個体の遺体を調査した（表1）。すべての遺体において、骨の表面にリネン包帯の付着が認められた。従って、遺体はミイラ化された後に埋葬されたと考えられる。興味深いことに、13個体のうち6個体において頭部や下肢の一部が失われていた。また、NS05-o00802の遺体では、13個の椎骨（第3胸椎から第3腰椎まで）および肋骨の近位端が失われ、胴が縮められた状態で埋葬されていた（図2）。なぜ遺体の一部が失われたのかはまだ検討中であるが、例えば、別の場所に埋葬され、その後、ここに移動された後に再埋葬された可能性などが考えられる。

今回調査した13個体はミイラ化の処置が施されたと推定されるが、埋葬の場所やその後の状況によって、結果的には白骨化しており、本来のミイラの状態が残っていた個体は存在しない。また、鼻腔天井を確認で

\* 1 独立行政法人国立科学博物館人類研究部研究主幹

\* 2 独立行政法人国立科学博物館名誉研究員

\* 1 *Senior Researcher, Department of Anthropology, National Museum of Nature and Science, Tokyo*

\* 2 *Researcher Emeritus, National Museum of Nature and Science, Tokyo*

きた5個体では、いずれも鼻腔天井が破損されておらず、「脳出し」が行われていなかった。さらに、手の位置を確認できたのは11個体であるが、いずれも骨盤前に手を配置する姿勢であった。A.C. アウフデルハイデ (Aufderheide) によれば、ミイラ化にあたり鼻腔天井を破損する「脳出し」は中王国時代からローマ期にかけて見られるものとされている。ただ、ヘロドトスも「歴史」で記述しているように、「脳出し」は「最も高価なミイラ調製の方法」であり、「中級」や「下級」のミイラ制作方法では必ずしも「脳出し」が行われていたわけではない。また、古代エジプトミイラにおける手の配置は時代や身分によっても異なり、骨盤の前に手を配置する姿勢は古王国時代から末期王朝時代にかけていずれの時代でも見られるものとされている (Aufderheide 2003)。この姿勢も身分や地域によって異なり、ギリシャ支配期においても骨盤前に手を配置する姿勢は見られている (Elias et al. 2014)。したがって、今回調査した13個体のミイラ化手法から年代を絞り込むことは不可能であるが、今回調査した集団に施されたミイラ化手法は社会階層が上流の人々に使われていたものではない、とは言えよう。本人骨集団の脊椎骨には、関節炎症状や椎骨癒合などの重篤な障害が7個体に認められており、脊椎骨や肋骨の陈旧骨折は4個体に認められた。これらは、この集団が過酷な環境下において生活していた可能性を示唆しており、彼らの社会階層が高いものではない可能性を強く示唆している。

今後の調査によって本遺跡出土遺体の集団的特徴を明らかにする予定である。



図1 復元された頭蓋 (NS05-o00839, o00847, o00848)  
Fig.1 Reconstructed skulls of  
NS05-o00839, o00847 and o00848



図2 NS05-o00802 の出土状況  
Fig.2 Simple burial NS05-o00802



表1 今期調査した13体の遺体のリスト  
Table 1 List of 13 individuals investigated in this season

番号	性別	死亡時年齢	推定身長	保存状況	鼻腔天井	手の位置	歯の状態	椎骨の変性	特記事項
o00715	女性	老年		全身骨が残存している	不明	骨盤前	上下顎全歯槽退縮	C3-4 間に関節炎、Th12 圧迫骨折	頭蓋頭頂部に不整形な陥凹あり
o00764	男性	中年	1672mm	下顎骨以外の頭骨がない	不明	骨盤前	咬耗強、生前脱落と蝕あり	Th9-10 間に関節炎	右坐骨枝に骨髄炎あり
o00765	不明	幼年		棺に納められ全身骨が残存しているが、解剖学的位置は乱れている	不明	不明	上下中切歯以外未萌出		左側頭骨に乳突峰巣炎あり
o00766	男性	中年	1677mm	膝関節より遠位部分がない	破損なし	骨盤前	咬耗強、生前脱落と蝕あり	C1 後縁に炎症、C2 棘突起変形、Th に骨棘	矢状縫合早期癒合症か？
o00802	男性	思春期		上部胸椎～上部腰椎部がなく、下腿骨近位部より遠位部分もない	不明	骨盤横？	咬耗弱	Th3-L3 までは破片すらない	左右尺骨近位骨幹に骨膜炎
o00826	女性	青年	1511mm	下顎骨以外の頭骨はなく、下腿骨近位部より遠位部分もない	不明	骨盤前	咬耗弱、生前脱落あり	Th9-12 間に関節炎	右上腕骨滑車部に変形があり、Hegemann 病の可能性がある
o00829	男性	中年	1654mm	頭骨はなく、膝関節より遠位部分もない	不明	骨盤前		L3 左肋骨突起に骨増殖、L3-4 関節に左右差、L に骨棘	腰椎に側彎あり
o00830	男性	思春期	1629mm	全身骨が残存している	破損なし	骨盤前	咬耗強、生前脱落と蝕あり	L に骨棘	矢状縫合早期癒合症、左右肋骨に陳旧骨折あり
o00847	男性	中年		ほぼ全身骨が残存している	破損なし	骨盤前	咬耗強、生前脱落と蝕あり	C2 と C3 が癒合、Th1-4 間に関節炎、Th-L に骨棘	クリプラオルピタリアあり、右恥骨下枝に陳旧骨折あり、左手第3末節骨関節面に象牙質化、右尺骨肘頭に異所性骨化
o00848	男性	中年		ほぼ全身骨が残存している	破損なし	骨盤前	咬耗強、生前脱落と蝕あり	Th11 と Th12 が癒合、Th に骨棘	胸椎癒合は陳旧性の圧迫骨折によるものと推定される
o00878	男性	中年		全身骨が残存している	不明	骨盤前	上顎歯槽退縮、下顎咬耗強、生前脱落	C3-4 間、Th9-10 間に関節炎、棘突起湾曲	左大腿骨後面に外傷性骨化性筋炎あり
o00883	男性	老年	1740mm	ほぼ全身骨が残存している	破損なし	骨盤前	上顎歯槽退縮、下顎咬耗強、生前脱落	C2-C3 間に関節炎、Th8-L1 関節に左右差、L に骨棘	下部胸椎に側彎あり、右下顎枝に異所性骨化(腫瘍)あり、舌骨および右肋骨に陳旧骨折あり、左脛骨および腓骨近位に骨膜炎
o00884	男性	思春期		一部を除き手骨がなく、大腿骨中央部より遠位部分もない	不明	骨盤前	蝕あり		若年にもかかわらず蝕あり

## 参考文献

Aufderheide, A.C.

2003 *The Scientific Study of Mummies*, Cambridge.

Elias J., Lupton C. and Klales A.

2014 “Assessment of Arm Arrangements of Egyptian Mummies in Light of Recent CT Studies”, *Yearbook of Mummy Studies* vol.2, pp.49–62.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

2018 「第3次北サッカー遺跡調査概報：試掘調査」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.82–112.

河合 望、吉村作治、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美、サリーマ イクラム

2020a 「第4次北サッカー遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.12–31.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、馬場悠男、坂上和弘、サリーマ イクラム

2020b 「第5次北サッカー遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.32–61.

# 2019 年度北サッカラ調査における 動物遺存体とミイラに関する調査概報

サリーマ イクラム\*

Brief Report on Work Carried Out During the 2019 Season of  
the Japanese-Egyptian Mission to North Saqqara

Salima Ikram\*

## Abstract

Work was carried out on two major groups of objects: animal remains and human mummies. In the case of the animal remains, the work focused on loose bones as well as mummified animals. For the mummies, attention was paid to both the creatures that were mummified as well as the techniques of mummification. For the human mummies, the focus was on their mummification.

## 1. はじめに

本稿では、日本・エジプト合同サッカラ調査隊の第3次から第5次調査にかけて出土した動物遺存体、人間のミイラなどに関する調査の概要を報告する。動物遺存体については、骨片とミイラについて分析を行った。特に動物のミイラについては、ミイラ化された動物の種類とそれらのミイラ製作の技術について焦点を当てた。一方、人間のミイラについてはミイラ製作技法について焦点を当てた。

## 2. 動物のミイラ

いくつかの異なる出土コンテキストから動物のミイラが発見された。その大部はイヌのミイラである。それらの残存状況は、あまり良好ではないが、ミイラ製作技法の情報を得るには十分であった。

動物のミイラの多くは、第4次調査において発掘区 Area 1、2の西端、斜面上部に位置するタフラ⑧層から出土したものであり（河合他 2020a: 21）、26体のイヌのミイラと数体のネコのミイラが確認された（写真1）。イヌのミイラの中にネコのミイラが混ざるとは他遺跡でも見られ、近隣のアヌビスのカタコンベでは、イヌのミイラの中にネコやマンガースのミイラも混ざっていた（Ikram et al. 2013; Nicholson et al. 2015）。出土したイヌのミイラは、子犬から成犬まで多岐にわたるが、多くは1歳以下の年齢であった。この傾向はアヌビスのカタコンベやアシュートのイヌの墓地でもみられる（Kitagawa 2016）。興味深いことに、1体のイヌのミイラ（NS04-o00435）では、肋骨が異なる部分で2回折られており、その後に修復されていた。肋骨の破損と修復の性質を考えると、人間が肋骨の治療に関与していたかどうかは不明である。

動物の毛皮の色は一様ではない。大部の毛皮は黄色系の茶色で、いくつかは焦げ茶色であったが、1つは、黄色と黒色のまだら模様であった。これは、おそらくミイラ製作時になされたのかもしれない。

出土した動物のミイラの製作技法は比較的良質であった。これは、比較的温湿度の変化が激しいアヌビスの

\* カイロ・アメリカン大学社会学エジプト学人類学科教授

\* Professor, Department of Sociology, Egyptology and Anthropology,  
American University in Cairo



写真1 第4次調査で出土したイヌのミイラ  
Pl.1 Dog mummy found in the fourth season

カタコンベの出土のものよりも良質である。本調査区から出土した動物のミイラは砂の中に包含された状態で発見されており、本来別のカタコンベ由来だとしても別の年代のものと思われる。動物は、ナトロンや一種の塩類を用いて乾燥化され、樹脂あるいは香油が塗られた後に、亜麻布で巻かれたようである。そして、それは樹脂と香油を混ぜた暗色の樹脂のような液体に浸漬された。暗色の物質に浸漬された亜麻布の詰め物は、胎内、特に腹部と四肢の間に詰められた。いくつかの動物のミイラにはパピルスの茎が使われ、1体の断片となったミイラからは原位置で確認された。この例では、イヌの四肢はパピルスの条片で姿勢が維持され、その上から亜麻布が4層にわたって被せられていた。おそらく、より多くの亜麻布が巻かれていたと思われるが、原状を留めていないのであろう。パピルスは、ローマ支配期のコム・メレフ出土のガゼルのミイラで使用されていたことが知られている (Ikram and Iskander 2002)<sup>1)</sup>。他の動物のミイラでパピルスが使用された例では、ファイユームのディール・アル＝バナート出土の仔牛やイヌに認められる (Ikram and Iskander 2002; Ikram 2013)。

保存された遺体から、イヌ（そしておそらくネコも）は、標準的な姿勢をしていたと考えられる。つまり、座って、後ろ足を少し押し上げて、前足が胴体の長さに沿って横たわった姿勢である。尾（しばしば別々に巻かれた）は後脚を通して引っ張られ、腹の上に置かれた。

すべての動物のミイラが良好に製作されたわけではない。1つの例 (NS04-o00430) では、いくつかのハエの蛹が毛皮に入っていた。ハエの蛹が集まって遺体がミイラ化する前に死んで腐食し始めたか、ミイラ製作者が遺体をナトロンで十分に覆っていなかったため、ハエが死体に侵入できるようになったと考えられる (Ikram 2015a)。

1匹のミイラはやや異常で (NS04-o00434)、それは、涙状の形をしていた。この形はトキの埋葬でより一般的である (Ikram and Iskander 2002)。X線撮影は行っていないため、実際に鳥のミイラであるか、または一部の子犬のミイラがこの方法で包まれていたかは不明である。



これまで出土した全ての資料を調べたわけではないが、これらはおそらく北サッカラにおけるアヌビスの祭祀に関連していたと考えられる。同じような例は、P. ニコルソン (Nicholson) のチームが調査したカタコンベに加えて、J. ド・モルガン (De Morgan) によって作成されたサッカラの地図 (De Morgan 1897) 上にマークされた2番目のカタコンベ、テティ王のピラミッド複合体のイヌの埋葬、そしてテティ王ピラミッド墓地 (Hartley et al 2011)、2017年から2019年にエジプト隊によって発掘された北サッカラ台地の崖際の初期王朝時代のいくつかのマスタバ墓での埋葬が知られている<sup>2)</sup>。明らかに、サッカラのこの地域全体は、イヌが圧倒的に多い動物の埋葬地で溢れている。これらの祭祀は、地域の宗教的、社会的、文化的、経済的生活 (Ikram 2015b) で重要な役割を果たしていたと考えられる。

### 3. 動物遺存体

2017年に実施した第3次調査 (河合他 2018) で出土した一連の動物遺存体の調査も実施した (写真2)。これらにより、ヒツジ、ウシ、ブタ、ナイルパーチ、ヤギなど、さまざまな種が確認された (表1の最小個体数を参照)。遺存体の大部分は、あらゆる年齢のヒツジの角核と四肢骨であった。ヒツジは、オスとメスの両方が含まれていた。またヤギ由来の角が2点確認された。ブタについては、若いブタ (2歳未満) と高齢ブタ (3.5歳以上) の両方が含まれていた。少数のウシの遺存体は、若い動物の (抜け落ちた) 歯で構成されており、単

表1 各動物遺存体の最小個体数  
Table 1 Minimum number of individuals of each taxon

ヤギ	ヒツジ	ブタ	ウシ	ナイル・パーチ
19	2	5	2	1



写真2 第3次調査で出土した動物骨  
Pl.1 Animal bones found in the third season

一の個体に由来している可能性がある。発見された唯一のウシの骨は踵骨と中足骨の一部だったが、骨はどちらも骨端が欠けていたため、年齢は特定できなかった。これらの遺存体で特に印象的なのは、角の数である。その多くは、おそらく屠殺場に関連したチョップマークを示していた。角は成熟した動物のもので、珍しい。ヒツジの骨も通常よりも大きく見えたが、完全な骨端の数が不十分であり、年齢を特定する測定ができないため、通常よりも大きいという印象は、科学的ではなく、直感的に考えたものである。

#### 4. 人間のミイラ

2019年の第5次調査では、発見されたローマ支配期のカタコンベの東側から数多くの人間のミイラ化された遺体が発見された。人類学的な所見は、馬場悠男博士と坂上和弘博士によって報告があるが（河合他 2020b; 坂上、馬場 2020）、ここではミイラ製作に関する所見について述べたい。

##### (1) NS05-o00877 (写真3)

身長 170cm、肩幅 35cm、臀部幅 33cm

埋葬姿勢は仰臥位。南北方向に埋葬。頭位方向は南向き、顔は東向きであった。腕を伸ばし、左腕を腰に、右腕を体の側面に沿って配置していた。足首と膝は亜麻布のストリップで結ばれていた。手首や腰には何も特徴的なものは認められなかったが、おそらく風化していたと考えられる。包帯の下では、ほとんどの場所で皮膚は確認できなかった。それは、粉末になったか、高温の樹脂/香油を塗布することによって焼失し、骨だけが残ったためと考えられる。しかし、髪は残存しており、色は薄茶色で、端は整然と切り取られていた。塩類（またはおそらくナトロン）のように見えるものが髪の一部に確認された。頭は少なくとも12層の亜麻布で非



写真3 単純埋葬 (NS05-o00877)  
Pl.3 Simple burial (NS05-o00877)

常によく覆われており、そのうちのいくつかは黒い樹脂状物質で含浸されていた。包帯の一部が脱落すると、顔の皮膚にわずかな量の金箔が残っていた。おそらく本来はより多くの金箔が覆われていたが、残存しなかったとみられる。金箔はプトレマイオス朝の年代を示唆する。

腕は7～10層の亜麻布の包帯で覆われていた。最も外側の包帯は幅が広く、平均12cmであった。かなりの量の樹脂/香油がミイラの包帯の上に塗られ、それらを通して浸透した部分がいづつか確認された。第21王朝のイシスエムケブD王妃のベット用ガゼルで指摘されているのと同様に、体腔がゆるい砂で満たされているようであった (Ikram and Iskander 2002)。胃の上の部分には、少なくとも12束の樹脂の塗られた亜麻布が身体に押し込まれていた。遺体は腸が抜かれたようである。異なる品質の亜麻布が身体全体に使用され、その大部分はかなりしっかりした中間品質の亜麻布であった。

#### (2) NS05-o00884 (写真4)

頭蓋骨の断片、茶色の髪、一部は油のシミが付着。粗い亜麻布が巻かれ、また手足の部分にはミイラ化は見られない。なお、坂上博士は15～17歳の男性としている。

#### (3) NS05-o00889 (写真5)

男性の遺体。仰臥伸展葬のミイラ。頭位方向は、南向き。南北方向に埋葬され、顔は西向きであった。腰の骨や恥骨に腕をかけている。一部の短い髪は頭に残存しており、ナトロンの残留物もあった。頭は足より高いが、体が斜面に埋もれていたため、これが意図的かどうかは不明である。左上腕骨が骨折した後に治癒し、椎骨がしわになっていた。体は亜麻布の包帯で覆われており、胸部の心臓部分には植物性材料の塊が確認された。この遺体もコプト時代に年代づけられる可能性がある。コプト時代のミイラは、一般的には質が高いものの、植物性の物質が含まれていることが多いためである。

#### (4) NS05-o00890 (写真6)

身長168cm、肩幅29cm、臀部幅36cm

仰臥伸展葬のミイラ。頭位方向は北向き。南北方向に埋葬され、顔は西向きであった。頭部には油や樹脂が付着した焦げ茶色の髪の毛が確認された。腕の位置は不明瞭だが、おそらく体の側面に沿っていると思われる。頭は意図的に上げられているようである。膝はハルファ製の縄で結ばれていた。ただし、足首が同じように処理されていたかは不明である。頭部については、他の部分よりも包帯が厚く巻かれていた。右腕は最初に幅広の布で縦方向に包まれ、水平に螺旋状に包まれた幅の狭い包帯が肘に追加され、手首まで垂れ下がっていた。包帯のいくつかは、赤い縁のある白あるいはベージュ色であり、そのうちのいくつかは非常に狭くテープのようである。このミイラはコプト時代に年代づけられると考えられる。

#### (5) NS05-o00912 (写真7)

仰臥伸展葬の遺体。頭位方向は南向きである。亜麻布はほとんど残存しておらず、樹脂/油の痕跡も確認されなかった。他の遺体よりも華奢である。





写真4 単純埋葬 (NS05-o00884)  
Pl.4 Simple burial (NS05-o00884)



写真5 単純埋葬 (NS05-o00889)  
Pl.5 Simple burial (NS05-o00889)



写真6 単純埋葬 (NS05-o00890)  
Pl.6 Simple burial (NS05-o00890)



写真7 単純埋葬 (NS05-o00912)  
Pl.7 Simple burial (NS05-o00912)



## 註

- 1) これらはプトレマイオス朝時代末期からローマ支配期前期に年代づけられている (Richardin et al. 2017)。
- 2) ラシャ・ナセル氏からの情報と自らの観察による。

## 参考文献

Hartley, M., Buck, A. and Binder, S.

- 2011 “Canine Interments in the Teti Cemetery North at Saqqara during the Graeco-Roman Period”, in Bárta, M., Coppens, F. and Krejčí, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2010*, Prague, pp.17–29.

Ikram, S.

- 2013 “Man’s Best Friend for Eternity: Dog and Human Burials in Ancient Egypt”, *Anthropozoologica* 48, 2, pp.299–307.  
 2015a “Experimental Archaeology: From Meadow to Em-baa-lming Table”, in Graves-Brown, C. (ed.), *Egyptology in the Present: Experiential and Experimental Methods in Archaeology*, Swansea, pp.53–74.  
 2015b “Speculations on the Role of Animal Cults in the Economy of Ancient Egypt”, in Massiera, M., Mathieu, B. and Rouffet, F. (eds.), *Apprivoiser le sauvage - Taming the Wild: Glimpses on the Animal World in Ancient Egypt*, Montpellier, pp.211–228.

Ikram, S. and Iskander, N.

- 2002 *Catalogue Général of the Egyptian Museum: Non-Human Remains*, Cairo.

Ikram, S., Nicholson, P., Bertini, L. and Hurley, D.

- 2013 “Killing Man’s Best Friend?”, *Archaeological Review from Cambridge* 28, 2, pp.48–66.

Kitagawa, C.

- 2016 *The Tomb of the Dogs at Asyut: Faunal Remains and Other Selected Objects*, Wiesbaden.

De Morgan, J.

- 1897 *Carte de la Nécropole de la Memphite: Dahchour, Sakkarah, Abou-Sir*, Cairo.

Nicholson, P.T., Ikram, S. and Mills, S.

- 2015 “The Catacombs of Anubis at North Saqqara”, *Antiquity* 89, 345, pp.645–661.

Richardin, P., Louarn, G., Berthet, D., Ikram, S. and Porcier, S.

- 2017 “Cats, Crocodiles, Cattle, and More: Initial Steps Toward Establishing A Chronology of Ancient Egyptian Animal Mummies”, *Radiocarbon* 59, 2, pp.595–607.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

- 2018 「第3次北サッカー遺跡調査概報：試掘調査」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.82–112.

河合 望、吉村作治、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美、サリーマ イクラム

- 2020a 「第4次北サッカー遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.12–31.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、馬場悠男、坂上和弘、サリーマ イクラム

- 2020b 「第5次北サッカー遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.32–61.

坂上和弘、馬場悠男

- 2020 「北サッカー遺跡出土の単純埋葬遺体の形質人類学的調査」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.62–65.

## 調査報告

# 第12次ルクソール西岸 アル＝コーカ地区調査概報

近藤 二郎\*<sup>1</sup>・吉村 作治\*<sup>2</sup>・柏木 裕之\*<sup>3</sup>  
河合 望\*<sup>4</sup>・高橋 寿光\*<sup>3</sup>・福田 莉紗\*<sup>5</sup>

## Preliminary Report on the Twelfth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition

Jiro Kondo\*<sup>1</sup>, Sakuji Yoshimura\*<sup>2</sup>, Hiroyuki Kashiwagi\*<sup>3</sup>,  
Nozomu Kawai\*<sup>4</sup>, Kazumitsu Takahashi\*<sup>3</sup> and Risa Fukuda\*<sup>5</sup>

### Abstract

The team from the Institute of Egyptology at Waseda University has carried out clearance, conservation, and documentation at the tomb of Userhat (TT47), Overseer of King's Private Apartment under Amenhotep III, and other tombs in the vicinity at al-Khokha area in the Theban Necropolis since 2007. Although the tomb of Userhat (TT47) is one of the most important private tombs from Amenhotep III's reign, no comprehensive scientific research has been undertaken because its exact location had become unknown even after Howard Carter wrote its short report in 1903.

In the previous seasons, we uncovered the entrance of the tomb of Userhat (TT47), which has the lintel and doorjambs on both sides. They were decorated with incised hieroglyphic inscriptions and the figures of the tomb owner, Userhat. We have also located the subterranean structure of the tomb through the clearance of the debris in a hole where the ceiling of the chamber has collapsed in the past. At the south side of the western rear wall of the transverse hall, we found a relief decoration which depicts Amenhotep III and Queen Tiye seated under a canopy. At the inner chamber, we found a dyad, probably of Userhat and his wife, carved in the south wall of the chamber. We found an unfinished tomb (KHT01) to the south of the forecourt of the tomb of Userhat (TT47) in the course of our clearance. The entrance of KHT01 is hewn on the southern wall of the forecourt of the tomb of Userhat (TT47). It was found out that the tomb KHT01 leads to another tomb, the tomb of Khonsuemheb (KHT02) who has the title of the Chief of the Workshop and Chief Brewer of the Mut temple. We also discovered the tomb of Khonsu (KHT03), who has the title of the Royal Scribe, during our clearance at the east of the forecourt of the tomb of Userhat (TT47).

In this season, we conducted our clearance at the area above the inner chamber of the tomb of Userhat (TT47), which is still covered by huge heap of debris, for the future conservation work inside the tomb. The archaeological engineering research on the tomb of Userhat (TT47) was carried out for future engineering works. The conservation

\* 1 早稲田大学文学学術院教授 / 早稲田大学エジプト学研究所所長

\* 2 東日本国際大学学長 / 早稲田大学名誉教授

\* 3 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授

\* 4 金沢大学新学術創成研究機構教授

\* 5 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

\* 1 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University / Director, Institute of Egyptology, Waseda University*

\* 2 *President, Higashinippon International University / Professor Emeritus, Waseda University*

\* 3 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*

\* 4 *Professor, Institute for Frontier Science Initiative, Kanazawa University*

\* 5 *Doctoral student, Department of Archaeology, Waseda University*

work and archaeological clearance were carried out in the tomb of Khonsuemheb (KHT02) for its preservation. The anthropological study of the human skeletal and mummified remains was also conducted.

## 1. はじめに

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1972年1月にエジプト・アラブ共和国、ルクソール西岸のマルカタ南遺跡で発掘調査を開始し、1974年1月にコム・アル=サマク（魚の丘）において、新王国時代第18王朝アメンヘテプ3世時代の彩色階段を発見した<sup>1)</sup>。この発見を受けて、アメンヘテプ3世時代をその後の主な研究対象とし、アメンヘテプ3世の王宮であるマルカタ王宮、アメンヘテプ3世時代のルクソール西岸の岩窟墓や王家の谷・アメンヘテプ3世王墓の調査など、当該時代の研究を進めてきた<sup>2)</sup>。

こうしたアメンヘテプ3世時代の研究の一環として、早稲田大学エジプト学研究所は、2007年度から新たにルクソール西岸、アル=コーカ地区に位置するアメンヘテプ3世時代の岩窟墓、ウセルハト墓（TT47）を対象に調査を開始した（図1, 2）。調査の対象としたウセルハト墓（TT47）は、アメンヘテプ3世の後宮（ハーレム）の長官などを務めたウセルハトという人物の墓で、アメンヘテプ3世時代の高官墓に特徴的な、良質なレリーフ装飾と列柱を備えた大型岩窟墓の1つとして極めて重要である。本調査では、墓の構造、装飾、被葬者の称号、家族関係などを明らかにするとともに、これらの資料をもとに研究を実施し、同時代の大型岩窟墓

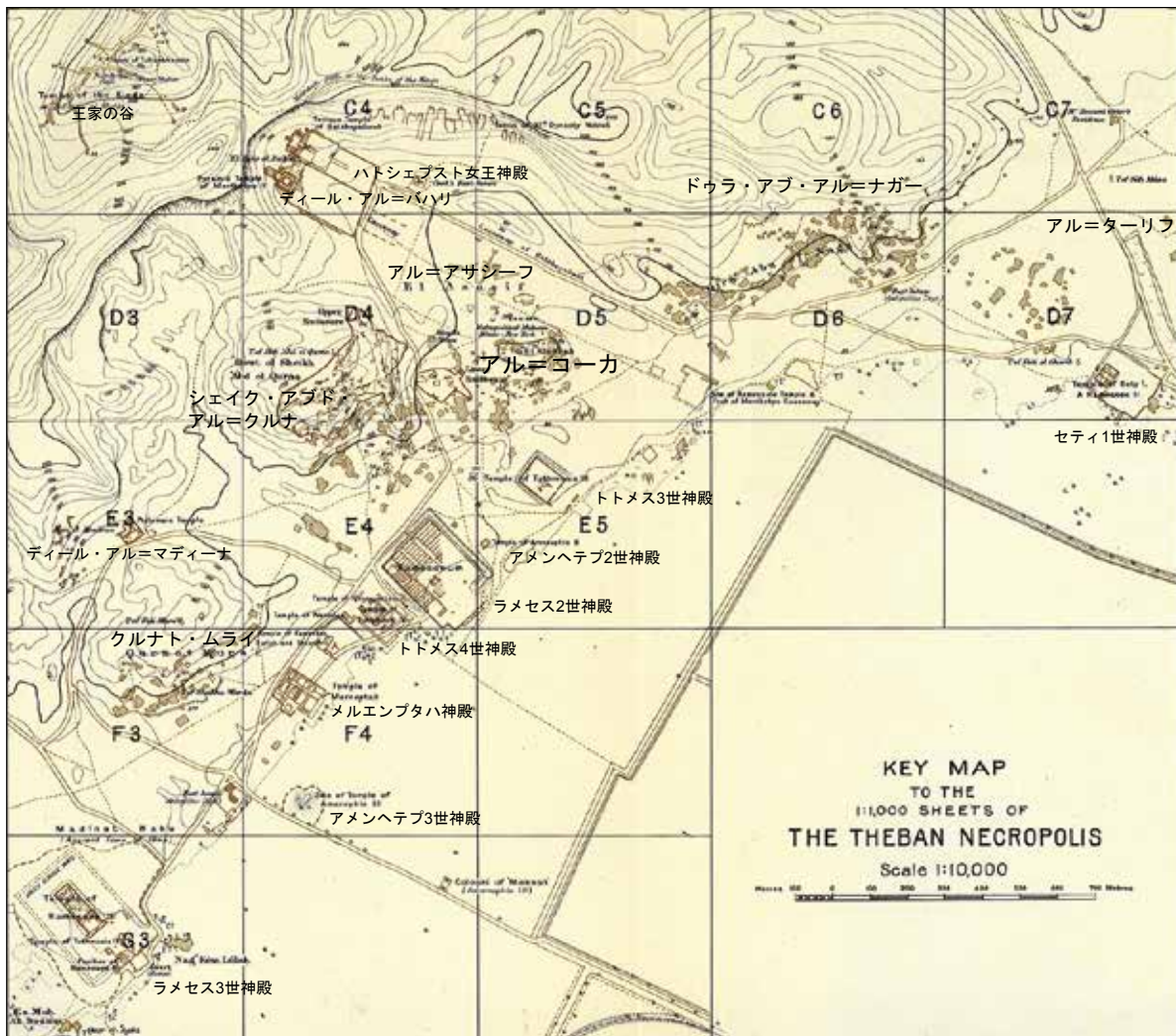


図1 ルクソール西岸地図 (Engelbach 1924: pl.II を一部改変、スケール 1:20,000)

Fig.1 Map of Theban Necropolis



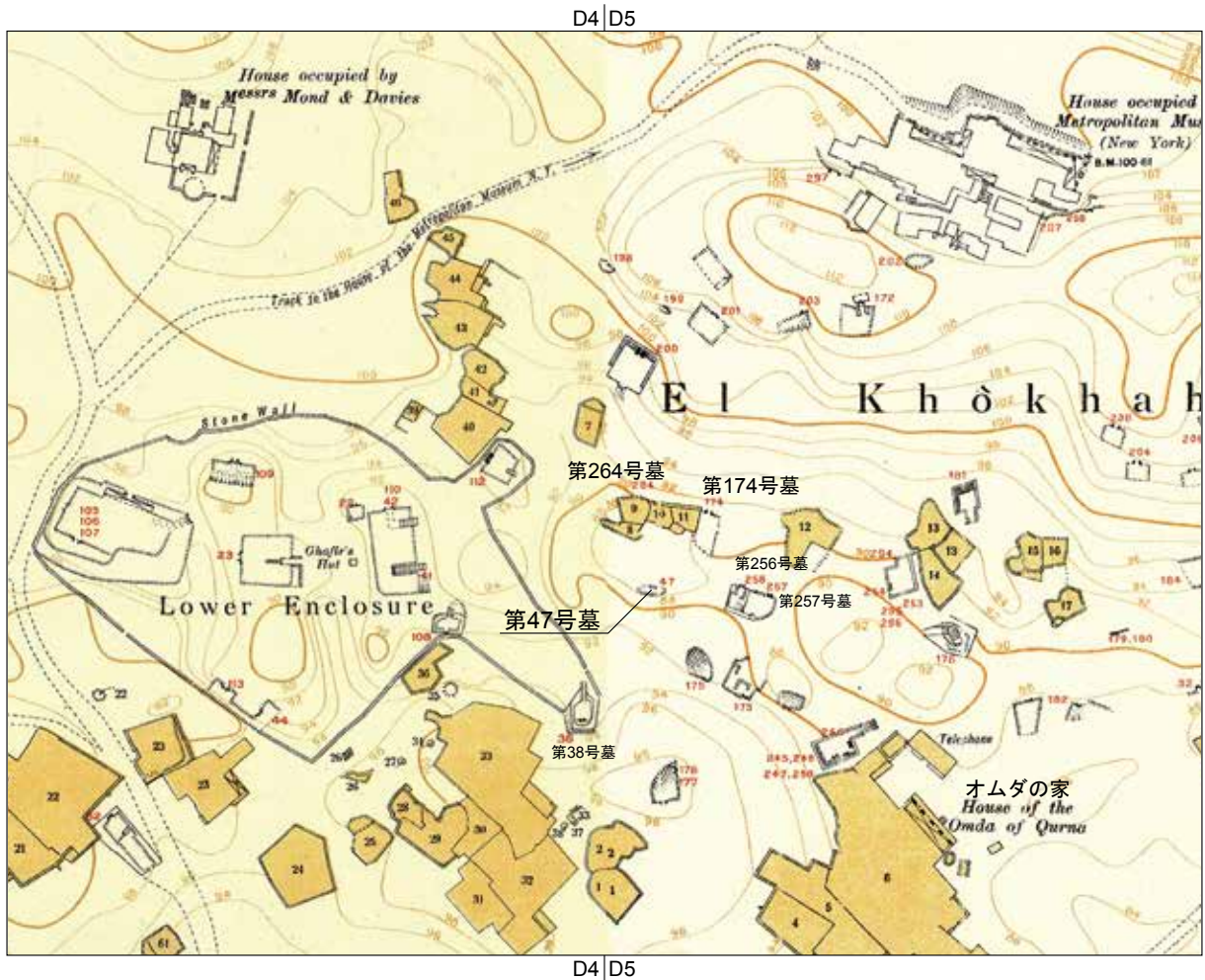


図2 アル=コーカ地区地図 (“Map of the Theban Necropolis” of Survey of Egypt from 1922 to 1924 を一部改変、スケール 1:2,000)  
Fig.2 Map of al-Khokha area

の特質と発展を解明することを調査の目的とした<sup>3)</sup>。ウセルハト墓 (TT47) は H.A. ラインド (Rhind) や H. カーター (Carter) などの報告により、19 世紀からその存在が広く知られていたものの<sup>4)</sup>、総合的な調査は行われておらず、2007 年度の調査前の時点で墓は厚い堆積に覆われ、正確な位置すら不明となっていた。こうした状況を受けて早稲田大学エジプト学研究所は、2007 年 12 月にアル=コーカ地区においてウセルハト墓 (TT47) の再発見・再調査を目的とした発掘調査を開始し、その後、調査を継続している。

これまでの調査により、ウセルハト墓 (TT47) を再発見するとともに、これまでカーターなどによって報告されていなかった墓の詳細を明らかにすることができた (近藤他 2011, 2012, 2013, 2014)。入口脇柱には、南北それぞれ垂直方向に 5 行の碑文が刻まれており、下部には被葬者であるウセルハトが座った姿で描かれていた。また、脇柱の碑文から、これまで知られていたウセルハトの称号 *imy-r ipt nswt* 「王の後宮の長官」に加え、*imy-r htmtyw nw pr-nswt* 「(王宮の) 印綬官の監督官」という別の称号が明らかになった。更に、ケルエフ墓 (TT192) のように、ウセルハトの名前や図像の顔などが意図的に削られた痕跡も確認された (近藤他 2011)。また、ウセルハト墓 (TT47) の前室西壁の南側では、墓主のウセルハト、アメンヘテプ 3 世と王妃ティイが描かれた浅浮き彫りのレリーフ装飾と碑文を発見した。現在、ウセルハト墓 (TT47) 由来の王妃ティイのレリーフがブリュッセル王立美術歴史博物館に収蔵されているが (E.2157)、本来装飾されていた場所が明らかとなった。更に、奥室の南壁、北壁には壁龕の内部にウセルハトと妻の彫像が発見された (Kondo and Kawai 2017;



近藤他 2013)。

第7次調査では、ウセルハト墓 (TT47) の前庭部の南側から、新たに2基の岩窟墓、未装飾墓 (KHT01) とコンスウエムヘブ墓 (KHT02) を発見した (Kondo and Kawai 2017; 近藤他 2015)。第10次調査では、ウセルハト墓 (TT47) の前庭部の東側から、新たに1基の岩窟墓、コンスウ墓 (KHT03) を発見した (近藤他 2018)。第11次調査では、今後のウセルハト墓 (TT47) 内部の発掘調査、保存修復作業に向けて、墓の上の土砂の荷重を減らすことを目的とし、ウセルハト墓 (TT47) 上部の発掘調査を実施した。また、コンスウエムヘブ墓 (KHT02) では、内部の発掘調査、保存修復作業、岩盤補強作業を実施した (近藤他 2019)。

第12次調査では、引き続きウセルハト墓 (TT47) 上部の土砂の荷重を減らすことを目的とし、発掘調査を実施した。また、保存修復作業に備え、コンスウエムヘブ墓 (KHT02) 前室の発掘調査も実施した。その他、それぞれの専門家によって、ウセルハト墓 (TT47) の今後の補強作業に向けた予備調査、コンスウエムヘブ墓 (KHT02) 前室の保存修復作業、これまでに発見されたミイラ、人骨の人類学的調査などが実施された<sup>5)</sup>。

本稿では、こうした経緯と調査目的のもと、2018年度にルクソール西岸アル=コーカ地区のウセルハト墓 (TT47) およびその周辺において実施した第12次調査について報告を行う<sup>6)</sup>。

## 2. ウセルハト墓 (TT47) およびコンスウエムヘブ墓 (KHT02) の発掘調査

今期調査では、第11次調査に引き続き、今後のウセルハト墓 (TT47) の内部の発掘調査、保存修復作業に備え、墓の上部に堆積する土砂を発掘し、墓内部にかかる荷重を減少させることを目的とした。今回の発掘では、主にウセルハト墓 (TT47) の奥室の上部に当たる箇所を発掘調査を実施した (図3, 写真1)。今回、発掘調査を行った箇所は、堆積している層の上部にあたり、層位の観察から、近代の盗掘やゴミの廃棄などによって形成された箇所と判断された。ここからは、周辺の墓に由来する木棺片、カルトナージュ棺片、シャブティ、石碑片などが出土した。今期の発掘箇所には、まだ堆積が残っているため、来期も同じ場所で発掘調査を継続する計画である。

更に、同じく第11次調査に引き続き、コンスウエムヘブ墓 (KHT02) の前室の発掘調査も実施した (図3, 写真2)。今期は主に前室南側の発掘調査を実施した。前室内部には、外部から流れ込んだと考えられる石灰岩チップ片、日干レンガ片、ワラ、動物の排泄物などが堆積しており、近代の活動によってこれらが墓の内部に流れ込んできたと推測された。なお、日干レンガの中には、南側に位置するトトメス3世葬祭殿に由来するトトメス3世のカルトウーシュが押印されたレンガも含まれていた。出土遺物は人骨、ミイラ片、木棺片、カルトナージュ片、ファイアンス製ビーズ、アミュレットなどである。これらの遺物は、新王国時代、第3中間期、末期王朝時代、プトレマイオス朝時代に年代づけられ、盗掘や近代の活動の結果、コンスウエムヘブ墓 (KHT02) 内部や周囲の墓などからもたらされたと考えられる。その他、古代に崩落したコンスウエムヘブ墓 (KHT02) の壁画の一部も発見された。これらは今後の保存修復作業によって、適切な位置に戻される計画である。

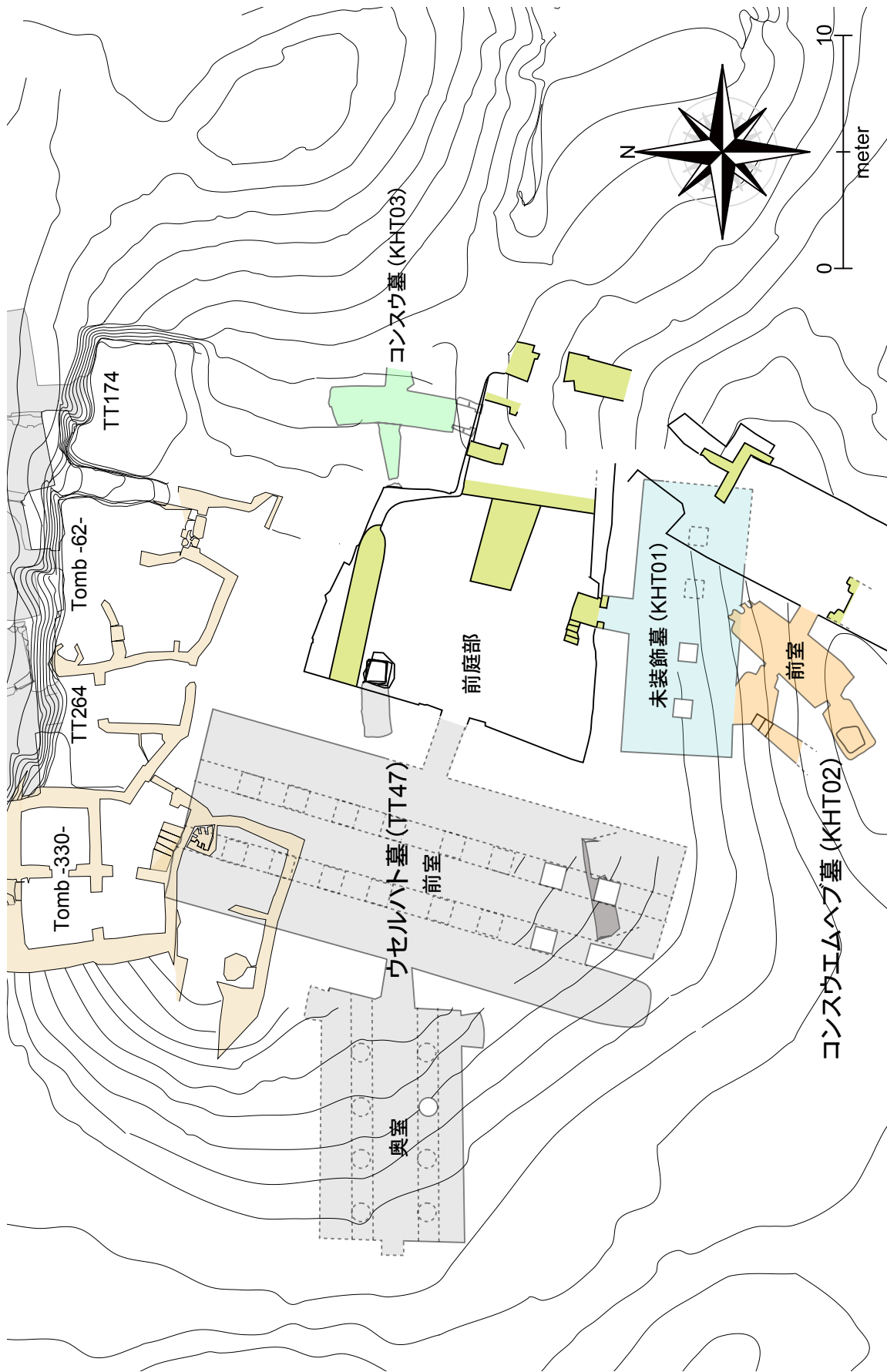


図3 ウセルハト墓 (TT47) およびその周辺地図 (第12次調査終了時)  
 Fig.3 Map of tomb of Userhat and its vicinity



写真1 ウセルハト墓 (TT47) 奥室上部、今期発掘調査終了時 (北東から)  
Pl.1 The area above the inner chamber of the tomb of Userhat (TT47) after clearance in this season, looking from northeast



写真2 コンスウエムヘブ墓 (KHT02) 前室南側、発掘調査完了時 (北西から)  
Pl.2 The southern part of the transverse hall in the tomb of Khonsuemheb (KHT02) after clearance in this season, looking from northwest

### 3. 出土遺物

#### (1) 木棺片

今期調査では、コンスウエムヘブ墓 (KHT02) の前室の南側の発掘調査によって、多くの木棺片が発見された。中でも、黄色の背景の木棺片2点が注目される。一つは人型棺のつま先の部分であり、黄色の背景に黒色の文字が書かれている (図 4.1, 写真 3)。もう一つは、人型棺の底の部分であり、棺の外部に、黄色の背景、チェトと両側にウアス笏が描かれている。棺の内部は、黒で装飾されている (図 4.2)。これらの特徴から、木棺は第 19 王朝から第 20 王朝に年代づけられる (Taylor 2001: 169-170)。

#### (2) 木製胸飾り

同じく、コンスウエムヘブ墓 (KHT02) の前室の南側の発掘調査によって、木製の胸飾りが発見された (図 4.3)。第 21 王朝から第 22 王朝に年代づけられる (Feuchte 1971: 61)。

#### (3) カルトナージュ棺片

カルトナージュ棺の顔の部分が発見されている (図 4.4, 写真 4)。同じアル=コーカ地区の TT-400- から出土した類例から (Schreiber et al. 2013: 192, fig.4.a)、おそらくプトレマイオス朝時代に年代づけられる。

#### (4) 葬送コーン

ウセルハト墓 (TT47) の奥室の上部の発掘調査によって、いくつかの葬送コーンが発見されている。今期調査で、最も多いのは、ウセルハト墓 (TT47) の被葬者であるウセルハトの葬送コーンであり、12 点が発見されている (Davies and Macadam 1957: #406)。そのうちの一つは、直方体であり、文字が押印されている先端には赤いスリップが施されている (図 5.1, 写真 5)。その他、ネブアメンの葬送コーンなどが発見されている (Davies and Macadam 1957: #553)。

#### (5) 石灰岩製彩色レリーフ片

ウセルハト墓 (TT47) の奥室の上部から、石灰岩製の彩色レリーフ片が発見された (図 5.2-4, 写真 6)。青のヒエログリフに赤の線が見られる。類例から、おそらく第 18 王朝後期に年代づけられる<sup>7)</sup>。図 5.2 は、上段が *n* のサイン、下段が */// r gr r w<sup>c</sup>t///*、図 5.3 は、右から *///i3w n///*, [*t3*] *n nb nhh*、図 5.4 は左から *///hr 3ht[y]///*, *///dt in///* である。断片的であるが、神への祈祷文の一部と考えられる。

#### (6) パピルス片

今回発見されたパピルス片は、カルトナージュ棺に再利用されたものである。デモティックが書かれている (写真 7)。

#### (7) トトメス 3 世のカルトウーシュ付き日干レンガ

日干レンガの大きさは、38cm×16.5cm×12.5cm である。表面には、トトメス 3 世の即位名である「*Mn-hpr-r<sup>c</sup>*」が押印されている (写真 8)。南側に位置するトトメス 3 世の葬祭殿に由来すると考えられる。

#### (8) 壁画片

コンスウエムヘブ墓 (KHT02) の前室の南側からいくつかの壁画片が発見された。そのうちの 2 つは、前室



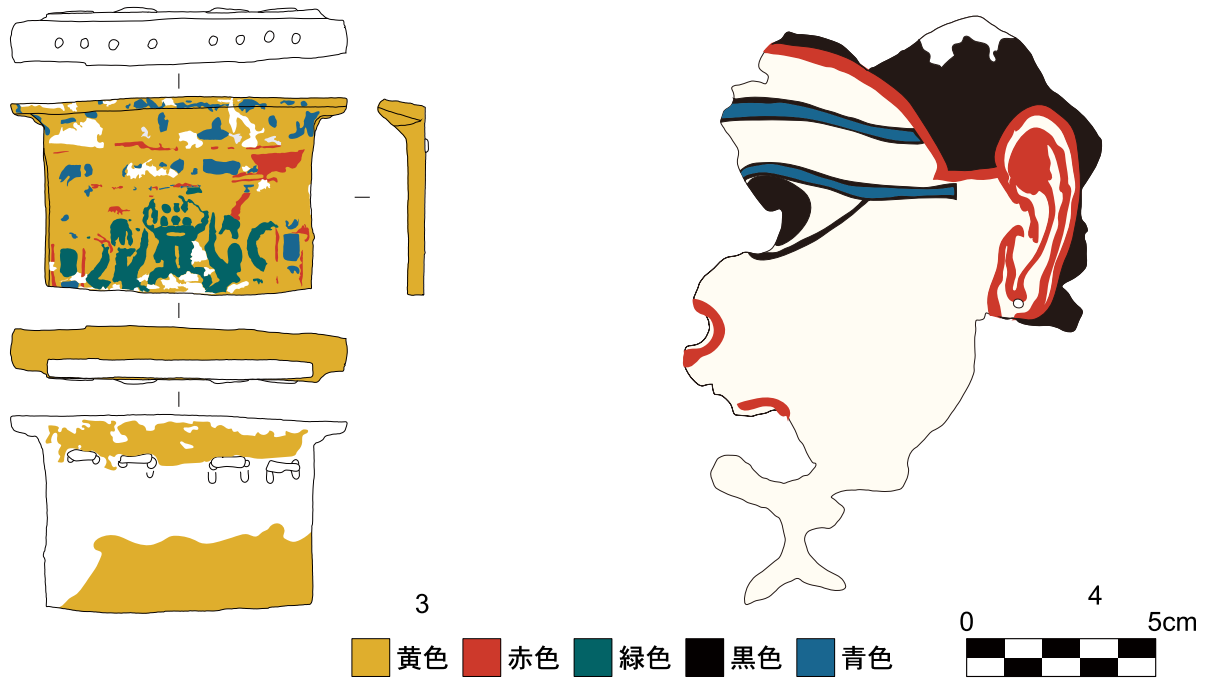
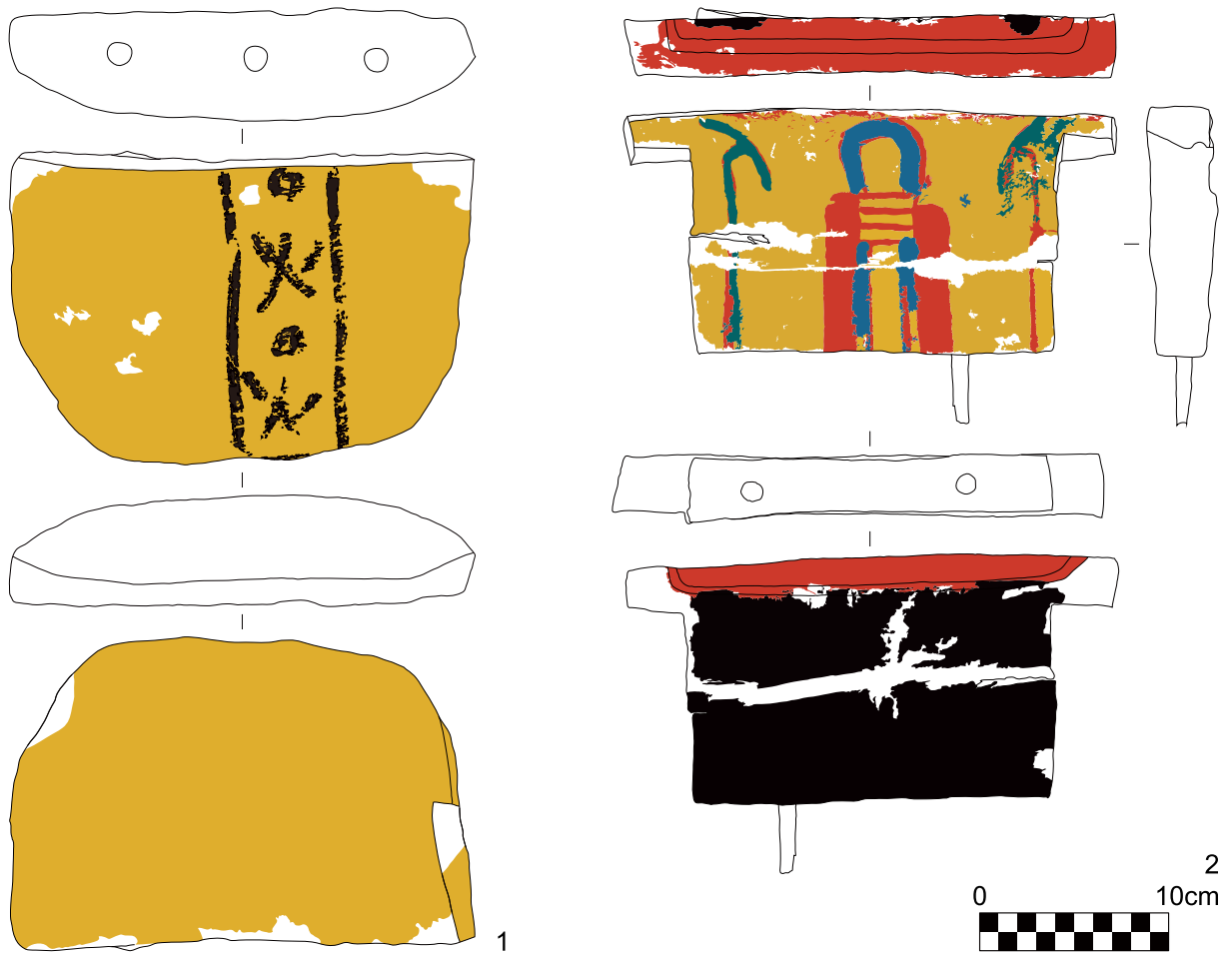


図4 主要出土遺物 (1)  
Fig.4 Major finds (1)

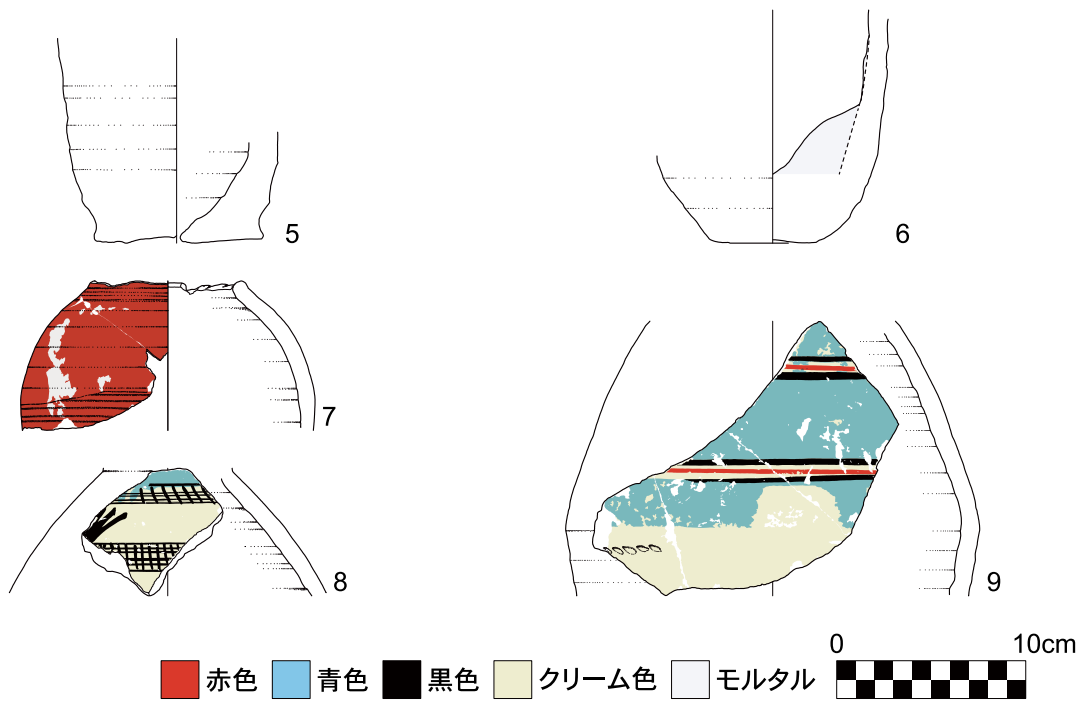
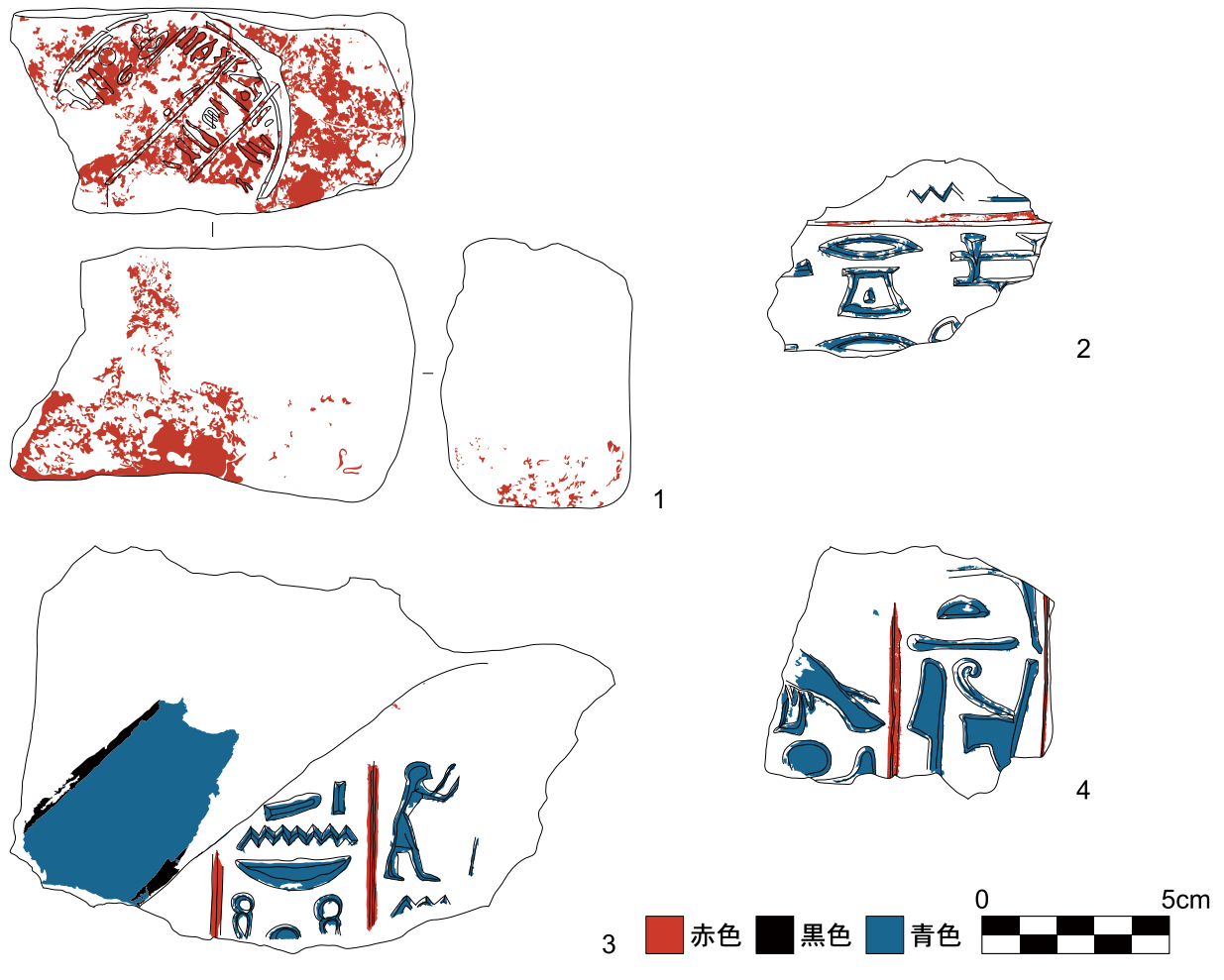


図5 主要出土遺物 (2)  
Fig.5 Major finds (2)



写真 3 木棺片  
Pl.3 Fragment of wooden coffin



写真 4 カルトナーージュ片  
Pl.4 Fragment of cartonnage coffin



写真 5 葬送コーン  
Pl.5 Mural painting fragment



写真 6 石灰岩製彩色レリーフ片  
Pl.6 Fragment of painted limestone reliefs



写真 7 パピルス片  
Pl.7 Papyrus fragment with Demotic text



写真 8 トトメス 3 世のカルトゥーシュ付き日干レンガ  
Pl.8 Mud-brick with the stamp of the cartouche of Thutmose III

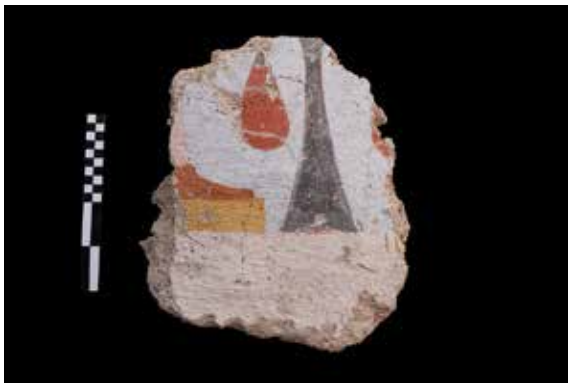


写真 9 壁画片  
Pl.9 Mural painting fragment



写真 10 壁画片  
Pl.10 Mural painting fragment

東側の壁画であると考えられる。一つにはおそらくコンスウエムヘブを示す座った男性と供物（写真9）、そして、もう一つにはおそらく被葬者の妻であるムウトエムヘブを示す座った女性が描かれている（写真10）。

#### (9) 土器<sup>8)</sup>

今期調査では、ウセルハト墓（TT47）の奥室の上部から特徴的な土器が出土している。それらは、ビール壺（図5.5, 6）、赤色磨研土器（図5.7）、青色彩文土器（図5.8, 9）である。ビール壺には、下部に穴が空くもの（図5.5）やプラスター容器として再利用されたものなどがある（図5.6）。また、赤色磨研土器は、第18王朝後期に特徴的な長頸の壺型土器であると考えられる<sup>9)</sup>。頸の付け根が意図的に削られていることから、後世に再利用されたと考えられる。青色彩文土器は類例から、第19王朝から第20王朝に年代づけられる（Aston 1998: no.1257; Aston 2014: pl.45.394）。

#### 4. まとめ

2018年度の第12次調査では、ウセルハト墓（TT47）奥室上部の発掘調査を行い、今後のウセルハト墓内部の発掘調査、保存修復作業に向けて、墓の上の土砂の加重を減らすことができた。ただし、土砂はまだ残っているため、来期以降、引き続きこの箇所における発掘調査を行う予定である。更に、専門家によるウセルハト墓（TT47）入口の岩盤補強作業のための予備調査も完了した。来期、まずは入口から岩盤補強作業を行う予定である。コンスウエムヘブ墓（KHT02）では、前室の南側の発掘調査を完了するとともに、保存修復作業を継続し、一定の成果を得た。

以上が第12次調査の成果の概要である。来期以降も発掘調査、保存修復作業、岩盤補強作業を継続し、ウセルハト墓（第47号墓）、コンスウエムヘブ墓（KHT02）を中心として、研究を進めていきたい。

#### 謝辞

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カリード・アル＝アナニー閣下、考古最高評議会事務総長ムスタファ・ワジーリー博士、古代エジプト部部長アイマン・アシュマウィ博士、外国調査隊管轄事務局長ナシュア・ガーベル博士、上エジプト局長ムハンマド・ヤヒヤ氏、ルクソール総局長カザフィ・アブデル・ラヒーム、ルクソール西岸局長ファタフィ・ヤシン氏、ルクソール西岸クルナ査察局長バハ・ガビル氏、ルクソール西岸中部地区長エズ・アル＝ディン・カマル・ヌビ氏、ルクソール西岸中部地区主任査察官アハメド・バグダディ氏、査察官アブデル＝ガニ氏、サード・ケナウィ氏をはじめとする方々に多大なご協力を頂いた（肩書きは調査当時のもの）。

また、図版などの作成には早稲田大学エジプト学研究所のアブデルアール・アハメド・マハムード・ムハンマド、安藤 謙、伊藤結華、進藤瑞生の協力を得た。ここに記して感謝の意を表す。

なお、本調査は日本学術振興会科学研究費・基盤研究（A）「エジプト、ルクソール西岸の新王国時代岩窟墓の形成と発展に関する調査研究」（研究代表者：近藤二郎）の助成を受けて実施された。

#### 註

- 1) マルカタ南遺跡のコム・アル＝サマク（魚の丘）における調査に関しては主に以下を参照（古代エジプト調査委員会編 1983）。
- 2) マルカタ王宮の調査は主に以下を参照（早稲田大学古代エジプト建築調査隊編 1993）。ルクソール西岸岩窟墓の一連の調査は主に以下を参照（早稲田大学エジプト学研究所編 2002, 2003, 2007）。王家の谷・アメンヘテプ3世王墓における調査は主に以下を参照（Kondo 1992, 1995; Yoshimura and Kondo 1995; Yoshimura and Kondo (eds.) 2004; Yoshimura et al. 2005; 吉村 1993; 吉村, 近藤 1994, 2000; 河合他 2001; 吉村他 2005, 2013; アメンヘテプ III 世王墓報告書刊行委員会



編 2008, 2011)。

- 3) ウセルハト墓 (TT47) の研究史、研究上の問題点、アメンヘテプ 3 世時代の大型岩窟墓の問題について詳しくは以下を参照 (近藤 1994)。その他、アメンヘテプ 3 世時代の大型岩窟墓については D. アイクナー (Eigner) の論考を参照 (Eigner 1983)。
- 4) これまでの報告としては、ラインドによるウセルハトの葬送コーンの報告 (Rhind 1862: 137)、ハワード・カーターによるウセルハト墓 (TT47) の構造に関する記述やウセルハトの葬送コーン、王妃ティイのレリーフ写真などの報告 (Carter 1903: 177-178, Pl.II)、A.E.P. ウェイゴール (Weigall) の記述 (Weigall 1908: 125) などが挙げられる。また、ベルギーのブリュッセル王立美術史博物館にはウセルハト墓 (TT47) 由来の王妃ティイのレリーフが収蔵されている (van de Walle et al. 1980: 18-20, Figs.3, 4)。
- 5) これらの調査成果に関しては、今後別稿にて、各専門家より報告される予定である。
- 6) 調査は 2018 年 12 月 20 日から 2019 年 1 月 17 日、2019 年 3 月 11 日から 3 月 14 日まで実施された。調査の参加者は以下の通りである。考古班：近藤二郎、河合 望、高橋寿光、福田莉紗、アブデルアール・アハメド・マハムード・ムハンマド、安藤 謙、伊藤結華、進藤瑞生、建築班：柏木裕之、保存修復班：前川佳文、ダニエラ・マリア・マーフィ、岩盤工学班：ホセ・イグナシオ・フォカデル・ウトリッラ、人類班：馬場悠男、坂上和弘、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 7) 類似した青のヒエログリフと赤の線のレリーフは第 18 王朝後期によく見られるもので (van Dijk 2010: 322)、類例は、センフェル墓 (TT99) などから出土している (Strudwick 2016: pl.14B)。
- 8) 土器の胎土に関しては 10 倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った (Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130-132)。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した (Aston 1998: 41-51)。
- 9) 類例は、マルカタ (Hope 1989: fig.3.d) やアマルナ (Rose 2007: nos.467-470) に見られ、第 18 王朝後期に特徴的である。

#### 参考文献

Aston, D.A.

1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I. Teil I. Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.

2014 *Pottery Recovered Near the Tombs of Seti I KV 17 and Siptah KV 47 in the Valley of the Kings*, Basel.

Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.

2000 "Pottery", in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121-147.

Carter, H.

1903 "Report of work done in upper Egypt (1902-1903)", *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 4, pp.171-180.

Davies, N. de G. and Macadam, M.F.L.

1957 *A Corpus of Inscribed Egyptian Funerary Cones*, Oxford.

van Dijk, J.

2010 "A Cat, A Nurse, And A Standard-Bearer: Notes On Three Late Eighteenth Dynasty Statues", in D'Auria, S. (ed.), *Offerings to the Discerning Eye: An Egyptological Medley in Honor of Jack A. Josephson*, Leiden and Boston, pp.321-332.

Eigner, D.

1983 "Das Thebanische Grab des Amenhotep, Wesir von Unterägypten: Die Architektur", *Mitteilungen der Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 39, pp39-50.

Feuchte, E.

1971 *Pektorale Nichtköniglicher Personen*, Wiesbaden.

Hope, C.

1989 *Pottery of the Egyptian New Kingdom: Three Studies*, Burwood.

Kondo, J.

1992 "A Preliminary Report on the Re-clearance of the Tomb of Amenophis III", in Reeves, C.N. (ed.), *After Tutankhamun: Research and Excavation in the Royal Necropolis at Thebes*, London and New York, pp.41-54.

1995 "The Re-clearance of Tombs WV 22 and WV A in the Western Valley of the Kings", in Wilkinson, R.H. (ed.), *Valley of the Sun Kings: New Explorations in the tombs of Pharaohs*, Tucson, pp.25-33.

Kondo, J. and Kawai, N.

2017 “Discovered, lost, rediscovered: Userhat and Khonsuemheb”, *Egyptian Archaeology* 50, pp.22–26.

Nordström, H.-Å and Bourriau, J.

1993 “Ceramic Technology: Clays and Fabrics”, in Arnold, D. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143–190.

Rhind, A.H.

1862 *Thebes: Its Tombs and Their Tenants, Ancient and Present: A Record of Excavations in the Necropolis*, London.

Rose, P.

2007 *The Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*, London.

Schreiber, G., Vasáros, Z. and Almásy A.

2013 “Ptolemaic and Roman Burials from Theban Tomb -400-”, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 69, pp.187–225.

Strudwick, N.

2016 *The tomb of pharaoh's chancellor Senneferi at Thebes (TT99), Volume I: The New Kingdom*, Oxford.

Taylor, J.H.

2001 “Patterns of Colouring on Ancient Egyptian Coffins from the New Kingdom to the Twenty-Sixth Dynasty: an Overview”, in Davies, W.V. (ed.), *Colour and Painting in Ancient Egypt*, London, pp.164–181.

van de Walle, B., Limme, L. and De Meulenaere, H.

1980 *La collection égyptienne, Les étapes marquantes de son développement*, Bruxelles.

Weigall, A.E.P.

1908 “Report on the Tombs of Shékh abd' el Gürneh and el Assasif”, *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 9, pp.118–136.

Yoshimura, S., Capriotti, G., Kawai, N. and Nishisaka, A.

2005 “A Preliminary Report on the Conservation Project of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22) in the Western Valley of the Kings: 2001-2004 Seasons”, *MEMNONIA* XV, pp.203–212.

Yoshimura, S. and Kondo, J.

1995 “Excavation at the tomb of Amenophis III”, *Egyptian Archaeology* 7, pp.17–18.

Yoshimura, S. and Kondo, J. (eds.)

2004 *Conservation of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III -First and Second Phases Report-*, Tokyo.

アメンヘテブ III 世王墓報告書刊行委員会編

2008 『エジプト王家の谷・西谷学術調査報告書 [I] アメンヘテブ III 世王墓 (KV22) を中心として』、中央公論美術出版。

2011 『エジプト王家の谷・西谷学術調査報告書 [II] KVA とアメンヘテブ III 世王墓 (KV22) に隣接する地域』、中央公論美術出版。

河合 望、吉村作治、近藤二郎、ジョルジョ・カプリオットィ

2001 「アメンヘテブ III 世王墓保存修復プロジェクト予備調査概報」、『エジプト学研究』第9号、早稲田大学エジプト学会、pp.39–45.

古代エジプト調査委員会編

1983 『マルカタ南 [I] 一魚の丘<考古編・建築編>』、早稲田大学出版部。

近藤二郎

1994 「テーベ私人墓第47号」、『エジプト学研究』第2号、早稲田大学エジプト学会、pp.50–60.

近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、西坂朗子、高橋寿光

2009 「第1次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.39–70.

2010 「第2次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第16号、早稲田大学エジプト学会、pp.47–77.

2011 「第3次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第17号、早稲田大学エジプト学会、pp.45–63.

2012 「第4次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第18号、早稲田大学エジプト学会、pp.5–20.

- 近藤二郎、吉村作治、柏木裕之、河合 望、高橋寿光  
 2013 「第5次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.107-120.  
 2014 「第6次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第20号、早稲田大学エジプト学会、pp.43-58.
- 近藤二郎、吉村作治、河合 望、菊地敬夫、柏木裕之、竹野内恵太、福田莉紗  
 2015 「第7次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第21号、早稲田大学エジプト学会、pp.19-44.
- 近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、高橋寿光、竹野内恵太、福田莉紗  
 2016 「第8次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第22号、日本エジプト学会、pp.113-148.
- 近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、高橋寿光、福田莉紗  
 2017 「第9次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.43-65.
- 近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、高橋寿光、福田莉紗、米山由夏  
 2018 「第10次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.11-35.
- 近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、高橋寿光、米山由夏  
 2019 「第11次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第25号、日本エジプト学会、pp.25-43.
- 坂上和弘、馬場悠男  
 2017 「アル=コーカ地区 TT47 出土の人骨およびミイラの人類的調査（第9次調査）」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.99-104.
- 阿部善也、扇谷依李、日高遥香、中井 泉  
 2017 「コンスウエムヘブ墓の壁画に使用された彩色顔料の非破壊化学分析」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.66-86.
- 前川佳文  
 2017 「コンスウエムヘブ墓壁画の保存修復に向けた事前調査報告」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.87-98.
- 吉村作治  
 1993 「早稲田大学古代エジプト調査隊調査報告（III）」、『オリエント』第36巻第1号、日本オリエント学会、pp.159-177.
- 吉村作治、近藤二郎  
 1994 「アメンヘテプ3世王墓の調査について エジプト・ルクソール西岸、王家の谷西谷調査報告」、『人間科学研究』第7巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.187-199.  
 2000 「王家の谷・西谷調査報告－1992年8月～2000年1月－」、『エジプト学研究』第8号、早稲田大学エジプト学会、pp.57-64.
- 吉村作治、近藤二郎、河合 望、西坂朗子、瀬戸邦弘、高橋寿光、中右恵理子  
 2005 「アメンヘテプ3世王墓保存修復作業概報：2001年3月～2004年3月」、『エジプト学研究』第13号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-21.
- 吉村作治、西坂朗子、高橋寿光  
 2013 「第3期アメンヘテプ3世王墓壁画保存修復プロジェクト概報」、『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.43-58.
- 早稲田大学エジプト学研究所編  
 2002 『ルクソール西岸岩窟墓〔I〕－第241号墓と周辺遺構－』、早稲田大学エジプト学研究所.  
 2003 『ルクソール西岸岩窟墓〔II〕－第318号墓と隣接する墓－』、株式会社アケト.  
 2007 『ルクソール西岸岩窟墓〔III〕－第333号墓、A.21号墓、A.24号墓、W-4 (Nr.-127-)号墓－』、株式会社アケト.
- 早稲田大学古代エジプト建築調査隊編  
 1993 『マルカタ王宮の研究 マルカタ王宮址発掘調査1985-1988』、中央公論美術出版.

# エジプト、ダハシュール北遺跡の 青色彩文土器について

高橋 寿光\*

## The Blue-Painted Pottery Vessels from Dahshur North

Kazumitsu Takahashi\*

### Abstract

The blue-painted pottery is one of the most characteristic ceramic types in New Kingdom Egypt, dating from the mid-Eighteenth Dynasty with the reign of Amenhotep II to the early Twentieth Dynasty during the reign of Ramesses IV. The pottery is painted predominantly in blue, supplementary in red and black, with floral and faunal motifs. The previous studies showed that the find spots of blue painted pottery were essentially restricted to main administrative centers or royal residential centers, such as Qantir, Memphis, Gurob, Amarna and Thebes, and these provenances suggest that they were manufactured particularly in “royal workshops”.

The blue-painted pottery vessels dating to the Amarna period, post-Amarna period and Nineteenth Dynasty had been found from New Kingdom cemetery at Dahshur North. They were uncovered from tomb of Ipay, originally dating to Amarna and post-Amarna period, and then reused by Mes in the reign of Ramesses II, and its surrounding shaft tombs which are also dated to these periods. The author recognized some differences in fabrics, forms and designs of vessels between Dahshur North and surrounding sites, such as Northwest Saqqara, Memphis and Saqqara. This paper aims to summarize the blue-painted pottery vessels from Dahshur North, and to discuss production system of blue-painted pottery within Memphite area.

There are some similarities in fabrics, forms and designs of blue-painted pottery among Northwest Saqqara, Memphis, Saqqara and Dahshur North during Amarna period. Such similarities imply that they had been manufactured at same workshop in the Memphite area. However, in the Nineteenth Dynasty, some marked differences can be seen among these sites. They seem to indicate that they were manufactured in different workshops. In sum, in the Nineteenth Dynasty, blue-painted pottery vessels were manufactured not only in royal workshops, but also even in local workshops where they supplied pottery vessels to local cemeteries, such as Dahshur North.

### 1. はじめに

ダハシュール北遺跡は、エジプト、カイロ近郊のダハシュールの赤いピラミッドから北北西に約2kmの砂漠の中に位置する中王国時代から新王国時代の墓地遺跡である。これまでの東日本国際大学／早稲田大学の発掘調査によって新王国時代のイバイ墓およびその周辺から青色彩文土器が発見されている<sup>1)</sup>。筆者は、2018年から2020年に、これらの青色彩文土器の調査を実施した。本稿では、当該遺跡から出土した青色彩文土器について、その概要を報告するとともに、青色彩文土器研究の一環として、年代および生産に関する考察を行ってみたい<sup>2)</sup>。

\* 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授

\* *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*



## 2. ダハシュール北遺跡の青色彩文土器の概要

以下に、調査を行なった青色彩文土器について概要を示す(図1-3)<sup>3)</sup>。記述に際しては、器形名称、図版番号に続けて、遺物番号、出土場所、寸法、胎土、下地のスリップの有無、そして備考、類例の順で記すこととする。

### (1) 漏斗状頸部壺形土器(図1.1)

DN06-o0245、イパイ墓の第2中庭から出土、最大径18.9cm、高さ(残存部)17.1cm、Nile B2胎土、白色スリップの下地。

胴部には、黒で書かれたマークが見られる<sup>4)</sup>。底部付近には、焼成後に意図的に開けられた孔が見られる<sup>5)</sup>。また、内面には内容物が見られ、外面には赤色のモルタルが付着している。類例は、テル・アビアド(Minault-Gout et al. 2012: fig.3.8, 9, pl.2A)、アブ・シール(Mynářová 2006: figs.3, 4)、アブ・シール南丘陵遺跡(早稲田大学エジプト学研究所(編)2007: 図77, pl.7.3-5; Takahashi 2014: fig.8)、サッカラ・テティ王墓地(Kanawati et al. 1984: pl.45.S83:65)、サッカラ・ホルエムヘブ墓(Bourriau et al. 2005: fig.25.134; Aston, B. 2011: figs. VI.20.176, VI.27.219-221)、メンフィス(Bourriau et al. 2000b: fig.2.9)、アマルナ(Rose 2007: nos.422, 425)、カルナク北(Hope 1999: fig.1.b, c)。

### (2) 漏斗状頸部壺形土器(図1.2)

DN06-o0287, o0873, o0977, o1080, o1212、第27号墓内部の部屋から出土、最大径(残存部)17.7cm、高さ(残存部)16.9cm。Nile B2胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、上記の漏斗状頸部壺形土器(図1.1)と同じ。

### (3) 漏斗状頸部壺形土器(図1.3)

DN06-o0285、第27号墓内部の部屋から出土、口径34.3cm、高さ(残存部)11cm、Nile B2胎土、クリーム色スリップの下地。

焼成後に意図的に開けられた孔(?)。類例は、アマルナ(Rose 2007: nos.442, 443)。

### (4) 漏斗状頸部壺形土器(図1.4)

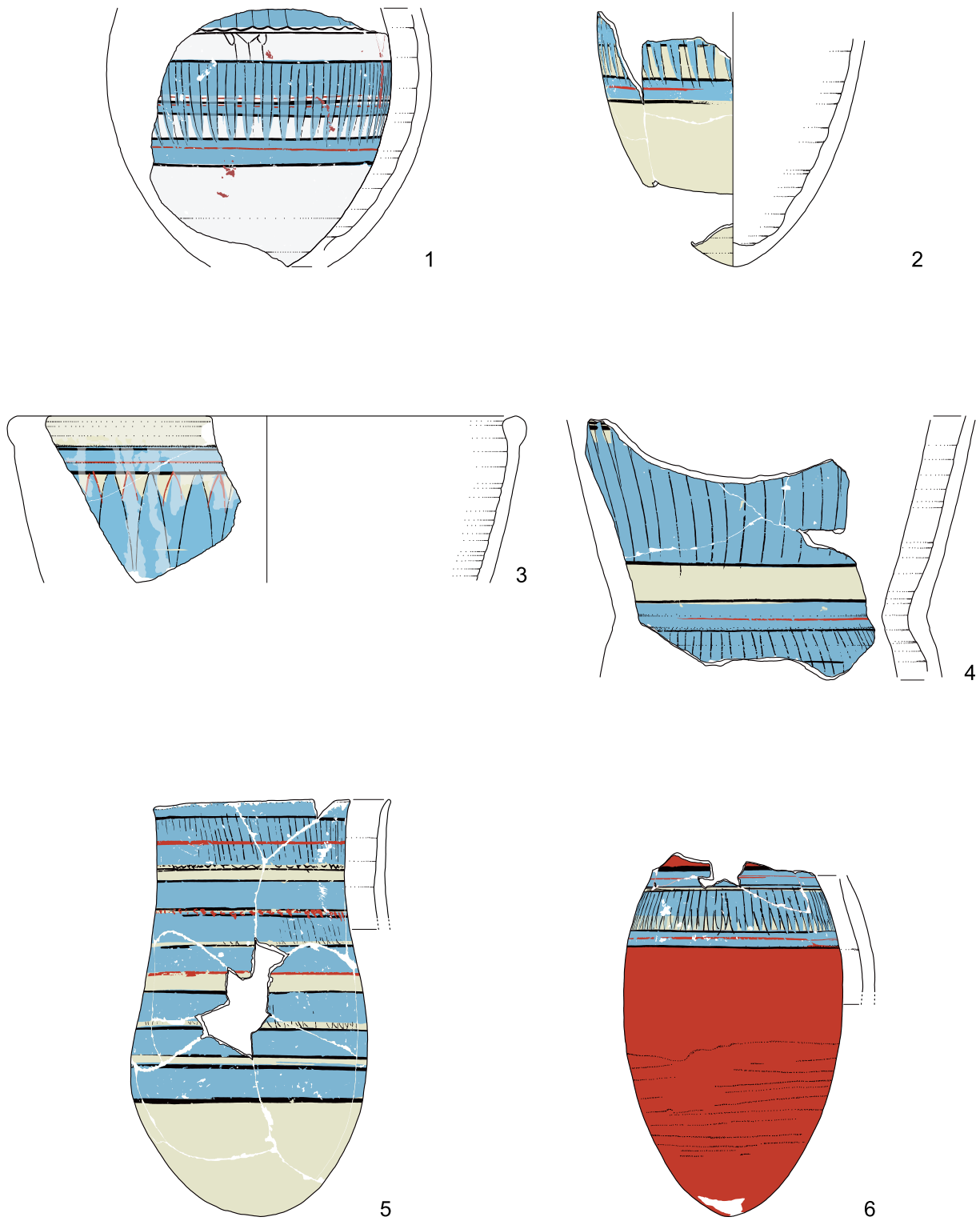
DN06-o930, o0955, o1215、第27号墓内部の部屋から出土、最大径(残存部)24cm、高さ(残存部)17.5cm、Nile B2胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、アマルナ(Rose 2007: nos.442, 443)。

### (5) 卵状壺形土器(図1.5)

DN05-o0198, o0252, o0419, o0424, o0434, o0436, o0473, o0501, o0520, o0577, o0595、第24号墓シャフト部および内部の部屋から出土、口径13cm、最大径15.7cm、高さ27.6cm、Nile B2胎土、クリーム色スリップの下地。

ほぼ完形で、胴部に、焼成後に意図的に開けられた孔が見られる。類例は、サッカラ・ホルエムヘブ墓(Bourriau et al. 2005: fig.23.126)、サッカラ・マヤとメリト墓(Aston, D. 2011: no.54)、グループ(UC19122<sup>6)</sup>、UC24541<sup>7)</sup>)。



青色
  赤色
  黒色
  クリーム色
  白色
 0
10cm

図1 ダハシュール北遺跡の青色彩文土器 (1)  
 Fig.1 Blue-painted pottery vessels from Dahshur North (1)

## (6) 漏斗状頸部壺形土器 (図 1.6)

DN6-o0270, o0502、第 27 号墓シャフト部および内部の部屋から出土、最大径 14.5cm、高さ (残存部) 24.1cm、Nile B2 胎土、全体的に赤色スリップの下地で、胴部上のみクリーム色スリップの下地。

頸部に、焼成後に意図的に開けられた孔 (?)。類例は、サッカラ・マヤとメリト墓 (Aston, D. 2011: no.59)。

## (7) 漏斗状頸部壺形土器 (図 2.1)

DN05-o0198、第 24 号墓シャフト部から出土、口径 13.8cm、最大径 18.9cm、高さ (残存部) 27.9cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・マヤとメリト墓 (Aston, D. 2011: no.61)。

## (8) 球状壺形土器 (図 2.2)

DN06-o0945, o0957, o0993, o1000, o1210, o1215、第 27 号墓内部の部屋から出土、最大径 23cm、高さ (残存部) 21.6cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・ホルエムヘブ墓 (Aston, B. 2011: fig.VI.8.75)、サッカラ・イニウイア墓 (Aston, B. 2012: fig.VII.9.20)。

## (9) 壺形土器 (図 2.3)

DN02-o0260、イパイ墓の北側 (3E-020 グリッド) から出土、最大径 (残存部) 36.5cm、高さ (残存部) 13.6cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・マヤとメリト墓 (Aston, D. 2011: no.82)。

## (10) 漏斗状頸部壺形土器 (図 2.4)

DN02-o0089, o0090、イパイ墓の南側室から出土、口径 20.5cm、最大径 21.8cm、高さ (残存部) 18cm、Nile B2 胎土、白色スリップの下地。

おそらく図 2.4-6 は同一個体と考えられる。

## (11) 漏斗状頸部壺形土器 (図 2.5)

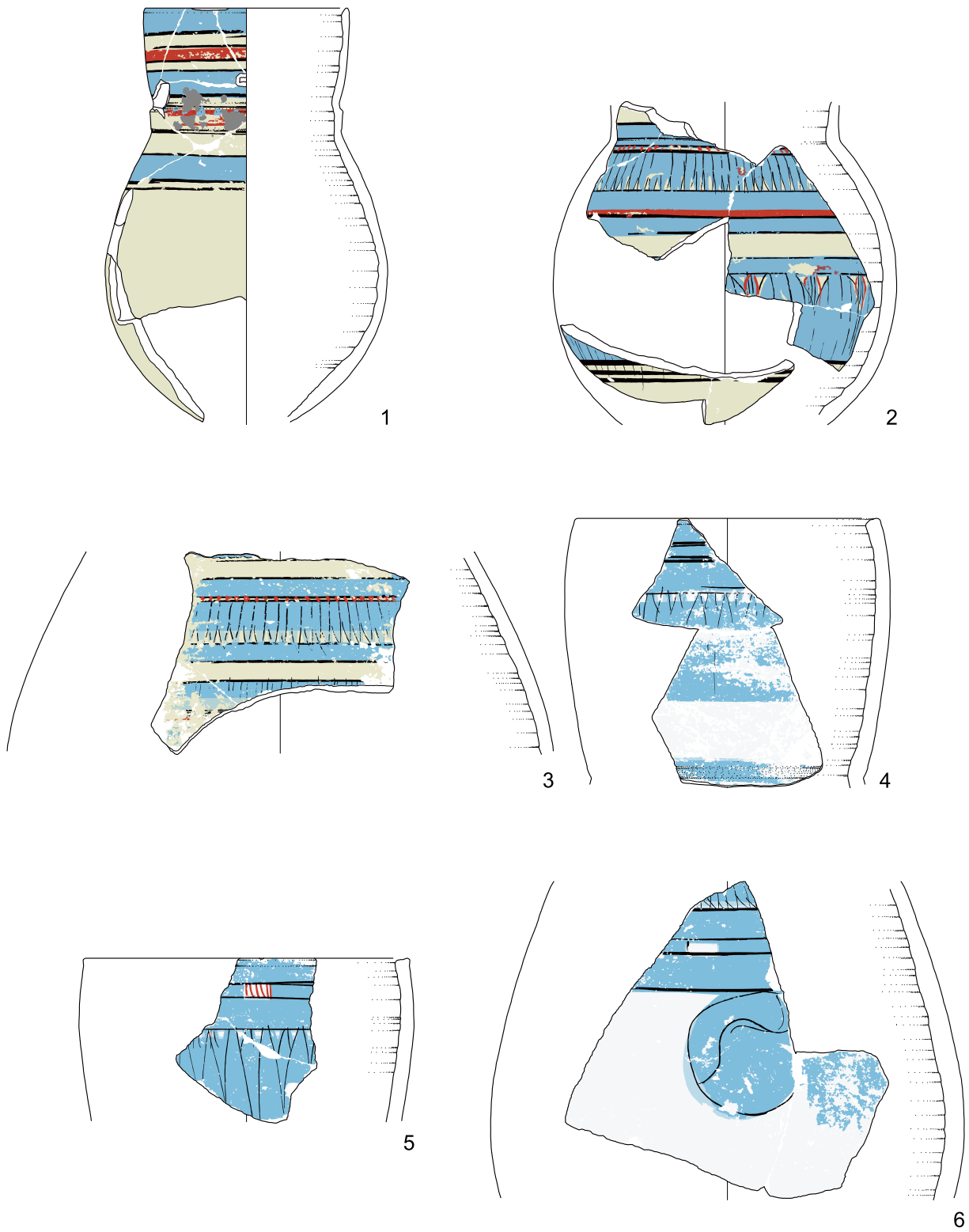
DN02-o0089, o0090、イパイ墓の南側室から出土、口径 21.8cm、最大径 22.4cm、高さ (残存部) 11cm、Nile B2 胎土、白色スリップの下地。

おそらく図 2.4-6 は同一個体。

## (12) 漏斗状頸部壺形土器 (図 2.6)

DN02-o0089, o0090、イパイ墓の南側室から出土、最大径 31.7cm、高さ (残存部) 21.3cm、Nile B2 胎土、白色スリップの下地。

おそらく図 2.4-6 は同一個体。類似した胴部の花の装飾は、サッカラ・ホルエムヘブ墓 (Bourriau et al. 2005: fig.28.147)。



青色
  赤色
  黒色
  クリーム色
  白色
 0 10cm

図2 ダハシュール北遺跡の青色彩文土器 (2)  
 Fig.2 Blue-painted pottery vessels from Dahshur North (2)

## (13) 卵状壺形土器 (図 3.1)

DN03-o1363、イパイ墓の北側 (4E-013 グリッド) から出土、口径 10.1cm、最大径 (残存部) 10.7cm、高さ (残存部) 11.6cm、Nile D 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・イニウイア墓 (Aston, B. 2012: fig.VII.30.208, 212)。

## (14) 漏斗状頸部壺形土器 (図 3.2)

DN02-o0667、イパイ墓の北側 (3E-020 グリッド) において、骨、木片、ビーズなどの集中とともに出土、最大径 (残存部) 13.1cm、高さ (残存部) 13.2cm、Nile D 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・テティ王墓地 (Sowada et al. 1999: pl.50.TNE94:1, TNE95:179)、サッカラ・イニウイア墓 (Aston, B. 2012: figs.VII.34.242, VII.36.265, 266)。

## (15) 卵状壺形土器 (図 3.3)

DN03-o1210、イパイ墓の北側 (4E-012 グリッド) から出土、最大径 (残存部) 16.5cm、高さ (残存部) 15.2cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

胴部に、焼成後に意図的に開けられた孔 (?)。類例は、サッカラ・ホルエムヘブ墓 (Bourriau et al. 2005: fig.23.125)、サッカラ・ティアとティア墓 (Aston, D. 1997: pl.119.150, 151)。

## (16) 漏斗状頸部壺形土器 (図 3.4)

DN03-o0469、イパイ墓の北側 (4E-012 グリッド) から出土、最大径 (残存部) 16.4cm、高さ (残存部) 15.8cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

胴部に、焼成後に意図的に開けられた孔 (?)。類例は、サッカラ・テティ王墓地 (Sowada et al. 1999: pl.50.TNE94:1, TNE95:179)、サッカラ・イニウイア墓 (Aston, B. 2012: figs.VII.34.242, VII.36.265, 266)。

## (17) 漏斗状頸部壺形土器 (図 3.5)

DN06-o0118、イパイ墓西側 (3E-008 グリッド) の子供の単純埋葬内部から出土<sup>8)</sup>、口径 11.8cm、最大径 12.6cm、高さ 20.1cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

完形。類例は、サッカラ・テティ王墓地 (Sowada et al. 1999: pl.50.TNE94:1, TNE95:179)、サッカラ・イニウイア墓 (Aston, B. 2012: figs.VII.34.242, VII.36.265, 266)。

## (18) 壺形土器 (図 3.6)

DN02-o3022、イパイ墓の東側 (4D-094 グリッド) から出土、最大径 18.8cm、高さ (残存部) 17.6cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

## (19) 漏斗状頸部壺形土器 (図 3.7)

DN06-o0019、イパイ墓の第 2 中庭から出土、最大径 (残存部) 28.9cm、高さ (残存部) 21.3cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・テティ王墓地 (Sowada et al. 1999: pl.50.TNE95:126)。



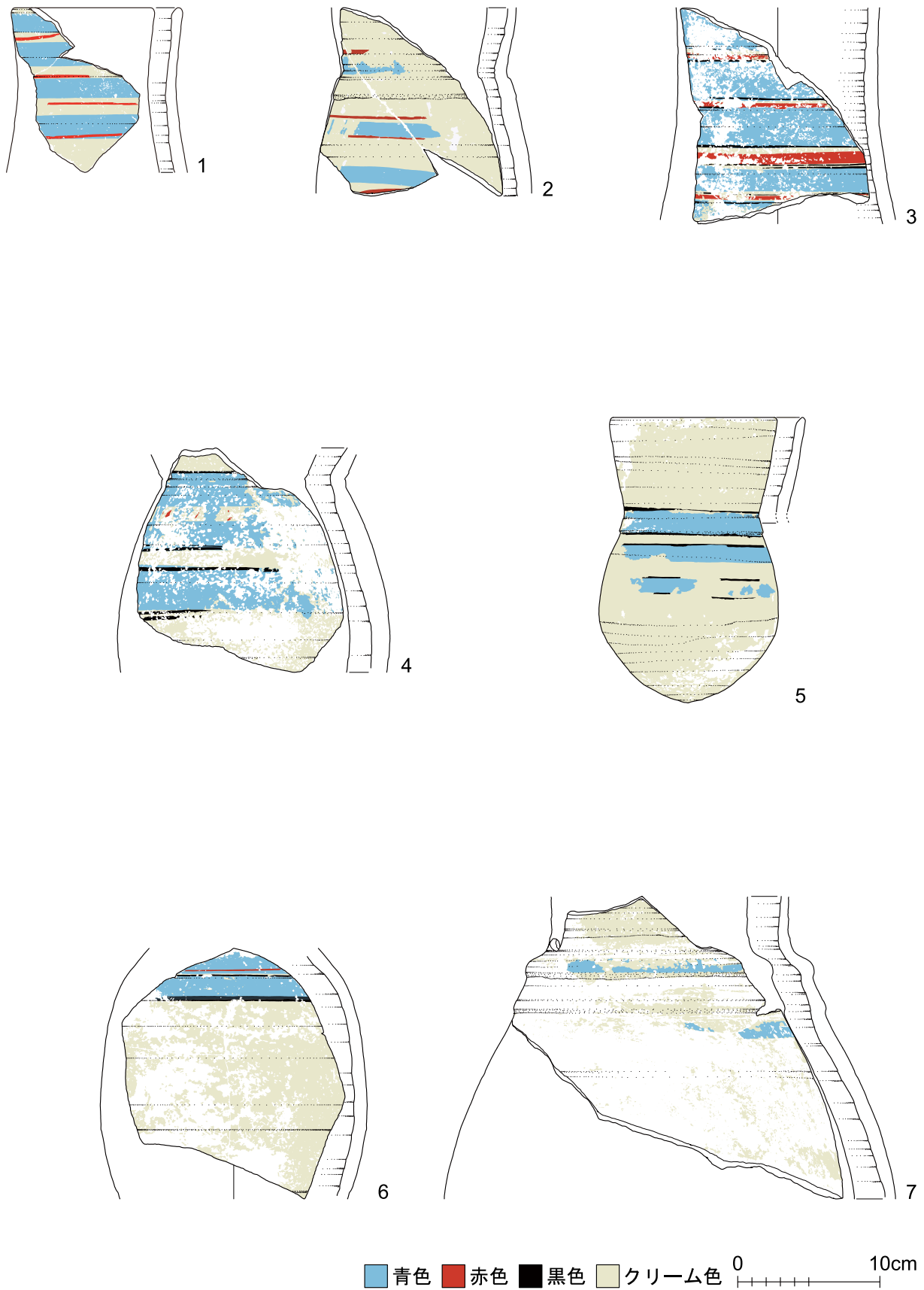


図3 ダハシュール北遺跡の青色彩文土器 (3)  
 Fig.3 Blue-painted pottery vessels from Dahshur North (3)

### 3. 青色彩文土器の年代について

今回調査の対象とした青色彩文土器は、イパイ墓周辺やイパイ墓西側のシャフト第24号墓、第27号墓より出土している。今のところ、1例(図3.5)を除いて、元の位置を保っているものはないと考えられる。ただし、大きく移動しているとは考えにくく、付近における活動と関連していると考えられる。イパイ墓およびその周辺のシャフト墓では、これまでに第18王朝後期アマルナ時代に特徴的な建材や、第18王朝末ポスト・アマルナ時代、第19王朝中期ラメセス2世時代の王名を持つ遺物が発見されており(吉村他2004)、青色彩文土器もこれらの時代に年代づけられる可能性がまず考えられる。

ここで青色彩文土器自体の類例を見てみると、それぞれ、図1.1-4の青色彩文土器は第18王朝後期アマルナ時代、図1.5, 6、図2.1-6は第18王朝末ポスト・アマルナ時代、図3.1-7は第19王朝中期ラメセス2世時代に類例が見られる。周辺から出土している遺物の年代とも大きくかけ離れてないことから、これらの時代に年代づけて問題はないと考えられる。

### 4. 青色彩文土器の生産について

当該遺跡の青色彩文土器は、第18王朝後期アマルナ時代までは、胎土、器形、装飾において、近隣のアブ・シール南丘陵遺跡、サッカラ、メンフィスなどとの類似が見られる(図4)。また、ダハシュール北遺跡(図4.1)とサッカラのテティ王墓地から出土した例(Kanawati et al. 1984: pl.45.S83:65)や、アブ・シール南丘陵遺跡(図4.2)とメンフィス(図4.5)の例には、それぞれ類似したマークも書かれている。こうしたことから、これらの青色彩文土器は、同一もしくは同じグループの工房で製作されたと考えられる<sup>9)</sup>。

第18王朝末期のポスト・アマルナ時代では、近隣のサッカラなどの青色彩文土器と比較すると、胎土は同じNile B2胎土であるものの、器形や装飾に若干の相違が見られるようになる。図5に挙げた卵状壺形土器の例では、大きさや装飾の細部が異なっている(図5)。ただし、差異は大きいものではないため、単なる個人差や僅かな時期差の可能性も考えられる。今のところ、異なる工房で製作されていた可能性を挙げるに留めてみたい。

第19王朝中期ラメセス2世時代では、違いがより目立つ青色彩文土器が見られるようになる。例えば、図6.1と図6.2に挙げた卵状壺形土器の例では、装飾、器形は類似しているものの、ダハシュール北遺跡ではNile D胎土で製作されており(図6.1)、一方、サッカラ・イニウイア墓ではNile B2胎土で製作されている(図6.2)。また、ダハシュール北遺跡(図6.3-5)とアブ・シール南丘陵遺跡(図6.6-8)の例を比較すると、アブ・シール南丘陵遺跡の方がより多く青を用いるといったような装飾の違いが見られる。こうしたことから、現在のところ、第19王朝では、地域の工房で青色彩文土器がそれぞれ別々に製作されたと解釈してみたい<sup>10)</sup>。

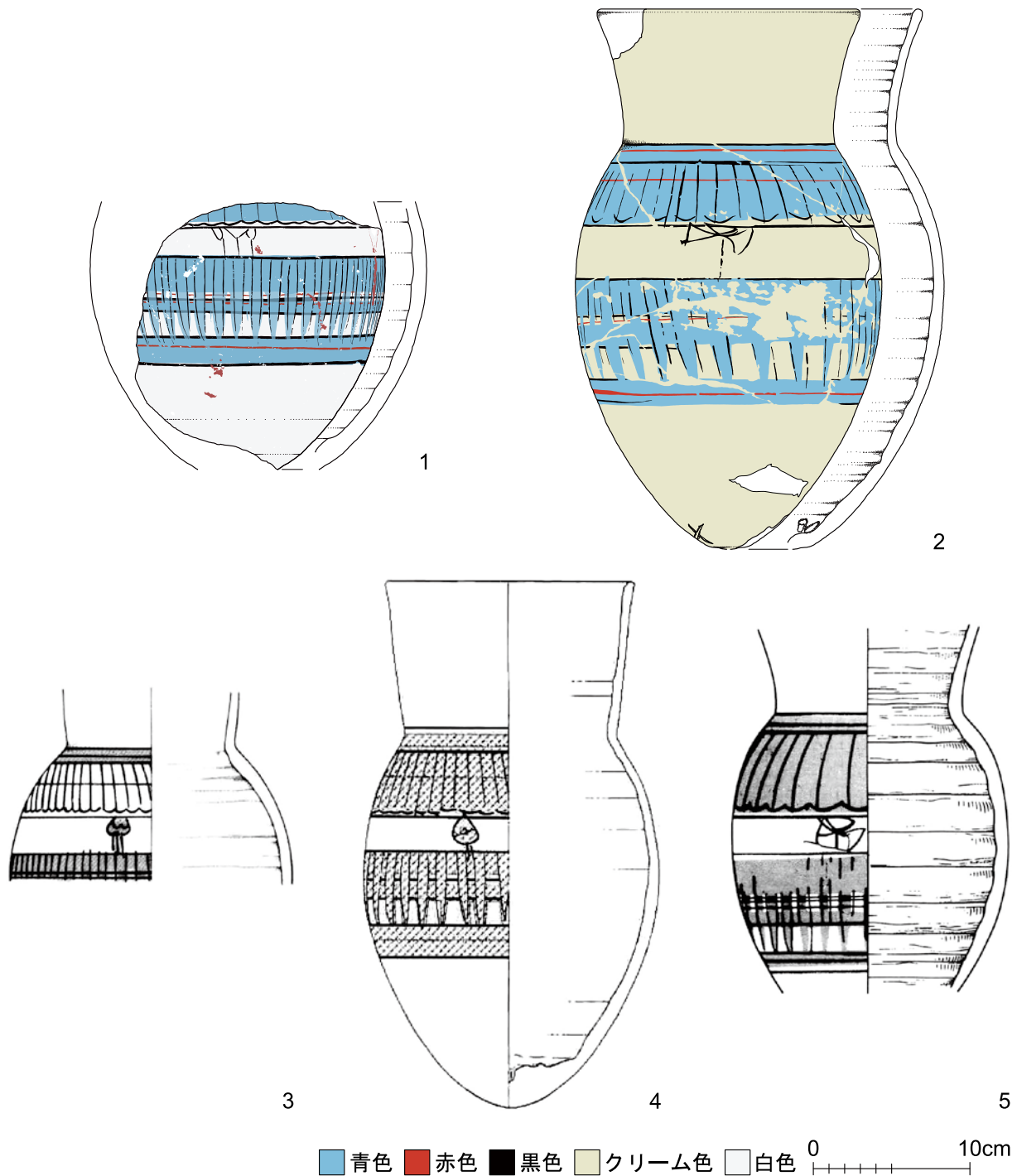


図4 第18王朝後期アマルナ時代のダハシュール北遺跡および周辺の遺跡の青色彩文土器  
 1: ダハシュール北遺跡 (本稿図 1.1)、2: アブ・シール南丘陵遺跡 (Takahashi 2014: fig.7.1)、  
 4, 5: サッカラ・ホルエムヘブ墓 (Bourriau et al. 2005: fig.25.134; Aston, B. 2011: fig.VI.27.219)、  
 6: メンフィス (Bourriau et al. 2000b: fig.2.9; Hope 2016: 72, no.6119)  
 Fig.4 Blue-painted pottery vessels dating to the Amarna period from Dahshur North and surrounding sites

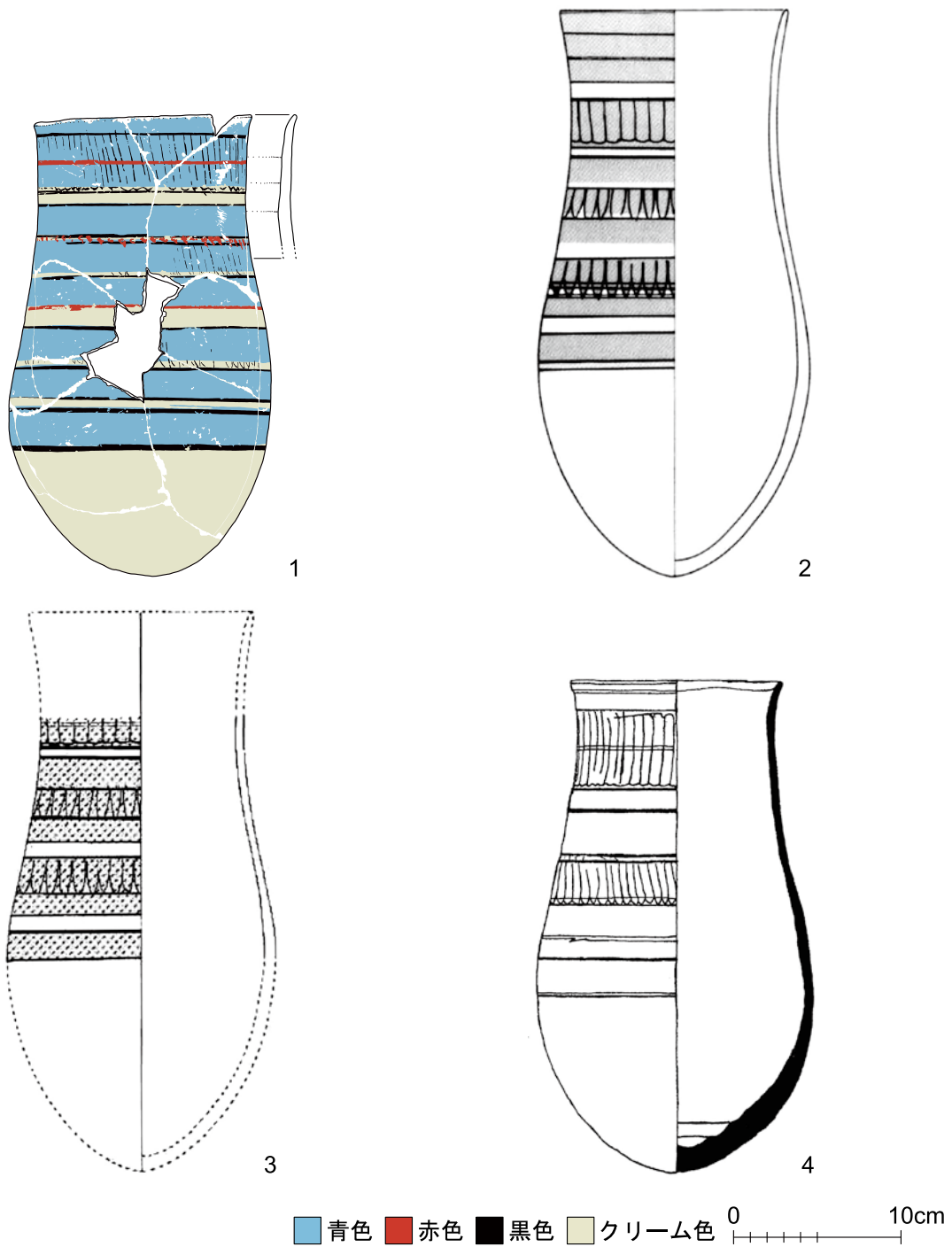


図5 第18王朝末ポスト・アマルナ時代のダハシュール北遺跡および周辺の遺跡の青色彩文土器  
 1: ダハシュール北遺跡 (本稿図 1.5)、2: サッカラ・ホルエムヘブ墓 (Bourriau et al. 2005: fig.23.126)、  
 3: サッカラ・マヤとメリト墓 (Aston, D. 2011: no.54)、4: グラーブ (Thomas 1981: pl.9.187)  
 Fig.5 Blue-painted pottery vessels dating to the post-Amarna period from Dahshur North and surrounding sites

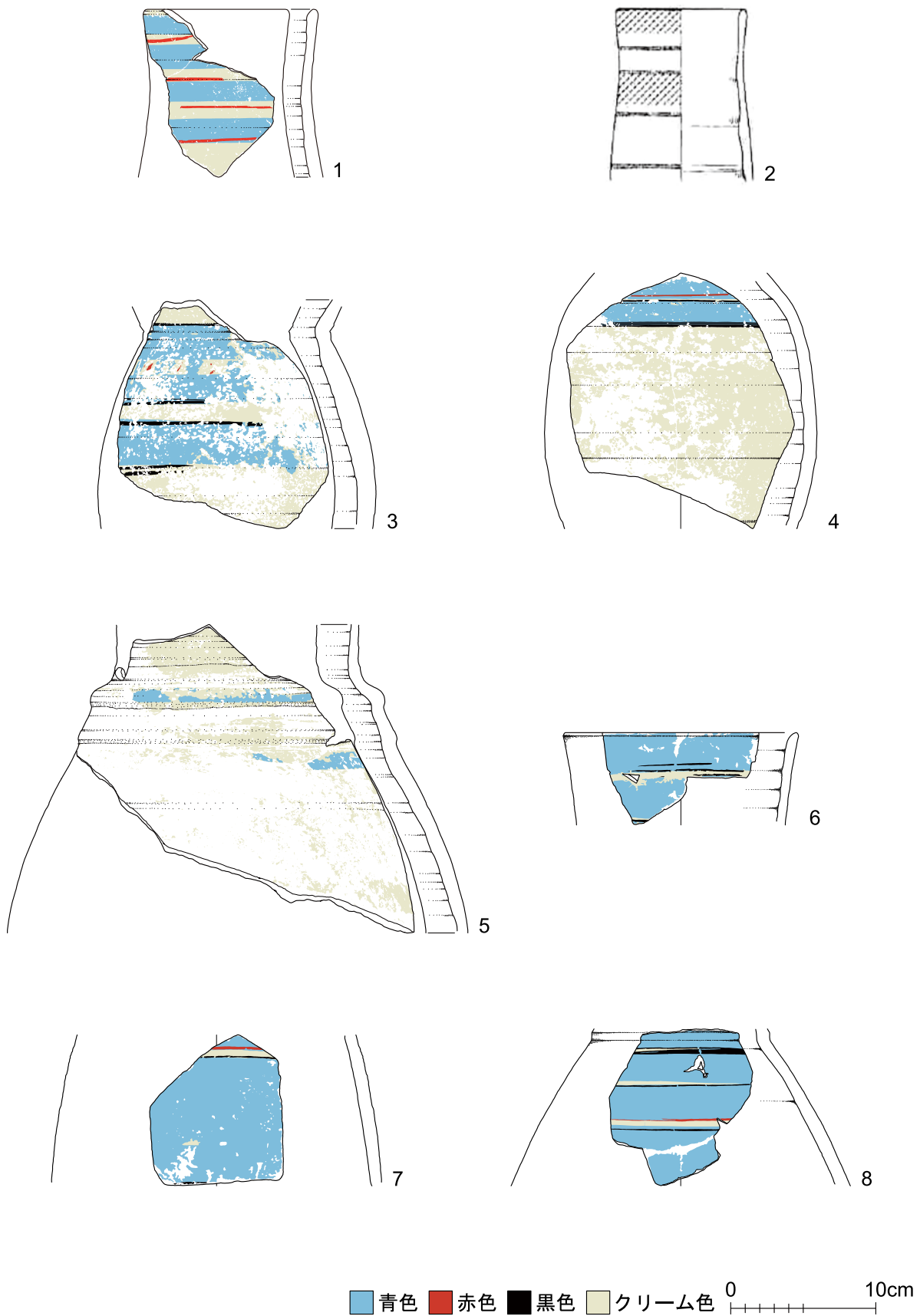


図6 第19王朝中期ラメセス2世時代のダハシュール北遺跡および周辺の遺跡の青色彩文土器  
 1: ダハシュール北遺跡 (本稿図3.1)、2: サッカラ・イニウイア墓 (Aston, B. 2012: fig.VII.30.208)、  
 3-5: ダハシュール北遺跡 (本稿図3.4, 6, 7)、6-8: アブ・シール南丘陵遺跡 (Takahashi 2014: fig.8.2, 4, 5)  
 Fig.6 Blue-painted pottery vessels dating to the reign of Ramesses II from Dahshur North and surrounding sites



## 5. おわりに

本稿では、筆者が調査を行なったダハシュール北遺跡の青色彩文土器について、報告を行うとともに、年代と生産に関する考察を行なった。年代については、第18王朝後期アマルナ時代、第18王朝末ポスト・アマルナ時代、第19王朝中期ラメセス2世時代に年代づけられることを述べた。また、周辺のアブ・シール南丘陵遺跡やサッカラ出土の青色彩文土器との比較を行い、アマルナ時代以降、特に第19王朝では、胎土、器形、装飾に違いが見られるようになることから、それぞれの地域で青色彩文土器を生産していたと結論づけた。筆者は、すでにエジプト全土の青色彩文土器の比較から、第19王朝では、カンティール、サッカラ、アビュドス、ルクソール、エレファンティネなどにおいて、地域ごとに青色彩文土器が製作されるようになった点を指摘したが（高橋 2019b）、今回の考察によって、アブ・シール南丘陵遺跡、サッカラ、ダハシュール北遺跡などのような比較的距離の近い場所においても、それぞれの場所で青色彩文土器が生産されていた点を指摘することができた。

## 註

- 1) これまでのダハシュール北遺跡におけるイバイ墓および周辺の発掘調査の概要については、以下を参照（吉村他 1988, 1999, 2000, 2001, 2002, 2004）。
- 2) 本稿を著するにあたり、吉村作治・東日本国際大学学長、近藤二郎・早稲田大学教授、馬場匡浩・早稲田大学研究員、矢澤健・東日本国際大学客員教授より資料発表の許可をいただきました。調査研究は日本学術振興会科学研究費・若手研究（B）「古代エジプト、青色彩文土器の生産と流通に関する考古学的研究」（研究代表者：高橋寿光・東日本国際大学）の助成を受けて行われました。ここに記して感謝いたします。
- 3) 土器の胎土に関しては10倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った（Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000a: 130–132）。土器の器形に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、不自然な日本語であることは承知しつつ、便宜的に名称を付した（Aston, D. 1998: 41–51）。
- 4) このようなマークに関しては、C. ホープ（Hope）が絵師、工房、内容物、特別な供物を示したものの、などの様々な可能性を挙げている（Hope 1999: 122–133）。また、P. ローズ（Rose）は青色彩文土器を装飾した絵師を示した可能性を指摘している（Rose 2007: 24–25）。類似したマークは、サッカラ・テティ王墓地の例に見られ、この例では2つのアंकの間にロータスが書かれている（Kanawati et al. 1984: pl.45.S83:65）。ダハシュール北遺跡の例では、アंकとロータスがやや省略して書かれていると考えられる。2つのアंकの間にロータスが書かれた例は、他にもカルナク北に見られる（Hope 1999: fig.3.o1, o2）。
- 5) 青色彩文土器に開けられた孔については、儀式に際して開けられたと考えられる（高橋 2013, 2019a; Takahashi 2019）。
- 6) Petrie 1890: pl.XXI.41; Thomas 1981: pl.9.187
- 7) Petrie 1890: pl.XXI.50; Brunton and Engelbach 1927: pl.XXXIV.22N
- 8) 北東-南西軸の掘り込み（長軸約130cm、短軸約30cm）の南西端に据えられるようにして出土している。北東側には頭蓋骨片、南西側には足の骨片が出土しており、またビーズも発見されている。出土遺物や掘り込みの大きさなどから、子供の単純埋葬であったと考えられる。埋葬自体はすでに盗掘されているものの、出土状況から土器は元の位置を保っていると考えられる。なお、類似した子供の単純埋葬に伴う青色彩文土器は、サッカラ・ホルエムヘブ墓の南側からも発見されている（Aston, B. 2011: 250, 252, fig.VI.29.233）。
- 9) なお、アマルナでも類似した器形と装飾の青色彩文土器が出土しているが、J.D. ポリオウ（Bourriau）らによる胎土分析の結果、メンフィスとは異なる胎土が用いられていたことが明らかとなっている（Bourriau et al. 2000b: 12）。
- 10) J. ブドカ（Budka）も、アビュドスの第19王朝の青色彩文土器について、在地で製作された可能性を提示している。ただし、ブドカは更なる検討が必要で、また一部ルクソールなどから搬入された青色彩文土器があるのではないかと述べている（Budka 2006: 113）。また、シリア・パレスティナ地域、イスラエル北部のハツォル遺跡では、胎土分析から、在地の胎土で青色彩文土器が製作されたことが確認されている（Nataf 2014: 26–27, fig.3）。

## 参考文献

Aston, B.G.

- 2011 “The Pottery”, in Raven, M.J., Verschoor, V., Vugts, M. and van Walsem, R., *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander in Chief of Tutankhamun V: The Forecourt and the Area South of the Tomb with Some Notes on the Tomb of Tia*, Turnhout, pp.190–303.
- 2012 “The Pottery”, in Schneider, H.D., *The Tomb of Iniuiia in the New Kingdom Necropolis of Memphis at Saqqara*, Turnhout, pp.139–217.

Aston, D.A.

- 1997 “The Pottery”, in Martin, G.T., *The Tomb of Tia and Tia: A Royal Monument of the Ramesside Period in the Memphite Necropolis*, London, pp.83–102.
- 1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I, Teil 1: Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.
- 2011 “Blue Painted Pottery of the Late Eighteenth Dynasty: The Material from the Tomb of Maya and Meryt at Saqqara”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne* 9, pp.1–35.

Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.

- 2000a “Pottery”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121–147.

Bourriau, J.D., Smith, L.M.V. and Nicholson, P.T.

- 2000b *New Kingdom Pottery Fabrics: Nile Clay and Mixed Nile-Marl Clay Fabrics from Memphis and Amarna*, London.

Bourriau, J., Aston, D., Raven, M.J. and van Walsem, R.

- 2005 *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-Chief of Tut'ankhamun III: The New Kingdom Pottery*, London.

Brunton, G. and Engelbach, R.

- 1927 *Gurob*, London.

Budka, J.

- 2006 “The Oriental Institute Ahmose and Tetisheri Project at Abydos 2002-2004: The New Kingdom Pottery”, *Ägypten und Levante* 16, pp.83–120.

Hope, C.A.

- 1999 “Some remarks on potmarks of the late Eighteenth Dynasty”, in Leahy, A. and Tait, J. (eds.), *Studies on Ancient Egypt in Honour of H.S. Smith*, London, pp.121–146.
- 2016 *The Survey of Memphis X: Kom Rabia: The Blue-Painted Pottery*, London.

Kanawati, N., El-Khouli, A., McFarlane, A. and Maksoud, N.V.

- 1984 *Excavations at Saqqara North-West of Teti's Pyramid*, vol.I, Sydney.

Minault-Gout, A., Favry, N. and Licitra, N.

- 2012 *Une Résidence Royale Égyptienne. Tell Abyad à l'Époque Ramesside*, Paris.

Mynářová, J.

- 2006 “Abusir - New Evidence for the New Kingdom. LA 5, Tomb A, Shaft 1 - Blue-Painted Pottery”, in Bárta, M., Coppens, F. and Krejčí, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2005: Proceedings of the Conference Held in Prague (June 27 - July 5, 2005)*, Prague, pp.74–82.

Nataf, K.C.

- 2014 “Egyptian-Style Pottery Dated to the 13th Century BCE at Hazor, Megiddo and Lachish: Corpus, Ware Fabrics and Typology”, *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 6/3, pp.22–36.

Nordström, H.-Å. and Bourriau, J.

- 1993 “Ceramic Technology: Clays and Fabrics”, in Arnold, D. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143–190.

Petrie, W.M.F.

- 1890 *Kahun, Gurob and Hawara*, London.

Rose, P.

- 2007 *The Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*, London.

Takahashi, K.

- 2014 “Blue Painted Pottery from Northwest Saqqara,” in Kondo, J. (ed.), *Quest for the Dream of the Pharaohs: Studies in Honour of Sakuji Yoshimura*, Cairo, pp.115–133.
- 2019 “Blue-Painted Pottery with Intentional Holes and/or Breakages After Firing in North-West Saqqara”, *Bulletin de Liaison de la Céramique Égyptienne* 29, pp.85–99.

Thomas, A.P.

1981 *Gurob: A New Kingdom Town*, 2 vols., Warminster.

高橋寿光

2013 「青色彩文土器の破壊の意味について」、『吉村作治先生古稀記念論集—永遠に生きる—』、中央公論美術出版、pp.305-313.

2019a 「古代エジプト、新王国時代の青色彩文土器の再利用について」、『古代』第145号、早稲田大学考古学会、pp.79-93.

2019b 「古代エジプト、新王国時代の青色彩文土器の生産地の増加について」、『オリエント』第62巻第2号、pp.122-142.

吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川 武、西本真一、柏木裕之

1998 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—1997年第1・2次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第11巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.109-120.

吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川 武、西本真一

1999 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—1998年第3次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第12巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.137-149.

2000 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—1998～1999年第4・5次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第13巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.101-111.

2001 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—2000年第6次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第14巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.49-60.

2002 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—2001年第7次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第15巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.91-106.

2004 「エジプト ダハシュール北遺跡における早大隊の考古学調査—1997年～2002年の発掘調査から—」、『早稲田大学人間科学研究』第17巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.119-132.

早稲田大学エジプト学研究所（編）

2007 『聖なる丘の発掘：アブ・シール南〔III〕』、株式会社シーズ・プランニング.

エジプト学研究 第26号

2020年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.26

Published date: 31 March 2020

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist